

時頃ブタベストの旅亭に着す

第五章 ブタベスト着より維也納發の準備に至る

七月十四日晴今日は陸軍學校一見の約あるを以て午前八時少尉某來る即村田氏を連れ共に行く校舎頗る壯大なりコロネル某出迎ふ校長なり講堂、寢室、食堂等清潔にして頗る完備せり只諸器具の類遠く埃國に及はざるか如し馬屋を下層に置くは埃國騎兵營に異ならず而して馬屋の上層に調馬場を設くるか如きは一奇なり其れより學校付の園を見る頗る廣く樹木繁茂し深山に入るか如し園の片邊に圓形の石塔あり往昔此地を所有せし貴人此所にて刺客の爲に斃れし事あり其紀念碑なりと云ふ體操場甚たよろしからず生徒の技の活潑ならざる可知なり游泳所あり頗る壯觀蓋し世界第一なるべし大なる井戸を堀り水をタ、へ置き蒸氣器械を以て泳場に注ぐなり四方は皆衣を脱する所にして水溜長さ七十メートル幅は三十メートル位セメント製にして水清し又池あり橋梁の稽古の爲め設る所なり十二時歸る少尉と共に食す三時よりフタ丘上の砲臺を見るの約あれは少尉と共に行くコロネル某鐵橋向ひの屋に待つを以て同處に立寄り同行す丘上迄馬車にて登る壘門に到れば番兵門を開けり釣橋ありて門は常に閉せり砲兵之れを守る少尉出て導を爲し夫れく一見す盡く石造にして砲門を開けり千八百五十年の建築の由四十八年匈牙利の亂平定後建築し専ら内亂鎮壓の爲めに設けたるも

の、如し古式にして迂遠なる所多し砲亦舊式なり此の所眺望絶佳多惱、丘の腰を回り四面皆望むべし舊城即現今王の宮殿となる所は眼下に見ゆ徒歩にて丘を下り河岸に到れば有名なるトルコ湯あり此の邊都て温泉あり昔トルコ此の地を奪ひ居たりしか其後匈人トルコを逐ひ回復せり此のトルコ湯は其の遺風を存せしものなりと云ふ男女混同にして多くは病人の入浴する所なりと云ふ岸邊入浴場多し皆美麗なり余等外より窺ふ而已此の所より馬車にてホテルに歸る晩に新聞記者面謁を乞ひ來る過日余の原行の留守來り柴氏に面會せし人なり自由新聞なりと云ふ暫時咄して歸る寫真及當地の歴史四十八年亂の巨魁某の著書を求む

同十五日晴今日は發足に付農務省に行き禮を述べ次官に面せんと欲せし所未だ出勤せざるを以て名刺を置き歸る博物館に行く頗る壯大なるものにして古代の品を藏する多し古代の石器、銅器、鐵器と順次に配列す多くは古城より出たる品なり匈奴遺物多し館中尤可賞ものは礦物、動物の二種なり此の二ツのものは他國にて未だ見ざる處なり館長は老人なり懇切に説明せり、歸り食後醫學校に行き教官某に面し丹波氏の爲に禮を述べんと欲す未だ出勤せざるを以て名刺を置き歸る午後六時發の汽船にてブタベストを發す夜月白く風清し十五世紀の頃今極樂と稱せし古城ある邊り坡翁石壁の思ひあり余此の行頗る思慮を費す所あるを以て詩思の如きは索然たれば景色に耻る甚し即拙什を賦す

船破空明行似矢 嶢嶢來迎又相迎 荒涼遙認山頭壘 云是當年極樂城


同十六日晴船中イタリヤ人及獨逸人某に面す獨逸人は日本にも來りたる人の由現今セルヒーヤの書記官たりと云暑中の休暇に付歸省すると云午後二時半維也納に着す棚橋氏船渡迄來り迎ふ先のホテルに着す夜海軍中尉山内氏來る同氏は奥國の海軍に入り修業中なり伶俐にして意見可なり

同十七日晴今日はシハルテンホルク公の領地見物の爲め同公の招待を受く公は貴族中稀なる財産家にして奥國三十一分の一を領し歳入八百萬圓なりと云城七ツを有する由なり三時より棚橋氏夫婦來る同人も余と共に招かれたるなり山内氏も見送り來る獨逸路に當るステーションに行き山内氏に別を告ぐ同氏は三四日の滞在にて地中海の軍艦に歸る筈なり七時頃公の領分なるピツチカラーに着ステーションに至れば公の家從二人馬車を備へて出て迎ふ即烈して公の城に至る此の所は公の住居に非ず時として來り住せらるゝと云暑中は田舎の城に輪住せられ冬は維也納に住せらるゝと云路傍人民群を爲し余か輩を見物し多くは帽を脱し禮を爲す質朴なる事可知なり八時晩食出つ二人の家從主となる也今朝郷信達す五月廿八日出なり一家皆無事は甚た喜ふと雖も國澤の老母君及澤村の老母君病死の報あり國澤は七十有餘澤村は七十六歳には不足なし山の内御與様次第に御衰弱の報あり次て又電報來る山内公病死西郷氏歐洲へ出發山縣氏本省の事務を取ると云ふ山内公の病死は恐くは公に非ず夫人の誤なるべし萩原氏の書面も今日落手す昨獨逸を出てたる書也郷信を讀返す事數度仍て口ずさみして曰く「くりかへし又まきかへし幾度かこゝろしてよむ妻の玉つさ」十一時寢に就く

同十八日陰午前此日曜日に付城付の寺を見物す宗教の勢力猶ほ盛なり八時より養魚場を見物す區々に分ち各種の魚を入るゝなり魚は鯉、鮒、鰻其他三種一はコノシロの大なるが如きもの一は日本のエンの如きもの一はなまづの如きものなり皆凡そ一尺位なり池所々にありて其の中にて取りたるを圍置く所なり魚獲掛りの男三四人スクイ網を携へ屹立す家從養魚の法を説く頗る聴くべし海老を養ふ所もあり水を乾して取る法也森林、田畑よりも養魚最利ありと云其れより森林を見る松及印度杉の類幾百萬本を不知山林の養は至れりと云ふべし皆平地にして山に非ず鹿多く其の中に住む公獵と云も可なり午前一旦シャトヲに歸る午後三時より又他の松林を見る大略前に同じ當地の松は能く高く延るなり又大に長き柏の木多し當地にては柏を以て樅とし殆ど木の第一とす水車を以て水を挽く處あり多家根を作ると見へたり今日は鹿を見る事十疋計午後八時歸る大なる煉化の建物あり人なきに似たれば其の故を問ふ答て云器械にて麥粉を作る所なり近時建築せしも露國、匈國の麥安直にして當地にて輸出せんとするも引合はず故に止めたりと云ふ建物大なる四層の樓なり六七萬圓の損なるべしと思はる

同十九日晴今日は沼池の最大なるものを見るの約あり八時より出つ池皆養魚の爲め設くる所なり設置頗る廣大なるものにして淡水魚業蓋し歐洲中の最なるべし河柳を作る所あり是れは維也納に出じ同所の工人手ツゲの類を製し賣り出すと云日本にて柳行季を作ると同様の仕事なり此事大ひに我

國に移し益あるもの、如し又一種の小養魚場もあり試験中の由なり又鶏を養ふ所もあり是は公一家の食用の爲なりと云其れより森林に入り又出て魚卵をキャサ令むる所に至る小魚水岸に浮ぶ其數千萬を不知此の法大に可なるに似たり沼池も四五にして輪換すと云へり二時頃歸る食後再び出てビール製造所及材木挽場に行く蒸氣仕掛にて大木を自在に板に作る事妙なり焚き物はノコック及木切の類を用ひ費用を減する仕法なりビール製造所の蒸氣は木の根及泥炭を用ゆるなり盡く公の領地より出つる物を用ゆれば頗る益あるか如し農具修膳所、牛乳ンボリ所、穀物試験所を見て七時半頃歸る近來日本流の肥料法を用ひ最益ありとて頓に積肥の法を行へり農事に至ては吾國超過する所多きか如し當地にては日本に習ひフン肥を用ゆる由なり歐洲中未だ人糞を用ゆるを聞かず他日必ず一般に行はるゝに至るべし余を接待する家従は一は山林、材木の事を擔當し一は農業、養魚の事を司る由なり皆學問ある人なりと云ふ言誇大にして如何と思ふ事亦不少通辯の誤り亦なしとせず二人の家從佛語に通せざれば棚橋氏一人の通辯にて不便極れり

同廿日晴八時馬車にて主人公の居城に赴く(ブルバイス)十一時頃某の村落に赴く人口三萬餘ありと云ふ此所に公の砂糖製造所あり蒸氣仕掛にて頗る壯大なり一日に凡そ二千噸の砂糖大根を滅し  如此大形の糖を製する二千箇計と云然らば頓に付一個を得るの割合なれ共斤目は分明ならず經濟の要點分明ならず口云ふ近來糖價下落して利益とならず故に其中幾分の器械を用ひ他は

皆休め居ると云ふ蓋しマルシヤル氏演述ありし如く他所へ輸出の目的を以て大なる製造所を造りたる所は一般に衰替の勢と見へたり已に前にも記せる如く麥粉製造所の如きは露及匈牙利の麥粉の廉價なるか爲め引合はねは建たる計にて廢せしと同様なり材木も近來獨逸にて保護税を高く掛くるか爲め利益薄しと云ふ本邦工業者注意せざるべからず同所を見終り凡そ馬車を馳る事三十分計にしてハムントウに至る城は大なる丘の突角にあり一面は丘續きなれ共三面は盡く眼下に見下し眺望最佳なり門に至れば若公及ひ孫二人出迎ふ直に銘々を室に誘ふ二時食室に至る老主出て迎ふ年八十七歳なりと云耳は遠けれ共體は健なり此の人家事の經營に力を盡し不毛を化して良田と爲し樹木を植へ多くの森林を作り益々富を重ねと云ふ現今埃國三十分の一を領すと云千八百四十八年の亂後政權を失ひしより其の姿大なる工業家の如し居城は四十年の星霜を費し荒建わづらの儘にて三百萬圓を費せりと云ふ中の裝飾等を算すれば凡そ八百萬圓を費せりと云ふ舊城は取り毀ち本の本丸の如き所に新に建築せるものにして其美麗實に驚くべし室中は木材の彫刻殊に精巧なり各室古代より近代に至る武器を飾れり埃國の宮殿に勝る事遠し皆石造にして厚サ凡そ一メートル五十計なり庭園も亦美を盡せり食後各室を夫々見物し馬屋に至る是も煉瓦にて廣大なる造築なり馬凡そ百頭計を入るべし現に在る所五十頭計なり其中寒中の調馬所あり四方の壁は皆ゴフランの織物にて飾れり天井の高サ凡八間計と思はる寒中草花及寒を恐るゝ木を入るゝ温室あり盡く鐵骨にしてガラス張なり城の近方は鹿、

兎の如きは澤山飼うと見へたり年に一度大獵ありと云ふ其の時は百餘騎にして盛なる事思はるゝなり其れより馬車にて動物乾置場に行く八十七の老人并に嫡子、嫡孫なり此の所は當城建築前假りに居住せられたる所の由にて随分大なる建物也鳥獸魚類其の數を不知多くは公の年來得たる所の物に係る巨大なる動物博物館にして一巳人の所有とは思はれず又生きたるタカ、フルツク、ワシの類七八羽并に狐、ムジナ、カラス、雁、家鳧の如きを養ふ又木材の参考物古塚より掘り出したる器物多し同所を見終り老人の培養せる樹木を見る皆五十年前の生育なり大さ凡そ三尺マハリ計なり木は柏と柳の類なり近邊悉く同家の領地なり人民は舊來の家來にして獨立の民に非ず役人を除くの外は農作牧畜の業に終身従事し小兒より此の事に従ひ日曜日寺に行き禮拜する外學問を爲す暇なきか如し都て田舎は教育なきが如し而して人は質朴にして人々皆帽を脱し禮を爲す感ずるに堪へたり蓋し家從の如き威權あるもの同行するによるるべしと雖も此の質朴の風は可喜の至なり七時頃城に歸り庭園を散歩し八時頃食に就老人不相變接待せり勤めたりと云べし十一時三十分の汽車にて辭し去る

同廿一日晴暑氣強し朝八時維也納のグランホテルに着す山内氏尋來る夕食を共にすべきを約し歸る七時頃山内氏再ひ來る共に晚食し食後公園に行き見物す我か淺草の奥山の如き場所にして種々見せ物あり當地夜は商家皆閉戸す只盛なるものはカヒー屋なり又市中賣淫女如織實に驚き入りたり夜十時より先き獨往來の女は盡く遊女と認めて可なりと云公園の如き殊に多し歐洲婦の不品行なるは

我か邦に優る數倍なる事は曾て窃に聞く所なりしが實に然り十一時頃歸る村田氏の月給三十圓を益す合せて八拾圓なり

同廿二日晴山内氏來る十一時頃歸る柴、村田兩氏は此度引移るスタイン氏の近の家引合に行く種田氏四時の汽車にて佛國に赴く同所に通辯を雇ひヘルムークにて取調る事有ればなり午前十時頃雷鳴雨降る暫時にして止み日出つ暑氣強し

同廿三日晴今日はハーテルズドルヘル三十六番地アルヘルトマイエルの宅に轉するを以て日用品を買はんと欲し十一時頃より出つ歸り掛け棚橋氏方に行き先日以來世話に成りたる禮を述べ留守にて妻君出て迎ふ直に禮を述べて歸る午後四時グランホテルを出て馬車にてハーテルズドルヘルに到る棚橋氏ホテル迄來る五時頃借宅に着す自ら自宅に入るの思ひあり維也納より馬車にて一時間計の距離なり停車場ありて閑靜なる村落なり家々避暑人の借る所と成るか如し又富家の別荘も多きか如し凡そ歐洲の風として暑中は必ず村落に避け又はスイスの如き地に旅するを以て無上の快樂とす余の借りたる所も階下は已に人の借る所と成れり室内を整頓し夕食に出つ停車場の傍の食店に至る雷鳴雨大に至る九時半頃歸る雨止む

同廿四日晴今日より朝食はパンに茶を家主に依頼して便す午、夕の食は外の食店に行く筈に定む十時三十分頃よりスタイン氏を訪ふ同氏邸内散歩中にて直に握手して室に誘ひ明後廿六日即月曜よ

り來り聽講を約す農務の事に付き講すべき日を英文に認め示さる柴氏通辯を爲すなり氏新聞を取り日本の歳出入豫算表を示し農商務省政費中更に農務に係る費目を示す只神奈川縣に馬牛改良の事に付費目を載するを見る甚怪むべきなり農商務省の仕事は種々あるべし而して費目の條分明ならず他日國會の起るに至らば必ず不都合を生ずべし云々其の見實に我が官員多數にして政費を徒費するの病に的中すれば他日順次に御不審に答へ御考を承るべしと答置きたり十二時頃歸る直に食店に行き食す午後三時頃スマイン氏子息を連れ余の寓を訪はる談一時間計にして歸らる此の時談次日本の兵事に至り氏云日本の陸海軍等の事は歐人の注目する所なれば兵數、艦數、兵政等の事を新聞に出しなは如何政略上にも必要なるべし日本の事知る人少き故少數の人の知るは大數の人の知るに不如大數の人の知るは新聞に不如と余村田氏をして概畧を佛文に譯し先生に出さん事を約す其他我が統計表を出し先生に示す先生善と稱し統計の必要を説く

同廿五日晴今日は日曜日に行行くべき所なし明日スマイン氏に質問の準備を爲す午食後山間を散步す樹陰閑靜にして清泉其の中を貫き幽邃可愛三時頃歸る晚食後再び散歩午食、晚食は必ず近邊に在る食店に就て食するを例とす此の所より維也納へ十キロメートル即ち我が二里半なり

同廿六日晴午後五時よりスマイン氏に行き講義を聞く講義は別に記すを以て此に略す此の先生の論は至極公平にして能く日本と歐洲の區別を分ち論を立つれば大ひに益あり近來流行の獨逸主義とは異なるか如し午後七時頃歸る

同廿七日晴今日は昨日講義の次第を考案す午後五時より又スマイン氏に行く農商務省と大政府の關係且立法官と行政官との權限、成立等の講義あり夜郷信を認む講義の清書を爲す

同廿八日陰冷氣秋末の如し今日はスマイン氏差間にて休業なり干雄に遺す手紙を認む本日郷信と共に出す

同廿九日晴午前九時よりスマイン氏に行く日本宗教と西洋宗教の談に涉れり西洋の寺には莫大なる領地あり大に施政に害あるを説けり説は別に記すを以て此に略す筆記にて示されたる條に付勘考の上質問を約して歸る今日冷氣昨日の如し

同卅日晴此の日は下田氏への手紙を認む

同三十一日晴今日室中の掃除を爲すに付出て樹下の椅子に寄り三月出發より四月十四日の日記を讀む來路を追懷すれば己に五閱月日月行矣の歎を起す未だ聞かざる事を聞き未だ見ざるものを見感す可き事多しと雖も政治道德の事に至りては別に妙策なきか如し而して東洋井田の法均田の主旨の如き公道は學者の未だ知らざる所社會黨僅に其の一端を取り未だ眞理を了知する能はず反つて社會を攪亂せんとす王道を知らざるの過ちなり余社會黨の首魁を見て王道を談せざるを惜むなり午食後散歩する事凡そ里許酒店に寄りビール二杯を傾けて歸る午後五時なり

八月一日雨今日は日曜に付維也納に行くの心組の所雨天に付き止む別に記事なし

同二日晴午前九時よりスマイン氏に行く氏横濱メール新聞記する所によりて農學を小學校に入るの事に付氏の談あり其れより農學の談話に移り今日は全く農學校所轄及設置の事に付質議を爲し十二時頃歸る談は別に記するを以て此に畧す陸奥宗光氏維也納公使、西園寺氏佛國公使に轉するの説メール新聞にある由石氏の咄しあり午後北山下の公園を散歩し六時頃歸る今夕は宿の内にて食事を作り食す調理可なり

同三日晴九時より石氏に行く談外務、軍務、大藏、司法、内務の五省を以て先として内務より又他の省を生ずる理由を解く説は別に記す當夜先生の招を諾して十二時頃歸る午後七時頃より再石氏に行く氏出迎へ共に庭園を歩し其れより食卓に就く妻君亦出づ種々懇談ありて十一時頃歸る今日は露國より電報達す今日露國が朝鮮に手を出せし談あり

同四日晴午前十時頃より維也納に行く昨日の電報の返事の爲めなり棚橋氏へ行き露の事を辨し午食はグランドホテルに於て食し午後七時頃歸る晩に片山氏來る共に晩食を爲す此日汽車にて佛國人某に面す某元は陸軍の工兵の士官なりし由余等を日本人と認むるより語を接するものゝ如し年六十六歳なり佛國より當地に來りたる由同氏は佛國の美術局の事に關係すと云日本美術の事に就て意見を述べ某の言に曰日本の美術は誠に妙なるもの多し然るに近年古風の妙所を捨て西洋の風を摸す

るに至れば西人多く之を厭ふに至りたり蓋し日本古來の美術は西人意想の及はざる所然るに自己の妙所を捨て他人の妙所を學はんと欲し他人の妙所述に學ふ不能而して自家の妙所已に失す實に日本の爲に取らざる所也陶器漆器等の摸樣古風の所甚た宜し然るに近來勉て新樣を作る新樣甚た拙にして古様に及はず西人好む所は日本古様の妙にあり而して近時日本人、西人の好む所を爲さず反つて好まざる所を爲す故に英、佛の市日本の雜貨狼籍して聲價を落す所以なり且つ古畫、古器の如きは重寶にして美術參考の必要なるものなり然るに日本敢て惜まらず多く海外に出すは美術進歩上の爲め惜むべき所なり羅馬の諺に遅く行くものは善く行と言ふ事あり日本も此の諺の如くせば宜しからんと暗に我邦の急進を戒むるものゝ如し余切に思ふ西人は奇を好むの僻あり故に我が東洋古物に至りては西人の目より見れば意想の及はざる奇妙あるべし日本人は反て其の奇孰れにあるを知らず卒に不知不知元質の妙を廢し日に非ず西に非ざるヌエ物を作り笑を殘し販路を塞ぐに至る歎すべきなり余近日露國に行き操練を見んと欲するを云氏曰く露國コサツクの砲兵は頗る妙なり必ず能く心を留て見るべしと曾てコサツクの騎兵の名を聞く砲兵の事を聞かず蓋しコサツク人能く馬を御す故に砲兵にも亦妙を得たるべし談半ばにして車維也納に着す名刺を村田氏に渡して別れを告ぐ氏はスマイン氏とも知人なりと云へり

同五日晴九時より石氏に行く今日は議員と行政官との權限及び定額金運用の權限を質す事は別に

記す十一時頃歸る午後四時頃柵橋氏來る露國より電報あるに由るなり來る十九日より露の大演習始むる由なり即ち十一日より當地を出發する事に決し露國岩倉氏に報す晩に散歩して溪間の食店に食す

同六日晴今日は村田、道家氏等は近方景色の地を撰むか爲め午前より出つ明日柵橋氏夫婦來訪の約あれば同行して食事を共にせんと欲せはなり余齒痛の爲め爽快を欠く

同七日晴陰半す九時より石氏に行く議案提出の手續を聞く記別により氏云露國人某は余の知己なり現時當地にあれば足下に御引合致し度明日午食の御約束致し置きたれば其の席へ同氏も招きたしと余願ふ所なりと禮を述べ露人は別人ならず去る四口汽車にて面會せし老人なり此の人は學者にて露國皇室の爲め美術物を集むる杯の事を勤むと云ふ日本美術に付き意見の事も徒然ならざるを知るなり午後より柵橋氏來る積りにて待と雖も來らず午後五時頃より約し置きたる酒店に就き晩食を喫し再馬車に駕し山間に入り見物して歸る雨少く降る樋田氏の報告來る

同八日陰岩倉氏より手紙着す二日認めなり大演習の事に就て掛合なり即ち手紙を認め答ふ今日は三時より石氏に招かれたりしに齒痛の爲に斷る柴、村田、道家三氏行余病の爲に辭するを以て石氏西園寺氏の贈りたる日本酒を送り來る此の日露人又石氏女色の談ありしよし二老人の言奇なるを以て記す露人云余二十五六年前頻りに埃國、イタリヤ、佛國、獨逸等に遊ぶに當り上は貴族より下は

遊女に至る迄驚く可き美人多し然るに近年に至り婦人の數昔日に異らす而して美人絶てなし維也納の如き殊に甚し過日も某公の招きに行きたるに貴女頗る多し而して一の美人なし又下等遊女の群集する所を見るに亦同斷なり僅々二十五六年にして美人の如此衰へたるは何の原因に依るや先生の說明を乞ふ石氏曰然り誠に貴説の如し上等社會の婦人に美人滅するは原因尋ぬべきに似たり昔日の貴女は多く學問教育ありて相對して談するにも美術の談あり學問の談あり自ら高尚なる風采を備へたれば艶色自ら摸寫し難きものあり近年に至りては女子集會の節談する所を聞くに衣服の摸樣なり他人の姿色なり又他男の自己を愛する杯を談するを始め皆自己の身上に關せざる事なし是れ一般教育の衰へたるに依るものと窃に歎息せり上等社會に美人なきは蓋し教育を失するの原因たるべし其のロツパリ社會の美人なきは余亦答辨に困むとて互に相笑たる由なり是れ兩人共七十年計の老人の戯談なり然れ共味ひある言なれば記し置くなり晩に至り齒痛猶止まず片山氏來る六時頃歸る

同九日晴齒猶全快に至らず朝、晝共雞卵を食する而已午後より家書を認む明後十一日露國に赴くを報するなり午後四時石氏來訪余の露行あるを以てなり余露行に付忠告を乞ひ曰く露と日本とは到底戰爭は避く可からざる事と思ふなり然らば君の此行は頗くは露國の軍事を目而已にて見す能く頭腦にて見られたし露兵の短所は散兵にあり蓋露兵は勇はあれ共智力に乏しく密集して戦ふ時は功ありと雖散戦に至りては最も拙なりとす近時セバストポールの役の如き密集隊を以て佛兵に當り佛兵

は散兵にて取り包み散々撃破りたる例あり露兵も今日に至りては散戦の利を知り力を盡すと雖も兎角此の點は露兵の短所なれば必ず十分ならずと思ふなり散兵の成不成は露兵進不進の度を卜するに足るものなり而して露國は頗るものを秘すの國なれば表面と裏面は反對の事多し軍事上の事も人に示す所は都合能き所にして都合惡敷所は決して人に示さず君も其の心して見たまへ貴國と戰爭するに至らば必ず朝鮮なるへしと思ふなり朝鮮の地は余は詳にせずと雖も必ず山川多かるへし然らば露國に用ゆる所の大砲は今日より詳にせざるべからず是等は御注意ありたし又陸兵は露と雖も五六万の兵は東洋に出す事は難し恐るへきは海軍なり願くは海軍も御注意ありたし是れ亦表面よりは内幕を御注意ありたし七八艘の軍艦を東洋に出すは露國の難しとせざる所なれば海軍の事最も大切と存す右に就て桂太郎氏に談せし事もあり日本の對馬は日本に取りて最も必要の所なり進て戦へは是れを以て足留りと爲さるべからず若し退て守るに至るも此を捨て彼れに與ふれば彼の足留りと成りて頗る不利なり朝鮮の巨濟島と對馬と露國の東端ソソフ港とは實に鼎足を爲して要地なりとす對馬の防禦如何なりしや甚た心配なり願くは同島を海軍港と爲し度く思ふなり余を以て見る時は貴國と露國と戦は決して避くべからず而して戰の起るは北海道に非す必ず朝鮮なりと且敦賀、下關等の海防を尋ねらる答へに困却せり家にして門戸なきは盜を誘ふの道なり國にして門戸なきは外敵の侮を受る固より其の所なり定約改正の今日に因循するも國の開明の度に在らずして兵力の足らざる

に由るなり歎せざるべけんや一時間計談して石氏も歸れり

同日晴暑氣強し明日出足に付荷物の片付を爲す齒痛大分宜し午後五時頃より石氏へ暇乞に行く醫師某來會暫時にして同氏歸る談漸く熟す日本大名の事に付田舎住居の利なる持論を石氏に正す石氏亦頗る同意なり而して君王、貴族に對し企望すべき箇條等の意見あり甚だ妙なり論遂に人民に言論の自由を與へざる可からざるの理由に至る石氏我か十四五年の流弊を開き居るを以て余の意と些か差あり卒に談して官吏裁判及我彈正臺、大目付等の事に至る意盡きす日本の現況は言論の律八ヶ間敷が爲め氣力衰へ外患あるも痛苦相關せず何を以て國を守らんやと云に至り石氏亦大に然りと云へり孰れ露國より歸り細論を約し別を告ぐ

## 第六章 露國入國よりバルツヒー着に至る

八月十一日晴九時寓居を發す柴、道家兩氏送りて維也納の停車場に來る十一時五十分同所發の汽車に乗す暑氣強し北東に向て走る午後五時頃より雨降るタクテニツサーと云所にて旅行狀を改め荷物改む此の所露領の入口なり

同十二日陰六時バルツヒー府に着す舊ポータントの都府なり人口凡そ四十万と云此に大なる要塞ありヒクスルノ川に傍ひ頗る堅固なり兵隊亦多く屯す所々見物して十二時フラカーの停車場を發す



午後六時三十分グロドノに着す此は大村落なり兵隊も多く屯すと見へたり天幕數百を張り野營を爲す蓋露兵は暑中は皆如此と云露領深く入るに従ひ家屋多く木造なり田舎の屋の如き野蠻人の家の如く文明の様は地を拂てなし我國田舎の如きは露に比すれば最上等なり歐人東洋を自ずる野蠻の如き看を爲せり何ぞ料ん歐洲最大國の露にして如此とは由是言之文明は強武の言耳眞の文明は反て我日本本の如き而已或は喜び或は恐る

同十三日晴平坦なる原野を直走す他に見るべきなし木は只松と柳の一種なる白皮木而已土質は砂にして植物に宜しからず生ずる所蕎麥、燕麥、ヂヤカタラ而已なり間にアサを見る頗る小なり午後二時ルーカと云所に着す此の所は大村落にして煉瓦屋もたまにはありと雖も十中八九分は木造なり田舎に比すれば精巧なる而已午後六時十五分ベトルスブルク府に着す加藤書記官出迎へ共にグラントホテルヨロツハに泊す

同十四日晴岩倉氏同道にて外務省に行く卿は不在に付次官に面會す頗る温厚なる人物なり年凡そ六十計と見ゆ暫時對話し別を告げ同省中亞細亞局長を訪ふ此の局は亞細亞州の事は皆關知する由なり頗る權威ある官なりと云同氏に別れ歸る今般宮内省より余に付けられたる大尉某來る万事同氏の案内にて練兵場に臨む筈なり午後島の公園に行く岩倉氏病氣に付加藤氏案内す我か東京洲崎の如き所なり景色可なり其れより芝居のある園に入る此の所は木戸錢を取るなり別に妙なし十時頃歸る

同十五日晴今日は午食を岩倉氏の案内に付十二時より行く海軍中尉矢島某亦來る日本料理の調理甚た好し饅殊に妙なり食後に至り亞細亞局長來る余を尋ぬる積りなりしか此にて會したれば此れにて辭すと云ふ暫時談して歸る四時より兼て約束の競馬に行く鐵路一時間計なり岩倉、加藤兩氏同行なり競馬は士官、下士卒なり勝を得たるものは皇后自ら賞を賜ふと云賞は五百ルーフルより一万ルーフルに至ると云都合四切なり二キロメートルより四キロメートルを最長とす天子も出御に成りたり此の所今般演習の本陣なり大尉始終傍にありて世話せり午後八時頃歸る

同十六日晴午食は食堂に會す英の大尉二名デンマルクのコロチル一人なり此度來會する將官は英獨、佛、埃なりスエーデンよりコロチル來る由なれ共未だ着せず食後接待大尉の案内にて皇帝の寺を見る御歴代御遺骸を納めたり周圍は城なり突角には大砲を配置せり其れより武器陳列所を見る古代よりの武器を集むる事各國と異ならず而して他國に見ざる奇物多しペートル帝の着せられたる作業服あり皮にして質素なるものなり一見後再び島に行く前日已に行きたるを以て別に奇なし此の所より遙にクロンスタット見ゆるなり午後七時頃歸る齒痛に付晩食に出づる事能はず

同十七日晴終日齒痛下劑を用内通すと雖も痛み止まず蓋し胃病の反動なるべし終日食堂に出づる事能はず各國の將官皆着せる由當夜は接待掛りの案内にて孰れも音樂見せ物のある所に行くなり余同行する能はず遺憾とす夜岩倉、加藤、矢島氏等來る

同十八日晴午前九時より正服着にて過日競馬のありし所に行く野營せる近衛の營を馬車にて其々回覧し然る後分列式のある所に行く暫時にして諸王族來る帝の御叔父及御舎弟各國士官に御挨拶あり其れより皇帝、皇后宮御來場あり各隊の前を御通行ありて時々士官に握手の禮あり終て祭事始まる南向に臺を設け大小僧侶凡そ三十人計臺の左に整列す高僧二人臺の前にありて祭主と成る軍旗四本臺の後に列す即軍旗祭なり高僧二人の中一人は終りに至る迄大概帽を着す只一度脱帽するか如し始終讀經あり帝は高僧の後ろ三間計隔たる所に御直立なり親王六七人帝の後に列立す皇后及御息所は右の方即ち元の所に御列立なり祭り終り祭主の僧十字架を持って帝の前に進む帝亦數歩を進め十字架を舐て僧侶の右の手を舐む一人の僧水バチと筆の如きものを以て帝の手に灑ぐ帝は其の水を額に塗り手を上下して禮を爲す皇后以下皆同様なり間々僧侶の手を舐めざる人ある而已御一族の禮終りて僧侶は右の水を左翼隊より順に各隊に灑ぐ帝は始終僧の後ろを御歩行なり右終て分列式あり祭り中は皆脱帽なり分列式の終りより帝各國士官の前を通御ありて御言葉あり將官には握手の禮を賜ふ誠に御懇切なり其れより皇后宮の御前に出て握手の禮を賜ひ御言葉あり終て兵卒等へ祝酒を賜ふの場に入らせらる其れより御陪食を賜ふ終て諸親王へ禮を述へ休息所にて休み汽車にて府に歸り晩食後再び汽車にて□□□來宿す

同十九日晴午前九時より河ある所に行く中間の村落迄馬車にて行き其れより乘馬なり此にて帝を

迎へ奉り帝も亦此より御馬なり河の北岸にて帝も御下乗に付一統下馬す兩軍戦始る東軍進行西軍の河岸にあるものを追ひ拂ひ架橋に着す東軍砲を河岸に備へ架橋を守る砲兵、騎兵皆渡る進て敵軍を追ふ敵防戦し退却す最初乘馬せし邊に至り戦最も烈し西軍遂に退く東軍追て進む帝前の村落に於て御査食將官御陪食なり皇后も亦同席なり樹下にテーブルを置き露天の儘なり午後又演習を陪覽す四時頃還御に付一統歸る夜御食事を賜ふ終て古代の歌あり其の音妙なり十一時三十分全く終りて歸る宿は帝王村と云所の(以下記入なし)

同二十日陰午前九時馬車にて西方に行く帝王村を出れば東軍は已に村端に露營す其れより下車して馬に乗る皇帝の出御を待つ暫ありて出御なり帝も此の所より御馬乘なり行く一里計にして西軍の後衛占る所の高地にて一同下乗す皇后宮にも此の所へ出御なり暫時にして戦始まる西軍は高地を占め砲を配列し歩兵其の前面に散布し放射す全線砲聲盛なり已にして定めぬ如く西軍漸々に引く東軍の騎兵遙に前に顯る即御坐の邊に占る砲兵發砲を始む西軍は且戦且退く(此所にて婦人一人皇后の御坐の邊に近づき來るピンに入りたるものを(何か食物なり)献上の積りと見へたり續て又三人來る同様なり近く召て其の物を御受納ありて夫々へ握手を賜ふ其御懇切なる事驚くに堪へたり各へ物を賜しか如し土人の献したる物は近邊の兵卒に賜へり御午食の時も婦人三人大なるパンとバターをもち直に皇帝に奉り帝御親ら受させられ又物を賜へり婦人手を出し握手せんとす帝笑て握手し賜ふ

三人皆同じ又皇后の御側に行き同様なり皇后亦握手あり諸官驚かす皆笑ふ而已愚民を親愛し賜ふ事實に驚き入りたり今帝に至りては政畧一變し虚無黨の如きは強く歴し政事弘廓に基き賊徒に警戒を加へず所謂刺せは刺せ少しも恐れざるなり勢にて實に活潑なる御方なり如此勢なれば下民の親み奉る事亦深きか如し。終に西軍は退てクラスノエセロの前面の高丘を占め止て東軍を防ぐ此の所地形最も好し兩軍激戦已にして帝命にて喇叭を鳴さしめ休息せ令む此所にて御午食なり余等も御陪食す婦人三人來りしは此の時なり御食後直ちに御歸館なり御殿はクラスノエセロなり晩食亦同様に賜ふ出御にはならず當夜は此地に宿す

同廿一日晴本日午食後より陣地を順覽す馬車なり急造堡凡そ八ヶ所なり三日間にて落成と豫定するものなり間隔凡そ一キロメートル計なり各好位地を占む胸壁の後方に方凡そ七寸角計の穴を作れり小銃弾を入るゝ所なり銃眼は二メートルに三箇位に設く隨分重密なり砲は十センチメートル也東軍は凡そ四千メートルを隔てたりと思ふ位地にありて灣月形に西軍の設堡陣を圍むなり第三の堡壘に十五メートル高の梯を設く以て敵の動作を窺ふ爲めなり梯は車上に設け自由に伸縮する事を得るなり不用の時は縮めて車上に疊み四馬を以て引くべきなり其の他梯は各堡に設く此の伸縮梯は新造のものと思へたり平原の堡壘には蓋し必要のものなるべし第四堡には電氣燈を設けたり各大器見終り歸り掛けコサックの騎兵の技術を見る頗る巧なり馬上放銃等の技は最も可見佛のアフリカ騎兵と

其の技は互格なるべし然れ共馬は一着讓るものゝ如し活潑なる事は蓋し伯仲なるべし技を奏する事撤回にして終り宮に歸る今日郷信着す復讀再度一家の無事を祝す六月廿三日荆妻の認むる所なり

同廿二日晴今日は九時頃よりペートル府に行き同所ホテルにて午食を喫し食後汽車にてペトロフの宮園を見物す園は七キロメートルに五キロメートルなり曾て見ざる大公園なり所々噴水器あり清涼を極む宮殿亦美なり北海に面し樹木蒼々たり是迄各所に見る所の宮殿と大に其趣きを異にせり午後五時頃クラスノサローへ歸る食後芝居の御馳走に行き三幕計見物して十一時頃より守地を見物に行き帝も出御なり電氣作大砲放射、小銃襲撃、火矢放射等あり十二時後歸る今日勳賞を賜ふ

同廿三日晴八時頃より昨夜の所に行き此所にて帝を御待申上るなり帝御出馬に成り外國士官に御挨拶あり暫くして東軍より攻撃を始む初めは砲戦なり東軍次第に迫り卒に突撃し衆寡敵せず諸壘次第に敗る東軍は重密横隊にて太鼓、喇叭或は軍歌を奏し馳足にて壘に突入す整々亂れず且つ地形平原にして散兵の運動自由なるを以て頗る可見只重密甚しきに過るか如く實地の利害果して如何を知らず歐洲の戦には或は利あるべく又害あるべく而して我邦の如き山あり川あり又水田ある地に於ては此戦方は盡く無用に歸すべき而已進退の遲緩なる事も亦驚くべし我か山地に慣たる兵を以て之れに當る深く恐るゝに及はずと信す十二時頃全く休戦となる同所にて御陪食なり二時頃歸る三時半の汽車にてペートルスボルクに歸る晩食英將の演説あり

同廿四日晴今日はクロナスマットの砲臺を見るの積りの所許可なきを以て止む蓋し同砲臺舊は世界無双と稱すと雖も今日砲器改進に際しては堅固と稱し難かるべし余か如き東洋人に見せるは憚る所なかるべしと雖も英、佛、獨等の人に見せるは露人の欲せざる所なれば故らに許可なきを以て辭したるものと知るべし午食後製造所に案内する由なれ共辭して行かず公使館に行く明日接待掛を招くの相談を爲すため明夜ムスコウ府に行く事に決す晚食塊將の演説あり余亦拙辭を述べ村田氏佛語に譯す佛將亦次で演説す參會の士官當夜歸國する人多し岩倉、加藤兩氏來る加藤氏は村田氏と共に明日接待員を招く島の料理店に行く十一時頃歸る岩倉氏亦同時に歸る

同廿五日晴今日は當地發足の心組に付接待掛中佐ブイフ氏以下七名を島のベルヒツと云料理屋に案内す岩倉、加藤、大前、矢島氏等をも招く十一時半頃皆來る共に午食を喫す主客歡を盡し二時半頃別を告ぐ余等亦去て旅亭に歸る午後八時三十分の汽車にてムスコウ府に向ひ發す接待の諸氏送りにて停車場に來る中佐ブイフ氏は十時停車する所にて妻君と共に待つを約す英の大尉二名亦ムスコウに行くを以て停車場に會し英人の接待によりてシャンパンの饗あり即ち諸氏に別を告げ發す十時頃停車せし所中佐と共に來り別れを告ぐ他邦人に接するの深懇なる事感するに堪へたり十三分計にて別れを告ぐ寢臺に就と雖も安眠を得ず

同廿六日晴十時頃ムスコウ府に着すスラロヤンツキーバザールと云ホテルに宿す當地の大旅店を

り午食後王宮を見物す城門の内に武庫あり其外面に大砲七八百を配列す那翁ムスコウを攻て敗北せし時拾置きたる分捕物なりと云ふ其れより王宮拜觀の許可を得て入る規模の廣大驚くべきなり王宮なり寺なり兼ねたりと云ふも可なり政教一致の實を可見なり外郭は皆煉化石の塀なり所々に櫓ありて支那の城に能く似たり櫓には大砲の備へたる所もあり河水淺濼を爲し景勝の地なり市中の機支那風ありて他の歐洲の様に殊る所多し寺亦支那風のもの多し其れより當地の大寺を見て南方の山に行くムスコウを眼下に見て眺望殊に佳なり那翁曾て此岳に登りムスコウを睥睨せし所なりと云ふ暫時休息して歸り市中に至り寫眞及紙細工の塗物を求めて歸る食堂にて過日練兵場にて面會せし將官に面す互に挨拶を爲し別れを告ぐ當地警視總監より芝居に案内あり勞れたるを以て辭す

同廿七日晴今日は耶蘇登天の大祭日にて市中休息なり九時頃より祭見物の爲め寺に行く寺中充滿にて入る能はず警視次長ゼテラール某の指圖に依り鉤鐘堂に登り見物す寺は昨日の王宮に屬せる大寺なり此の寺王の即位式のある所なり傍に小寺あり是は王の婚姻の式を行ふ寺なり鉤鐘臺に待つ事三十分計にして付寺を出て列を爲し式を行ふ僧は盡く黄衣を服し凡そ三十名計前後に旗の如きものを建並へたり僧正は金冠を冠せり警視官禮服にて前後左右を固む人群を爲し皆帽を脱し三指を以て胸に十字形を空齎し拜を爲す歐洲の宗教猶勢力あるか如しと雖も露國の如く甚しきを見ざるなり人民寺門を通過する必ず帽を脱し指にて胸前に十字を空齎して拜を爲し過ぐ中等以下の者信者多しと

思はるゝなり十二時頃歸る食後知事及警視總監を訪問し其れより育兒院を見物す院長は婦人なり懇切に案内し盡く見物す子守は二兒に一人の割なり此院は年に八百の小兒を引受る由なり入費は年に二百萬ルーブルを費すと云貧困の者にして養育する能はざるものは持ち來らば受取る由なり捨子も亦同様此にて養ふなり又院内に貴女の學校あり高等の學科を授くと云ふ宗教を主とするものゝ如し規模盛るものなり同所を出て競馬場を一見しベトロンの宮畔にある公園を見る松樹の間に腰掛を設け客を待つ日本の茶酌み女の如きもの多く出迎ふ是れ露國の舊體なりと云ふ此にて茶を喫し午後七時頃歸る露國の茶は眞鍮の野風呂の如きものに湯を沸騰せしめ風呂底に湯口あり是れより茶ビンに湯を注ぎコップに盛り砂糖を入れて飲むなり露國はコーヒよりも茶を多く用ゆるなり支那茶と見へたり

同廿八日晴本日は十時より馬車を馳て農學校を見物に行く府より北に去る事凡そ一里半計なり規模廣大なれ共未だ整頓すとは思はれず提理案内して各室を巡見し農産試験所、樹木培養所等を見ず當校は山林學も兼ね教ゆる也今日は祭日に付休業にて生徒は一人も居らず化學室、理學室等も備はると雖も器械十分ならざるが如し匈牙利にて見し所の學校に及はざる事遠し當校は先帝の末年設立せられたる所にして今より漸く二十年前の創立なり教官亦不充分なる知るべし生徒室も増築最中なれば他日必ず盛大に至るべきなり當校は高等農學校にして大學校卒業生と其の位を同うすと云ふ

午後二時頃歸り掛け露國の先祖某王の出産の寺を見物す古物數種あり寺院小にして至て質素なり蓋露國の先祖はもと併なる由なれば今日に至るも政教一致にして宗教の勢力盛なるも所以あるなり食後市中に出て博物館を見る建築頗る奇にして廣大なり古物は多く塚中より出づる所の物にして石の世の物より銅鐵と順次に配列せり器物は多からず未だ全く整頓に至らざるか如し今日は休業の所提理に乞ふて特に許可を得たり小刀、毛皮、繪紙の類を求め午後六時頃歸る當府は古代の風を存し市街及寺院等もベトスブルクに見ざる所のもの多し支那町に似たる所多し蓋露國の古色なるべし市中は丸き小石を以て熨みたるものにして甚だ清潔ならず新に開きたりと思はるゝ町は西歐洲の如く市中に樹木を殖たる所も少々あれ共右様の所は甚稀なりベトスブルクも亦市に木を殖たるは稀なり市中に木を殖へ清潔に爲すは巴里蓋し其の魁にして近年の流行物と思はるゝなり今日は知事及警視總監の來訪ありし由留守にて會はず今日農學校の歸り獄屋の側を通り女罪人のカラフトに流さるゝもの百六十名計を見たり馬車にて行くものあり歩行のものあり或は幼兒を抱きたるものあり獄屋の外に親戚と思取ものもあり別れを告ぐる如き姿あり兵隊銃に劍を附し左右を衛もれり下士の如きもの『或は巡查』劍を抜き前後を守る女は四十以下の者と見へたり皆平常の顔色にて格別愁を含みたる様なし只一人泣き面にて神を拜し行くある而已此の徒は重罪にして人殺し及盜賊なりと云ふカラフトには女少き故女を同地に送る由案内者の咄しなりカラフトは如此重罪者の人間の生息する所と

せは實に恐るべき所と云べし露國近年に至り先帝頻りに學事に力を盡くされ大學校、中學校等規模大なりと雖も教育は上等のものに止り中以下のものは教育普からず僅かに宗教を以て人心を維持するものゝ如し此の人民にして宗教を信せざる時は猛惡怪むに足らざるなり西歐の風潮漸く東するに及ばず現時の政體を維持する事亦難かるべし可恐なり

同廿九日晴十時三十分ムスコウを發す天氣十月の候の如し車中見る所茫々たる平原と森林而已別に見るべきなし路傍倭屋稀疎皆小茅屋なり人民の貧乏ふべし専ら牧畜を以て生を爲すものゝ如し

同三十日晴午後三時フレストに着す午食す此の所大村落にして兵も多く屯するものゝ如し村外所々に野營せり村の周圍多く砲壘を築けり陸軍の倉庫亦許多あり常道の要所と見へたり午後八時半パルツヒーに着す此にて車を替ゆるなり

### 第七章 再度の奥國入國より維也納出發に至る

八月三十一日晴午前五時四十分クラニチサヒチヤコヒーと云所にて旅券を改むるなり此の所奥國の領にして露との國境なり荷物は一驛前なるヒチヤコヒーと云所にて改む六時三十分頃トレチヒニアモと云所にて一時間餘停車す此にて茶を飲みパンを食す奥國に入れば農家も自ら歐風ありて露領農家の比に非ずパルツヒーは舊波蘭の都府にして波蘭人二十萬猶太人十萬露人五萬ありと云大河を

挟みて市街を爲し盛大なりと雖も市街清潔ならず昔は盛なる王國なりしも近年に至り露、獨、奥三國の分領する所と成り首府は即ち露の掠むる所と成れり可憐なり午後四時二十分維也納の停車場に着す柴、道家氏等來り迎ふ直に車にてピチンカフの寓居に歸る同姓重喜の凶報を得たり終夜眠る能はず

九月一日晴今日は郷信を認むる爲め終日出てす曾我氏より手紙來りたれば返書を認む

同二日晴十一時より石氏を訪ふ一時頃歸る此の口信書を出す

同三日晴十一時より石氏に行く昨日の咄し續き地租の講義あり別に記す此の日官報を閲し山内公の凶報の確實を知る夫人に非ずして即公なる事明なり驚愕に不堪電報を以て御見舞を出す

同四日晴腸胃病にて石氏の講義を休む終日出てす英國へ手紙を出す

同五日晴今日は日曜なり不心持に付終日出てす

同六日陰今日も不勝にて石氏を休む午後二時頃より雨降る暫時にして止む片山氏來る石氏亦見舞として來る今日郷信着す妻の書にて山内公の病症カツケなる事を知れり林、日野兩名にて公の御病死の知らせ來る樋田氏の手紙をも落手せり

同七日晴今日は萩原氏、片山氏と共に來る余の手紙を落手して發すと云ふ共に晩食を喫し十一時の汽車にて歸る

同八日晴午前十時頃萩原氏來る胃病の診察を受く午餐を共にし四時頃より歸る道家氏同行して藥を取り來る

同九日晴心持宜しからず午前山林を散歩す

同十日晴今日も心持宜しからず午後スマイン氏、河島、中村氏等共に來る余にカルスパットの湯治を勸む即ちスマイン氏の説に従ひ湯治に決す同氏電信を以て湯場の都合を問合せ呉る、管なり村田氏同氏と共に其宅に行く河島、中村兩氏止り談話熟す晚餐を例の食店に共にす

同十一日晴朝快通丸一粒を腹す久敷通しなきを以てなり午後村田氏維也納に行き藥を取り來る例の礦泉と一種の水藥なり今日は午後一時少く通す少しく心持宜し四時頃スマイン氏來る余睡眠中に會せず晩に柴氏と同道にて釣魚に行く小魚十四五を得て歸る夜快通す

同十二日晴今日は心持宜し通しありし故なるべし午前十二時頃より散歩す歸り掛け例の食店に寄りて午食す午後四時頃より萩原、片山氏等來る晚餐を共にし十一時頃歸る今日スイス留學の村田氏に手紙を出す英の佐々木氏より返書着す片山、萩原兩氏來る十一時頃歸る

同十三日晴今日も大分心持宜しカル、スパット入湯に付スマイン氏へ暇乞に行く日本官吏多數なる事に論及し種々の忠告あり我省官吏の數八百計もあるを開き同氏も驚愕せり日々何等の要用ありや百人にて十分なるべし兎角人を撰び任するに非されは多きも何の用を爲んや右に付種々質疑の事

もありて二時間餘を費せり一時頃歸る四時河島、中村氏來る六時頃歸る夜散歩月明に風清し秋氣を覺ふ

同十四日晴風吹く秋の候を覺ふ午後七時二十五分ハテンホルクの停車場を發す萩原氏來り送る宿の主人夫婦並に老嬢亦送停車場に到り別る柴、道家氏等同車して維也納のスタツハンホッフの停車場に到る余村田氏を連れ此より乗す片山氏亦此の所迄來り送る九時十五分スタツハンホッフを發す柴、道家、片山、萩原氏等と別れを告ぐ車室は六人乗りの所へ兩人をれは至て廣し車窓明月を納れ白日の如し十一時頃と思ふ頃頻りに隧道を走る車道總て山間に在り景色頗る佳なるを覺ふ

同十五日晴午前七時フランクと云所に着す此地埃國都府の一にして市街亦佳なるか如し驛の口に輜重隊の練兵せるを見る車輛は農作に用ふる荷車の如し此所に兵隊も多く屯するものと見へたり此にて茶を喫し八分間にして亦走る午前十一時二十分カル、スパットのシュロスラツ、ハウスマメリカと云旅店に投す午食後市街を散歩す四時より醫官アヘレス氏來るを以て宿に歸る暫時にして氏來る診察を乞ふ腹部より脊中及口の中を見る氏云齒痛は自ら別種にして胃病と連帶するものに非ず常の體別に故障なし只胃病ある而已一旦此地に浴し鑛泉を服すれば必ず癒ゆべし然れ共願くは來三月四月の頃今一度來浴めらは完全なるべしと余や悠々日月を閑却すべき身に非ず只黙して止みたり入浴は三日に一度服泉は毎朝一回或は朝夕二回を超ゆべからず毎朝一時間計散歩して後ち茶を喫すべし

食は鳥肉、牛肉、雞卵、ジャガタ芋のツブセシもの人參の類に限るべしと指圖せり午後七時散歩し食店に入り喫食して歸る此の地四面皆山にして一溪其の中を迂回し樹木鬱々我か箱根湯本より塔ノ澤の趣きと頗る相似たり市街溪に傍ひ煉化石造にして三層或は四層なり清潔にして美麗なり陶器及玉石を集めて章を爲せる器具名物なり其の他地の名産を陳列する店軒を連ねたれば美麗巴里の雜貨陳列場に入るが如し浴客座ながら各地の名産を求むるを得るなり又所々に人身の量を計るの器を備ふ是れ浴客入浴の功によりて目方を増すを試むる爲めなり一人前二三錢なり余亦試に量り見るに三月前に維也納にて量りし時よりは減少せるを覺ふ晩に雷鳴雨降る

同十六日晴七時より起き先づ温泉場に行く飲泉と浴泉は自ら場所を異にし飲泉は日本の龍の口の如きものより出づ飲者の雜沓を防ぐ爲め巡查一名番を爲し兩小女酌て客に與ふるなり客は順序に飲料を得て立ち飲みするなり各コップを携ふコップは皮ヒモを以て肩より掛け下くるなり已に飲み一時間餘運動を爲し後茶を喫す其れより陶器製の花數種を買ふ又奇石製の器物數種を買ふ孰れも精巧を極む午食後再び市街を散歩す冷氣秋末の如く月色甚た佳なり十一時頃寢に就く

同十七日晴例に依り七時より起き飲泉に赴く寒氣十月の候の如し飲終て散歩例の如し喫茶亦例なりスイスより出店のヘルン製の彫刻もの三四を買ふ價存外に高し午食後前山の車馬道に至り夫れより遂に溪水を遡り幽邃の所に入る路に洋人夫婦にして弊をかくるものあり村田氏談判す佛人公爵に

して英の某港の領事なり十年前日本に到りしよしにて日本を譽む蓋し佛人は歐人中にて最も我國人を親むなり余等亦佛人に遇へは殊に親みあり暫時立談して別れを告ぐ所々散歩して日暮ホテルに歸り喫食伊藤氏への手紙を認む十時寢に就く車道はパノラマストラムと云

同十八日晴午前七時例の如く飲泉に赴く散歩の後喫茶す歸り山縣氏宛及家書を認む伊藤氏への書と共に出す午後五時頃より再び散歩す今日は醫師も来る今日より飲料を一椀増加せり泉も亦別泉なり氣分已に爽快を覺るなり

同十九日晴少々朝眠を爲せり時計已に八時に至れり即急に裝束を調へ出づ飲泉昨日の如し今日土地の祭日にて老若群を爲し市中は正午より商賈を休み旗を建て樂を奏し市街を横行せり日本の祭日に異ならず婦女皆晴衣を着し意氣揚々たり今日は吉井、香川兩氏へ手紙を認む晩に散歩後食を例店に喫す例店とはプッフと云屋號なり

同廿日晴七時起床飲泉に行く飲終り散歩する二十分計にして再び飲泉す初度の飲泉をシュロツスブルンと云ひ後の泉をノイブルンと云ふ後泉は稍や熱し此地温泉十九ヶ所あり温度各差異あり列氏の寒溫計にて七十度乃至九十九度にして病の症に依り醫師の指圖ありて飲量と泉種とを定む余は前文の二ヶ所の泉を二回に服し夜寢臺に就くの際又シュロツスブルンの泉を一椀服す總計三回なり温泉の質は多く硫酸曹達及び炭酸曹達を含有す皆テーベル河に傍て湧出す石造の建築なる運動場あり



又鑄鐵造の運動場ありて美麗清潔を極め場内皆温泉あり皆飲泉にして浴泉に非ず浴場は別により頗る趣を異にせり醫官の説に依れば浴泉するも別に功なし功能は最も飲泉なりと云余三日に一度の入浴を許されたりと雖も今日迄未だ浴せず毎朝冷水を以て身體を拭ひ清潔なら令む是れ歐人普通の法なりスタイン氏曾云ふ日本の如く日日熱湯に浴するは身體の害にして遂に一國の衰弱に陥る戒めざる可からず昔羅馬の世俗熱湯に浴するを好み卒に心氣活潑を失し懶惰に陥り滅亡に至り土耳其亦熱湯浴を好むを以て日々に衰弱せり日本も熱湯を禁せざれば危ふしと忠告せり此の言未だ容易に信し難しと雖も日本にても古來水浴を以て身體を健康なら令むと云へり且つ終身面を洗ふに熱湯を以てせざれば死面生るか如しと云ふ傳へもあれは架空の言に非ざるに似たり其論の當否は暫く置きて第一日々湯銭を費さず一日一人一錢とするも十人なれば一ヶ月にて三圓なり一ヶ年に積れば三十六圓と成れり豈大ならずや經濟の點よりするも洗湯を廢し水浴を用ゆれば莫大の益なり頗る考案すべき一大事なり當地人口壹萬五百八十人あり案内記に見へたれ共年々増加する由なれば現今は必ず數千を加へたるべし年々他より來る浴客の數は二萬五千なりと云ふ(一千七百五十五年葡萄牙都府リスボン大地震の時此の源泉三日の間湧出せずと云ふ)今日醫師來る只容體を聴く而已にて歸る午后四時頃より散歩しヒルセンスフリウングと云山に登る直に旅店の後山なり松樹奇石を觀み儼蒼可愛突兀たる大石上に石刻の鹿を安置す又登る一町計にして日本の吾妻屋の如きものあり眺望極佳なり極

頂に露帝ペートルの石像あり何の故を知らず少しく下り右の方に茶店あり茶菓を喫して休憩し六時頃山を下り例の食店に就き晩食して歸る

同廿一日陰八時飲泉に行く例の如し近邊の食店に入り茶、パンを喫す雨邊に至る人を雇ひ旅店に行き傘を執り來ら令め而して歸る柴氏より手紙來る中に太田少佐の書あり鳥尾氏本月下旬來り余を訪ふを報ず即ち柴並に太田の二氏へ手紙を出す鳥尾氏は伯林にあり午後四時頃より天晴る昨日巴里より達する報に依れば三浦氏は熊本に曾我氏は士官學校に堀江氏は地方の鎮寮に轉じたるが如し南風の強知るべし

同廿二日雨例の如く七時より飲泉に行く雨の故を以て雨中の運動場盛なり運動場三ヶ所あり各飲泉湧出す一は鑄鐵造にして四方ガラスを以て密閉す長サ二十間計幅は八間計築造頗る巧なり左右に樹木草花の盆を算列し傍に音樂場ありて七時より奏樂す心氣壯快なり一は石造にして岸に傍ひて建築す頗る堅固上層は晴天の運動に佳なり下層は雨中の爲なり而して二方は障子なく自由に出入往來するなり又一は木造にして第二のものとは結構相似たり第二、第三は日本の龍の口の如きものより湧出す第一の湯は大なる釜の如き中より沸騰して吐出する事三尺計熱度亦強し如此場所あるを以て雨中と雖も運動を缺くの患なし湯の側に巡查監臨し小女二三名ありて客の爲めに湯を酌む十時客減すると共に小女も去るなり獨り沸湯の側には終日巡查小女居るもの、如し此の湯は器を以て酌に非さ

れは能はざればなり凡そ此の地に來る人一句以上に及ぶ時は入湯の有無に拘らず健康料として五フランより二十フランの金を取り立つるなり高官のものを始め金満家は多額を出すと云ふ武官は裁割を減するの法あり余はゼネラルの資格にて來り居るを以て十フランにて足れり村田氏は五フランなり今日は雨を以て近傍の食店に食す午後に至り雨止まず故に午後の散歩を休む晩食は旅店に取寄せて食す○石造の運動場は長サ凡百二十メートルなり

同廿三日陰七時より例の如し散歩して例のコーヒー店に行き茶、パン、玉子を喫し運動して歸る午食は旅亭にて食す午後より天晴るゝを以て四時頃より南方の山に登るフランツヨゼフと云ふあり煉化石にて疊みたる高臺にして眺望頗る佳なり一人の男寫眞及飲水をヒサグ此に登る人の姓名を記する帳あり余等の名を記せん事を乞ふ村田氏之を記す我か品川公使も前に登りしものと見へ姓名あり品川氏の從者中村雅男なるものゝ名も見へたり此の所に來り休ふ人四人あり二人は婦人二人は男子なり山中道路甚た美にして一つの堂宇を設くるあり是埃國の貴族某病て此の地に來り功顯により病平癒せるを以て紀念の爲此の堂と道を作れりと云後人に便を與ふる良考と云へし下り市街を散歩し五時半頃歸る今日樋田氏及早川大尉の書狀來る

同廿四日陰午前七時起る飲泉例の如し今朝寒氣強し霜降り草花を殺す寒溫器華氏の四十度に至れり室中火を燒きたり朝食者盡く室中に入り一人の軒外に出づる者なし凡そ諸人朝はコーヒー及茶店

に行きパン及茶、コーヒーと雞卵の類を喫するを以て通例とす暑中は樹下及檐下に机を置き其の上にて食するを常とす今朝は寒き故に皆内に入るなり午後四時頃より散歩してパノラマストラスの大道に行き遂に山頂の峠に至り峠より右に折れ山腹を横切り再びパノラマストラス街に出て下る事八九町にして始めて市街に出て旅店に歸る六時半頃なり食物極めて味好し今日醫師來り腹部を診察す早川、樋田兩氏に返書を出す

同廿五日陰今日も寒し七時半頃より飲泉に行く例の如し歩いて茶屋に到り茶、パンを喫す亦例の如し茶店の前草花箱に逢て可憐姿なり思ふに東京は必ず菊花の好時節なるべし歐洲頗る草花を愛す然れ共日本の如き菊花を見ず最も多きは薔薇なり諸人皆之れを買ひ胸間に挟み以て飾りとす是れ通俗なり余等又時々之れに倣ふ可笑なり今日より本省改革の意見を草す柴氏より手紙來る米國人某余に寄せあり懇切なる手紙なり柴氏詩あり殆ど余か心を云ふものゝ如し

同廿六日陰七時半起飲泉行例の如し喫茶亦例の如きなり歸り本省前途の目的を草案す終日にして暑成る一昨日の散歩少々過ぎたるを以て足に豆を出す晩歩を休む

同廿七日陰寒し七時半より例の如し午後より馬車を雇ひテンプル河に浴て行く事十町計にしてベルケンハンメルと云村に至る此所水力を以て木を挽く所あり同村の端より右に折れ小き峠を越へアトと云村に至る此に陶器の製造所あり就て之を見る隨分大なる製造場なり別に驚く可き良器とも思

はれず往々日本模様を兼ねたるものあり案内者各場を誘ひ模様を畫く所に至る畫工種々の見本を出し示す且つ日本の陶器を賞賛せり又模様形の本を出し各國の模様を示す中に日本の模様もあり又寫眞を陶器に焼き付る事巧なり是等は本邦にて未だ見ざる所なり其れより店に至り器物二三個を買ふ合て四フロランなり出て同所の茶店に入り茶を喫す此の所エーゲル河に臨み眺望佳なり此河はカル、スパットの入口にてテール河と合す此の地はボヘーム州に屬すボヘームの古語にてテールとは熱と云語にして温泉あるに依り名付けたるものと知るべし又エーゲルとはあたゝめられると云語にして熱き河流れ入るを以ての故なりトニツと云所を経て迂回して旅亭に歸る鳥尾、太田兩氏より手紙來る寒氣に恐れ當地に來らず直に維也納に行き待つ旨の報知なり

同廿八日陰七時飲泉に行く例の如し喫茶亦例に依る寒し樋田氏より手紙來る醫師亦來る明後日より維也納へ歸る由なり診察料二十五フロランを贈る

同廿九日陰例刻より飲泉に行く茶亦例の如し食事晝晩共旅亭なり故郷へ送る爲當地□□□を認む柴氏より手紙來る直に返書を出す拙詩一章を贈る

同卅日晴飲泉例の如し茶亦然り今日は稍や暖なるを以軒外に出て喫するもの多し余亦之に倣ふ歸り郷里へ手紙を出す昨日の記並に寫眞を送る鳥尾氏へ手紙を出す鳥尾氏宛の手紙當地に來り誤て開封せるを其の挨拶旁也十二時食を喫し馬車を雇ひコトウケルレと云所のギシユブルと稱する山村

を見物す此の地カル、スパットより東北四里計にしてエーゲル河の下流にあり風景亦佳なり兩山相對して河を挟み咽喉の狀を爲す村の入口に古跡なる石壘門有り山上には古き石塔あり蓋し封建時代の城の一部分の如し全地マトニと云人の所有にして名高き礦泉を出せり地名をギシユブルと稱せり礦泉ニテ所より出つ年々他國に輸出する事五百萬瓶なりと云ふ此山をブフォツフと云ふ泉は山の半腹より出つ家屋を其の上に建築して中に石盆を設け泉水を受け龍の口の如き管を以て吐出せ令め瓶を管に入れて泉を受け直にコロッツの蓋を爲せり數人の男女一ヶ所に七八人なり同所を見物して山上の石塔に登る眺望頗る佳なり川水山下を環曲し美屋兩岸に散點し殆ど畫中の看を爲せり下り茶店に息ふ室中亦甚た美なり暑中此地に來り暑を避け病を治する人多し美屋も多くは貸家なりと云ふ寫眞一枚を求め午後六時寓に歸る○此礦泉を發見せし人は名をヲトクベレーと稱せりと云ふ現時所有者たるマトニと云ふ人は定めて財産家なるべし一瓶の價當地にて二十錢計の由なれば手數料及瓶代を引くも十錢計は納まるべし眞個の金の泉なり

十月一日快晴近來になき好天氣なり滿山黄色を帯ひ景色亦佳なり今日より音樂も止み旅客も頗る希疎にして飲泉場寂寥たり泉酌女も其の數を減し市街多く家具を片付け店を閉つるもの多し家々薪を買入れ皆冬籠りの用意なり市景頗る變し余亦歸志を催せり今日乙猪八月七日高知より出せる手紙と林勝好氏八月十五日箱崎より出せる手紙を落手せり山内公御葬式記載の新聞三枚來る御容體書並

に乙猪、林の手紙を再讀し覺へず潜然たり飲泉喫茶共に例の如し午後より旅亭の後方の山中を散歩し六時頃歸る

同二日晴飲泉例の如し喫茶亦然り午後より旅亭の前山に登る樹木黄色を含み滿山蕭々秋思頓に動く山の半腹に茶店あり又室内射的あり眺望最も佳なりカル、スパットは眼下にありて溪水蛇行、遠望は即エークル河南より北に流れテーブル河と合して丁字形を爲し河岸所々に大家屋ありて烟突天に聳えるものはガラス及陶器の製造場なり此の地四方皆山にして溪水所々より出て森林あり耕地あり斑々畫の如し余瑞西國の外未だ見ざる景地なり人民一般に富裕に見へ性質亦溫和なり遊客亦上等の人多く野鄙なる體の者は希なり頂に塔あり此の所にて一人に遇ふ此人村田氏に言を通す村田氏應答す英人にして佛語を能くせり佛に七年居たる人にして石炭商なりリヨウマチス病に罹りし爲昨日來ると云當月に入り來る人は眞の病者の外絶てなきもの、如し旅亭も皆器物を片付け掃除して熟居の用位を爲すの最中なり此の山にて茶を喫し室内射的を試み午後六時過歸る今日佐々木氏へ手紙を出す

同三日陰飲泉喫茶例の如し出足近きを以て荷物を片付く此地名産はガラス細工、陶器、寄石細工の類頗る妙なり余参考の爲各種の器を求むるなり多くはわれ物なれば甚心配なり柘榴石の女の首飾三種を求む此石はポヘム州の名産なりと云ふ石類には奇なるもの多し

同四日陰飲泉は一椀而已を服す明日出發するを以て醫師の指圖に依るなり散歩の後茶店に入る其れより體量を計る今日は五十七と六分なり前週に比すれば少々増加せり歸途此の地町兵を見る中々立派なり今日は天子の御名付日に付寺にて祭りあり故に如此隊を爲して禮拜すと云土地のものにて成立ちたる兵にして二中隊あり樂隊も所屬し頗る賑々敷事なり服装も甚美なり士官は少佐一人中少尉三四名ありと云ふ二中隊の中に軍旗一旗あり古物と見へたり軍旗出づるに際し禮を爲す事式の如し尤も肩に掛けたるを各肩へ筒を爲す而已なり我か邦奉銃を爲すと異なるなり隊已に調ふ即列を爲し寺院に到る一齊放火を爲す事三回計りなり蓋し祝砲の類なるべし十一時頃に至り終ると見へ皆隊を解て歸る凡そ歐洲の王國人は皆其帝王を尊崇す是れ國を重すればなり若し國民にして帝王を輕んずる時は國の威令立たず自ら國を輕するの理なり吾邦の民權黨と稱するもの自國の帝王を尊崇するの自國を尊崇する所以たるを知らざる儀傲慢無禮の舉動あり而して開化文明を以て自ら許す可惡の甚しきなり埃國猶且如此フロシヤの如き其君主を尊ぶの風推て可知なり午後三時より入湯に行く余此の地に至り殆ど三週日なり而して入湯は今日を以て始めとす毎朝水を以て全身を摩擦し以て清潔ならしむ入湯は別に病に益なきを以て今日迄試みず明日は歸途に上るに付一浴を試むるなり歐洲通常の湯屋と異なる事なし只人力を以て暖むると自然の湯との別ある而已久振の入湯なればあかつきたるべきに毎朝水にて拭故更に汚れなし只足の指の股には汚物多きを覺ふるなり湯治に來り湯に入

らぬは是亦一奇なり歸り四時頃より西方の町端に散歩し六時頃歸る家嬢花一束を贈る明日上途を祝するものなり花片に文字を書たり『幸福の旅』と云字なりと云ふ今日の湯銭は八十クロイツなり蓋し上等の湯屋は先月限りに休まれたれば中等の所に行きたればなり温度は二十七度を常とすれ共好て三十度に爲して入り三十度なれば可なり日本の湯の如し

同五日霧午前五時起て旅装を爲す六時四十分發の汽車に乗るを以てなり旅装已に成る馬車を雇ひ停車場に到る天氣漸く晴る旅亭より停車場迄十町計隔り時刻至れば車即ち發す來路は夜行なるを以て興味を缺きたれ共天氣は好し盡行なれば景殊に佳なり走る車凡そ一時間半計にしてコレマウと云所に到る此所より線路を替へ汽罐を後ろに付て方向を轉し南の方に走るが如しカル、スバットより此迄は東に向ふか如し然れとも蛇行攀折山間を行くを以て時々方位を轉すれば方位の指定頗る難し十一時半頃フランクに着す停車場に十五分時間なり車中にて食物の切符を買ふ此所に到れば直に持來る品物は烹肉一種ソップ一碗鹽肉一皿パン二ツ小き瓶にブドウ酒一ツ水一ツ備ふ猶ほ吾東京の松田の料理の如く簡便にして具備せり清潔にして味亦佳なり代價一フロラン二十なり一時十五分コモメウと云所に到る大驛なり左に城あり近年の物に非ざるか如し三時より五時の間山間溪水に傍て走る景色頗る佳也隧道を通る事十五、七時維也納府に着す柴、道家並に鳥尾、太田氏等來迎ふ共にグランドホテルに到り暫時休息し八時三十分の汽車にてハーデルスドルヘルの借宅に着す家主食を備

へて待てるを以て快く食し眠に就く

同六日晴午後一時頃食に就く鳥尾、太田二氏來る食後鳥尾氏と出で、山間を散歩す當夜より鳥尾、太田兩氏亦此宅に同宿す夜食後雜談ありて喧嘩なり十二時頃眠に就く長崎支那兵の亂暴及び袁世凱、朝鮮王を捕囚せる等の報鳥尾氏の知人より通す長崎の事は暫く置き朝鮮の事は容易ならず必ず大難事を起せる事と知るべし

同七日晴スタイン氏を訪ふ直輸出及び各國に商店を開くの事等の談あり十二時頃歸る近方の公園を散歩しマロニエの實を拾ひ二時前宅に歸るマロニエは日本に送らんと欲す日本新聞を讀む長崎の事の概略を載せたり他は奇事なし八時頃より晩食に就く都合六人なれば談論喧嘩なり十二時半眠に就く

同八日晴茶後近方を散歩し一時頃歸る食後再び散歩同行鳥尾、太田、柴氏等なり午後五時頃歸る身體は快を覺ふ朝は溪南を歩し夕は公園を歩せり

同九日雨奥氏へ手紙を認む終日出てす鳥尾氏談論盛なり

同十日晴今日は鳥尾、太田、柴、村田氏等と魚釣りを催す十一時頃より行く一統にて三十尾計の小魚を獲たり午後一時頃歸る三時頃片山、萩原兩氏來る馬車を雇ひ一同スタインホッフと云ふ所に行く路程凡一里半計山間の一佳地にて避暑人の遊歩場と見へたり茶店一軒あり遊人十名計あり現今

猶如此なれば酷暑の候盛なるは可知なり茶及ビール、コーヒー等各適意の注文を爲す余は例に依り茶を喫せり暫時休息して歸る六時頃なり雨少々降る日本風の牛鍋及飯を炊く味佳なり釣り獲たる小魚亦焼て菜と爲す殊に佳なるを覺ふ九時片山、萩原氏等歸る鳥尾氏談論十一時に至りて止む今日始めて西洋に行はるゝ玉轉しの遊戯を試む

同十一日晴今日は樺山氏に送る手紙を草す鳥尾氏時々來り談論あり夜月觀の催しあり余は辭して行かず

同十二日晴午後二時よりスタイン氏の招きに依り玉轉しの遊戯に行く先生老たりと雖も壯者と共に遊戯を爲す其の氣力の盛なる實に感ずるに堪へたり庭中に茶菓を出し興を助く妻君及び令息亦相共にす午後五時頃歸る食後散歩して月を觀る八時頃歸り鳥尾氏の室に到り幽靈化物談あり孔子の教に戻る甚し亦一興なり十二時寢に就く

同十三日雨終日出てす例の如く鳥尾氏の佛論あり夜日本食の料理あり

同十四日陰今日樺山氏へ手紙を出す午後より太田、村田、道家氏等同行にて維也納府に行く皮細工數種を求め公使館に立寄り六時半頃歸る

同十五日陰午後棚橋氏來る夜に入り歸る伯林へ電報にて 皇后の宮の御洋服御注文あり伊藤氏其他の妻君の服も亦然りと云電報にて婦人の服を注文とは驚き入る計なり諸大臣狂するには非ざるか

今の時何の時を強露臨然を縦にし英、支結て之れに當らんとす不遠兵争は必然なり吾か諸港一も備へなし而して數十万円を費し服を外國に注文し外強敵を恐れす内人民の困苦を顧みず只汲々として外人に諂ふを以て政策とす嗚呼吾か此位地も亦諸大臣と共に危哉余の調ふる所の意見行はれざる可豫知なり

同十六日陰今日は午後三時頃より鳥尾、太田、柴氏等佛陀ベストに行く送りて停車場に行き別れを告ぐ家中遽に寂寥たり

同十七日午後より萩原氏暇乞に來る十九日歸國すれはなり送りて停車場に行くおよし及儀一、守人等に品を送る晩にスタイン氏來る談偶々日本現今の事に至り教育の談に及ぶスタイン氏の説は妙なるか如くなれ共日本の現況にては事々物々破壊して別に西洋風の新世界を建るの勢にて日本を改良するに非ずして日本を破りて西洋を作るの傾きなればとてもスタイン氏の説は行はれずスタイン氏をして現況を見せめさるは残念なり夜雨

同十八日陰午後三時より當村戸長役場に行き現況を一見す當戸長役場は三ヶ村合併して事務を扱ふものなり戸長一人書記二人定雇一人なり戸長は名譽官の如くにして事務は概して書記にて扱ふなり人口は二千人計なり其中租税を出す者より十五人の委員を撰み委員にて戸長及公法外の村の約束の如きものを定めて之を戸長に渡し戸長之によりて施行する即十五人は議員の如きものにして規約

は憲法の如し必要の帳簿三冊あり一は戸籍帳一は會計帳一は税額帳なり其の法簡易にして明晰なり書記の中一人は行政一人は警察の事務を擔任すと云ふ當戸長の権内にて罪人四十八時間を止め置くの權あり又違警罪により十フロラン迄を課するの權あり又百フロラン以下の過銀を課するの權あり租税は一戸の借家料を目定し割出すものなり譬へは此に家あり之を貸せば年に百七十五フロランを得とせば三十六フロランを收むるなり又地方税及學校費は三十六フロランを臺として一分七厘より四分一の額を課するを得ると云ふ公事は直に戸長にて施行すれ共村の私事に關するものは書記取調戸長に出し戸長より委員に相談して施行するなり一ヶ年に書面にて取扱ふもの二千件計にして口述其他書面外の事務は其の外なり戸長役場は至て狭小にして八疊一間位なり其の中に二人の書記机を据て事務を執るか如し段々承知したき事あれ共日暮に至るを以歸る同行はスタイン氏の令息なり仕立屋來る

同十九日晴箱屋來日本へ送品を入れる爲なり十一時半より維也納に行き萩原氏を訪ひ書狀及傳言を爲す不在の所暫時にして片山氏と共に歸り來る余等別れを告げ歸る路にて柳細工を買ふ六時頃歸る

同廿日陰午前十時頃より馬車にて維也納の公使館に行く鳥尾、太田、柴氏等も匈牙利より歸來れりコレラ多きか故早く歸りたるなり棚橋氏の先導にて貴族學校に行く此校は凡そ百年前の女王マ

リヤテールと云人の創立にして許多の資本金あり一ヶ年の收入二百萬クルテン即百萬圓計の資金にて生徒三百餘なり校費生、私費生の二種あり私費生は一ヶ年に千二百フロランなり校費の生徒は種々の情實あるもの、如く説明分明ならず大略我が學習院の如きものなり教官以下二百名餘の掛り員あるもの、如し随分贅澤なる學校なり生徒の服装は士官生徒に似たり甚た美麗にして温順なり外出の時は帶劍にて自ら軍人の風采あり小學あり中學あり此校を終りて大學校へ入るもの多しと云ふ簡單なる器械體操あり擊劍あり銃槍あり又廣き遊歩場あり又游水場あり調馬所あり馬二十頭計あり馬術教師、擊劍教師は武官なり諸器械充實せり且つ規模の大なる事百年前王室の盛なる時の創立に非れは爲す能はざる所なり寺あり舞踏所あり是等は今日の學校にて出來べきものに非ず是れ等を看ても千八百四十八年の改革前の奥國の有様を見るべし現今建築の學校は露國を除くの外は恐くは學校に寺院、踏舞場を設くるか如き事はなかるべし僅に三百人餘の學校には實に廣大なる結構なり都て校内の清潔器物の整頓は流石に金の多く掛りたるだけ感心せり此の生徒は専ら文官出身の目的なるか如し教授場は素より馬術擊劍射撃等夫々一見し午後二時頃同校を辭す門番は立派なる服を着け金箔付の棒を携へたるものにして古代の遺風と思はるゝなり教導は文部の秘書官某なり此人も當校より出てたる人なりと云ふ維也納にて午食し五時頃歸る

同廿一日雨午前九時頃より同しく維也納の公使館に行く十一時頃より昨日の秘書官來るを以て共

に出づ今日は女子師範校の如き所に行く此の生徒は多く小官吏の孤兒及び父或は母を失ひ財産無く教育に苦しむものを養育するものにして校長は五十六七歳の老婦人なり辯舌爽やかにして頗る才子と見へたり生徒八百四十人にして教官は二十四人なり女教師半分なりと云ふ生徒に二種あり寄宿生外來生なり兩生皆教場を異にし甲乙和往來する事絶へてなし各室鍵鑰嚴重にして教師各鍵を携へ他人猥に入るを得ず然として規則嚴正なり我が國女子學校の如き不檢束なるものに非ず寄宿生は二十人計一組の如く成りて寢室を備へ傍に副教頭一人室二た間を備へ住居せり萬事の差圖を爲すなり生徒の敬儀正しく余か輩の如き見慣れぬ東洋人の五六人も行くにきよらつき笑ふもの一人もなし教の嚴なるには感心せり校中に讀書、算術、書學、体操、音學等の外衣服の仕立、レースの製作等を始め家政の事を教授する事甚妙なり十六七の生徒の服は皆自ら製せし服を着せり一様にして質素なり是亦中學、小學混交なり七八歳のもの迄も皆手仕事を教ゆ教頭云當校に入るものにして自己の衣服を自ら作らざるものなし只外套丈け仕立屋に命するなり寄宿生は一ヶ月二度歸宅を許す而已にして其の他は外出を許さず朝は六時より起き庭中を散歩すと云ふ庭中樹木鬱蒼として清潔甚し皆百年外の水なり規模大略昨日の校に似て稍や小なる而已此の資金も帝室及び文部省等より出づるものにして校費生、私費生の別あり外來生は授業料は受けずと云ふ夫々一見して唱歌及びピアノを奏して余か輩に聞か令む肅然として動作甚だ正し寺及び舞踏場は昨日に異なる所なし外來生の教場は自ら場

所を異にし各教場の後方に別に腰掛を設く本校寄宿生教授方見習の爲めに設けたるなり各場夫々一見終り再教頭婦人の室に來り別を告げ歸るランドホテルに午食し夕六時頃歸宿す

同廿二日陰午前九時半より公使館に行く十一時より陸軍省附屬の士官の女子學校に行く此校は全体的取締を陸軍大尉にて司る提理一人男子にて庶務を司るか如し而して教頭一女婦あり専ら生徒の取締に任ずるもの、如し然れ共昨日の女校の教頭に比すれば年も若く又權力も下等にあるもの、如く専ら提理の手中にあるか如し校内規律の如きも昨日の校に比すれば是れは數等劣れるものにして余等の來るを見れば生徒は雜沓して廊下に出て或はをめき或は笑ひ其のさはがしき事男子學校の不規律なるものに異ならず甚だ見苦敷ありさまなり學科は餘程高等なるものを授くるか如し此校生徒は陸軍少給士官の父或は母を失ひ財産なくして教育に困しむもの、中最も憐然なるものより順序に入校を許すもの、如し此輩は衣服、飲食皆校費にして卒業の後も昨日の校の如く教師と成るべき義務も帯ひず若し士官の妻と成る時は官より三百フロランの手當金を給するよし卒業の後は身體自由となる昨日の校生は凡そ六ヶ年學校の教師と成るの義務あり若し人の妻と成る歟又は自由の身と成らんと欲する時は入校中費せる金額を一時に返金するの成規なり昨日の校中の資金にはカトリック宗教のもの凡そ何人を育すと云ふ約束にて寄附せる金ある由にて専ら教師目的のものと思はるゝなり然れ共敢て束縛するに非ず異教の人も自費なれば入校自由なりと云ふ本校には諸學科は大概昨日の校に



同じく只游泳場あり生徒に游泳を習はしむる事の一課を多くす教場及寢室等の所は昨日に異なる所なし只昨日の校は副教頭四人あり全生徒を四部に分ち一部の入り口に副教頭座席を構へ鍵鑰を司り出入を嚴にすれば生徒の敬儀よきも亦宜べなり本校は如此嚴密ならず生徒の品行も推して可知生徒は一ヶ月一度親族の請求あれば歸宿を許す其の他は固く出さすと云ふ暑中は避暑の爲田舎に行くこと云此時は本課は隨意たりと雖も音楽と唱歌とは必ず休む事を不得と云ふ昨日の校の如きは暑中の爲田舎に校舎ありと云本校未だ寺の設けなし追々寺を建設する目論見ありと云是れも有名なる女帝の創立に係ると云午後二時グランドホテルに食し再び文部省に行き卿に面會し過日來の禮を述べ暫時對話して午後四時頃歸る風邪稍や増長す

同廿三日晴今日ヘルンデル氏小銃製造所見物の約束あり余は風邪の爲に行く事を得ず鳥尾、太田、柴、村田氏等四人六時發の汽車にて行く余は醫を招て診察を乞ふ水薬少許を服し手拭を水に浸し腹部を包み頭も亦如此寢に就く迄凡四回頭痛甚し

同廿四日陰今日は稍や快を覺ふ醫師來診室内の運動を可とす藥も休むを可とす午前八時頃鳥尾氏一行歸り來る夜スライン氏來り訪はる種々の懇談あり我邦内治外交共に失するに至りては前途の成果實に可恐なり十時頃氏歸る

同廿五日本日はスライン氏を芝居に招き置きたれ共余は未全快せざるを以て柴氏等をして代り接待せしむ午後三時より棚橋氏の招きにて食事あり其れより棚橋氏をも芝居へ招けり鳥尾、太田兩氏も同行なり二氏も今日雜也納に至り明日より出發以太利に行き其れより佛京に行き印度を経て歸京すと云ふ

同廿六日陰寒氣強しカーヘルを焚けり柴氏は午前より農商務省に行き村田氏は午後より雜也納に行く鳥尾氏を見送るなり余は心持善きを以て道家氏を連れスライン氏に行く談偶々鳥尾氏の學術の缺點に及ぶ老眼炬の如し能く其の長を知り亦善く其の短を知る次て本日主として來る所の本省改正の意見を述べ教を乞ふ先づ内閣に提出する意見書の大意を五六段に切り談すスライン氏大に賞賛善と稱す別に異見なし其の中缺失の點三四ヶ所を示さる甚た妙なり素より其の教に従ふ三時より行き七時に歸るを以て先意見書丈けにて局を結び明日はスライン氏支へ日なるを以て明後日を約して歸る余意見の或は歐洲の治體に違はざるを保せずと掛念せし所氏の賛成を得て大に安心せり

同廿七日陰寒昨日の如し本日は病痾全く全快せり醫師來るも只食養生を示す而已柴、村田二氏今朝歸る鳥尾、太田氏等の出達今朝に延びたれはなり服屋來る平服一着を作るなり又外套を命す室内の長衣も出來せり今日荷物を日本へ出す十二月中には必ず到着すべし

同廿八日半晴稍や暖なり雜也納に行き石氏へ進物を調へんと欲し午前九時半の汽車にて出て公使館に行き棚橋氏を頼み金銀細工屋に行く銀の三つ揃のコーヒー瓶と銀盃とを買ふ價百五十圓餘なり

尤金貨の相場なり其れより議院に行く先つ上院の躰裁を見るに議長上座にあり副議長其の左右にあり議長の前の下段に總理大臣あり其の左右に各大臣あり各大臣の前と議員との間に書記あり議長立て議題を演説する時は總理大臣始め各議員皆立つ甚だ静肅なり將官三人軍服を着し議員の列にあり僧正二人亦然り僧正は頭に徑三寸位の丸きものを戴けり山伏の頭に戴くものに似たり其れより下院に行き其の躰裁を見るに議長及内閣大臣の位地議員の座等都て上院に異なる所なし然れ共上院に比せは稍や亂雑を覺ふ然れ共別に喧嘩をなす事なく先つ静なり砂糖税の事に付ての議事なりと云ふ最早兩三日にて閉會の期に至れる由にて別に議論もなく人数も甚だ少し午後二時四十分の汽車にて歸る食後石氏に行き彼の品と日本より持ち來る籐の煙草入と鼈甲の煙草入と二個を贈る同氏大に籐細工の煙草入を賞賛せり云ふ若し此れを以て婦人の帽を作らば大に行はるべしと農商務章程に就ての質問を爲し六時過ぎ歸る

同廿九日晴朝散歩午後一時頃丹波敬三氏來る三時より石氏に行き本省組織の事に付質問す同氏日本の官省の多人數なるには仰天の様子なり如右政費を徒費しては人民は日に衰替し軍備は整はず日本實に危しとて歎息せり余石氏に向ひ云ふ余は先生を以て國を治むるの良醫と目せり醫に治療を乞ふには先づ容體を述べ然る後藥を受くるなり故に余も日本の容體を先生に告げざるを得然れ共醫の外他人に容體を述るを欲せず先生亦其心して聽き賜はん事を先生曰く余素より他言を欲せず卿安心せよと各局併合の意見より談論種々に渡り會計局の事に至る余云今般余の考にては局を廢し課と爲し現今八十人にて扱ふ所を十人にて辨せんと欲すと述ふ氏驚て曰く何ぞ如此多人數を要するや余の考にては五人あれば充分なりと思ふなりと歐洲各國の比例より云へは八十萬や百萬の金の出入に八十九十の人を要するの理なく氏の驚くも尤なれ共日本は舊法未だ一も變せず只形體上のみ洋法に似すると雖も行政の實務に至りては一も歐法の如きなく不能無用の人員を置き無用の事を爲さ令め最も先きに學ふべき簡易明晰の事に至りては置て問ふものなし凡そ租税の重き日本に如くものなし人民には重税を課して却て諸省の徒費に歸す民何の罪かある官吏何の功ありて如此倖僥を得る歟余石氏の行政學を開き實に日本政府の殆ど政府を爲さざるを愧つるなり本邦民權論者未だ歐洲行政の實況を不知は現政府の幸なり若し能く之を知り之を論するに至らば政府何を以て人民に答へんや石氏亦頗る余の意見を賛成す而して云ふ子の意見は頗好し早晚必ず行はるべし然れ共聞く所によれば政府の進路方向を誤るが如し然らば寡を以て衆議に抗する事子に於て危し又短氣を起し退職するか如きあらば最も可愛事なれば成丈け堪忍し勉強せられたし子の考若し即今に行はれすとも道理のある所なれば必ず行はるゝに至るへし云々と忠告あり言甚だ懇切なり

同卅日晴午後三時より石氏に行く日本行政上の事に付き質問を爲す遂に財政より役人徒黨專行の事に涉り役人多員に至る理由及條約改正の事今の政府の政略にては目的を達し難き等の論に及び忠

告最も深切なり日本の行政は歐洲各國未だ曾て聞かざる所の現況にて此儘に経過せば人民は日に衰弱し國の元氣は日に消滅すべしとて氏の歎息甚し本省改正案提出の順次等夫々示教せらるる日本の地租は非常に重き故是れを減するの目的を立つるは農商務省の任なり右に付所得税を起すと工業税と家屋税を起すと三の説あり別に記す談種々に涉り氏特に云ふ是れ迄日本より來る人伊藤氏を始め多く憲法の事を問に止まり足下の如く行政の順次を逐ふて質問を受けし事なし故に余も日本の事には疑ひの件も不少如何と思事多かりしか子の質問を受けて了解する事多し子の質問する所は實學なり子の目的を達せずんば日本の前途危し只返すくも短氣を起す事勿れと忠告せらるる當夜は氏の招きにて晩食の饗あり八時より食堂に入る醫某亦來會す主人は先生夫婦に令息なり食中種々の談ありと雖も余言語不通時々通辯の便を缺く事ありて残念の事多し十一時頃辭して歸る

同三十一日晴片山氏來る午食を共にす四時頃より石氏に暇乞に行き談又熟す軍人の政治論の著述を出版するに付各國の例を開く日本の如き酷なる所は更になし又最も有益の書名を問ひ認む軍事雜誌の如きもの石氏日本の參謀本部へ献本すべければ受納の如何を沙汰致しもらひ度しとの事なり余官に上申して答ふべきを述べたり八時頃別れを告げ歸る

十一月一日晴午前十時頃馬車を雇ひ寓居を發し維也納府に赴く宿主一同送り門を出つ皆自ら惜むの情あり直に公使館に至る丹波、片山氏及醫某亦來會す道家、村田二氏は先づ荷物の監視を爲しス

テーシヨンに行く午後二時頃兩氏歸り來ると共に食店に行く今日は舊教の生靈祭に付墓地賑々敷由に付馬車にて墓地見物に行く墓は東北の郭外に在り頗る廣し道路車馬織るか如し人群を爲し墓道肩相摩す墓碑大小種々あり大概皆立派なり然れ共佛國上等の墓地の如く大金を費せるを見ず此邊陸軍の彈藥庫の如きもの及要塞もあり維也納府防禦の一つと見へたり六時頃歸りグランドホテルに食し其れより公使館に行き別れを告げ八時より出發す棚橋、宇野氏等送て停車場に至る丹波、片山兩氏及醫生某亦送り來る時にハイドリソカヲの主人夫婦及娘并に雇女等亦態々來り送るビールを傾けて別れを告げ九時の汽車に乘し發して伯林に向ふ

## 第八章 獨逸入國より土耳其海峽航海に至る

十一月二日陰六時□□と云所にて荷物を改む塊、獨兩國の界なり改め所も兩國同所に設けたり八時頃索孫國の都府ドレスデンに着す十二時頃伯林府に着す品川公使以下十餘名來り迎ふ余品川氏と同車してホテル、カイゼルに着す

同三日陰今日は天長節なり午後より馬車にて師丹戰爭のパンラマを見物し工業博物館に行く年代を追て器物を陳列する事各國のものに異なる所なし而して善き物の集聚能く届きたりと云ふべし此の所には日本の器物にも善良のもの多し就中竹細工の日本家最も妙なり漆器類にも亦良き物多し其れ

より戦勝の碑に登る此碑はデチマルクの勝、埃國の勝、佛國の勝の三勝の碑なり碑は大なる石塔にして上に女神の像を安す塔の中央に三段に大砲を豎てに併列す上段はデチマルクを伐ちたる時得たる砲にて作り二段は埃國より得たるもの三段は佛より得たるものなり女神亦三國の戦に得たる銅を以て作ると云ふ石は多くモカゲ石にして中段の石柱はスエーデンの産の赤石なり其の壯大可驚下段には四面に戦争出發の圖を彫刻す帝王及びビスマルク、モルトケ始め兵卒の妻子に別る、様を刻す人をして坐モウに感涙を落さ令む其の軍人を獎勵するの術盡せりと云べし此の塔上に登れば伯林は皆眼下にあり此塔と相對し凱旋門あり中央は親王及び各國の公使參朝の節に非されは出つるを許さすと云ふ兵隊常に番を爲せり其れより公園を一週して歸る公園も廣大なるものにして巴里に相近し樹木の大きな事は巴里の比に非ず夜歸り八時より公使館に行く天長節に付祝宴めはなり會するもの七十餘名なり品川氏は齒痛にて出つる不能十一時頃歸る奥、河島、中村氏等來る十二時頃歸る寢に就く

同四日陰朝井上哲次郎、工兵大尉山根武亮及奥、伊達、毛利、近衛、黒瀬、伊地知、關氏等來る十二時頃皆歸る井上氏は共に午食して歸る其れより武庫見物の心組の所遅刻になりたるを以て動物園に行く禽獸類を集むる事頗る多し各國の園にて未だ見ざるもの多しトラ、シ、の類數種あり又河馬、犀、麒麟と稱するものあり是れを以て最も奇物と稱す園は官有にして或會社へ貸付會社にて創立せる由其の鳥獸の飼養代一日に幾百千圓を費すべし資本の利子は年五分を生すと云ふ入場料一人一マルクなり一マルクにても決して高價のものには非ず多く鳥獸の名を知る而已ならず實物を知ればなり關、柴兩氏同道なり晩に歸る畫家某來る十一時頃寢に就く今日樋田魯一氏來り會す

同五日陰本日は奥、關、中村、河島氏等日本料理の催しあるを以て午前十一時頃より同氏等の寓居に行く伊知地大尉始め余の同行皆行く鰻の蒲焼を始めサシミ、鶏の味噌煮、鱈の潮煮等甚妙なり日本食の上に常地上等のビールを勧められ満腹せり今日は久振りに伊知地、樋田兩氏と碁を圍む皆利を得たり尤伊知地氏は少し強きを以て二目を置きたり晩景歸る樋田氏も來る十時頃歸る十一時寢に就く

同六日陰午後より水族館見物に行く其れよりバナラマも見ると水族は格別の事なしと雖も日本の築山の如く石を以て築き地中幾層の屈曲ありて水族はガラスの中に游泳せり維也納府の水産館に比すれば數等優るか如し是れは私立の會社にて設立するものにして見料一人一マルクなりバナラマはアフリカ土蕃と戦争の圖にして一昨日見る所の師丹戦争に比すれば數等劣るものなり其れより臘細工の人形類を陳列する所に行く細工頗る奇妙なり我が生人形の類に非ず有名なる悪人の像を陳列する所あり其數三十五六と思はる手カセ、クビカセ等を施せしものあり又ルイ十五世の妻某獄中にあるの圖もあり又古代の刑器數種を陳列す過酷なる責め道具種々あり又有名なる學者、豪傑の画像あり當國の帝王及露、埃國、英國女皇等も陳列す又埃及會議の場あり又獨、埃、露、英、佛等の使臣議

場を開きビスマルク立つて演舌を爲す所あり獨逸代々の王及當時の功臣ビスマルク、モルトケ始め將官の像多し華盛頓、那波翁始め各國豪傑の像亦備はる中に英の名將ゴルドンの像あり不覺潸然せり又アラヒーバシヤの像あり彼も衰國の敗將其志實に可憐余先きにバシヤを錫倫島に訪ひしを以て其面貌を記憶せり此細工と相類似す彼亦此の有名の豪傑に入るは彼れに於ても亦幸なり只東洋人にして一人も其の中に列せざるは遺憾と云べし晚景六時頃歸る當夜おくま、乙猪、澤村等の手紙を落手す久敷郷信を不得日夜相待ちし所なれば一家の無事を祝す女孫出生の報あり可賀なりおまつと名くと云へり重喜殿病死喪中の由乙猪の信書に詳かなり誠に可惜事也と云べし

十一月七日陰午後品川公使を訪ふ齒痛を以て退はず歸りて手紙を以て明日旅館に来るべき事を小松原氏に申し遣はず

同八日陰十時頃小松原氏來る農務省及クナイストに面會の事を紹介せ令む同人は都て當地の官人其の他名ある人に交際も疎なると見へて吾問に答ふる事頗る曖昧なり品川氏に通すべしとて歸る午後より東北の市端の公園に行き五時頃歸る早川氏ドレスデンより手紙を差越せり品川氏明日農務卿及クナイストに同道する由申し來る

同九日陰十一時より品川氏同道にて農務卿を訪ふ卿は維新前日本へ來れる人にして維新前の日本の隙を能く知れり余何の心もなく日本も閣下來訪の時とは大に異なれば再ひ御來訪の有るを希望す

る旨を述べ卿云余は前日の日本より今日の日本を惡敷思ふ旨を述べたり蓋し近時日本の急進を以て至當とせざるものによるなるべし卿云明夜は地方より出府せる農會委員を招く筈に付御來會ありたし余辱きを謝す且農學校を見ん事を乞ふ卿云學校は文部の所管なれ共當省より掛合ひ置くべきに付明日參られん事を望む且牛馬醫學校も一ツ見物せらるれば御參考に成るべしと忠告せらる即ち一見を乞ふ暫時談話して歸る其れより室内裝飾具陳列所に行く是れは室内裝飾の見本を集めたるものにして人の注文に應ずる爲なるべし此の所に日本へ過日行て歸りたる建築師某の日本より取り歸れる品許多を陳列せり随分宜しき品もあり就中繡の屏風頗る美事なり代價は五千圓程も致せりと云ふ日本の新道割の圖も掲げたり又議事堂、司法省の圖もあり頗る壯大なり過日某氏堂上にて日本の事を演舌せる由氏の説に日本は意外に宜しき國にして工藝も餘程進み居れり只役人の多き事世界第一なれば司法省も大ならざるを得ずとの説に至り聽衆手を拍て笑ひたりと聞く見終りて歸る夜大森氏來る郷信を認む八月廿七日出の書狀の返簡なり

同十日晴今日は約の如く農務大學校に行く十一時より品川氏來り同道す學校は頗る盛大なり器械の陣列各國の物品、實物及雛形にて備はらざる事なし動物、殖物の乾物を始め地質、害蟲、菌類より種物に至る迄事物盡く備はれり大に感心せり其れより獸醫學校に行く生徒は百名餘なりと云ふ病院解ボウ場等夫々見物す次に陸軍の蹄鐵所に行く種々蹄鐵を陣列す日に二三十頭を蹄鐵すと云ふ

此の前に陸軍の馬醫生の屯所あり此の蹄鐵所にて一年修業して後學校に入ると云ふ此處は陸軍の所管なれば主宰者は士官なり是にて終り午後三時頃歸る本夜は農務卿の案内なれば午後五時半より行く委員二十八人計來會なり卿の妻君も出迎せり暫時にして食卓に就く余妻君の側に着坐すと雖も言語不通なれば残念なり諸人談話を促すも答ふる能はず一坐の人は多く地方の實業、學術并ひ通せる人にして卿の顧問と成る人と知られたり全國の農事に關しては此の人等最も功あるものなるべし食己に終り余妻君を別室に誘ひし後卿余に向ひ云ふ日本の近來は進歩は如何にも進む事急にして歴史未だ曾て見聞せざる所なり竊に恐る如此き勢にては眞正のものに非ず却つて退歩の點に至るべし足下以て如何と爲すと余云ふ如何にも貴説の云ふ所は我國の藥石の言にして辱く思ふ也余も大に覺る所あれば上下の隔絶せざる様下農民を引き上げ共に進むの方向を取るべし閣下の忠告は至當なり余歐洲に來り所々に識者の言を聞くに皆閣下の言と符合せりと卿云足下の此度當地方へ參られたるは幸なり是迄歐洲へ來れる諸子日本の事情に通せざる人多し自國の事情に不通して徒に獨逸の所爲に倣ふは過ちなり獨逸にも宜敷事は多くあるべく候得共之を直に移さんとするは無理なり日本の事情と考へ合せ事情に適する所にして始めて行ふを得べしと着々余か平常の論と合せり然るに昨日卿の談話中に余は前日の日本を好むとの言あり是れ蓋し今日余に忠告せんと欲する所以の意なるべし通辯は英語にて柴氏なり又食事中柴氏隣席の人も亦頻りに日本の急進を危ふみ忠告せる事卿の言に

大同小異なりと云佛人は多く日本を譽め獨人は多く日本の仕方を譽めす是れ佛人は日本の事情を知らざる歟抑も知て實を告げざる歟獨人は質直にして直に思ふ所を吐露するなる歟卿又云明日は本日の委員諸子の會議あり臨席せらるれば參考と成る事あるべしと即出席の事を依頼し置きたり九時頃辭して歸る卿は曾て日本へ來りたる事あれば其の言頗る切實なり昨夜認めたる手紙を今朝書留にて出す中に維也納より送りたる荷物 of 切符封し込む今夕出掛けに井上哲次郎氏來る

同十一日晴午前十一時より公使館へ出掛け品川氏同道にて農務上等會議に聴聞に行く昨夜の連中皆來る卿は來らず暫くありて議員席に着く次長、議長の席に在り余は議長の次に坐す品川、柴、關氏等皆議員の席を空くして同行を坐せ令む議題は近來高利貸の徒民地を抵當に取り高利にて金を貸し次第に兼并するの勢あれば法を設け是れを防かざるべからずと云ふにあり議者四五名にして已に二時に至れば休息午食するを告ぐ即ち余等是にて暇を告げ歸る已に歸れば河島氏來る即ち食堂にて食事の傍ら時事を談話す且クナイスト氏は迄日本人に談す事の差異あるを告げ余に注意を促せり時事の談河島氏の論甚だ好し河島氏は薩人にして薩摩主義を脱す天下の志士と云ふべし暫く談して歸る四時より再度公使館へ行き姉小路氏同道にてクナイスト氏の宅に行き同氏に面會し是迄同邦人始終世話に相成るを謝したり農業上の咄あり且つ談次一昨夜皇帝に拜謁せし時皇帝の御咄に日本より役人の新に來れる御咄あり足下には拜謁を御願に相成る乎との問あり余云ふ帝は御高年の御事なれ

は拜謁を願ふも御六ヶ敷事と存しわざと相願不申候旨申置たり暫時談話して後來る十四日又々談話を聞く事を約して歸る

同十二日晴午前海軍士官某來る明日水雷見物の事を約す十一時頃より兵器陳列所を見物に行く樋田、村田兩氏及海軍士官なり兵器陳列所の建築は壯大なり下層は右には古代の大砲より近代に至る迄各種のものを陳列し左には佛國巴里を始め各地の都會、要塞の雛形を陳列す又上層には古代の甲冑より刀鎗、馬具、小銃、軍服等を集む最も可感は各種大砲の雛形頗る多く引き馬も亦盡く備はれり佛國の兵器館に比すれば多からずと思はるれ其陳列の整頓は其の右に出づるか如し佛國分捕の大砲も幾分を陳列せり一見し終り王宮の前に到りし所人民群集す云兵器陳列所前に到るに付帝王窓に出て給ひて兵隊の禮を受けらるゝに付人民帝王を拜する爲群すと云へり由て余等も暫時止り兵の來るを待つ已にして兵隊樂を奏し來り王宮の下にて正列し樂を奏す帝窓を開き兵隊の禮を受け賜へり人民亦一齊に帽を脱し聲を放つて萬歳を祝す兵隊は暫時にして又隊を率て去る帝も亦入り賜へり余亦去る共に歸り午食を爲す伊知地、柴氏等亦來會して食を共にす食後中村、興氏等來る樋田氏亦止り談す午後六時頃皆歸る

同十三日陰今日は水雷製造所見物の約あるを以て午前十時頃より海軍士官向某氏案内に來る品川氏も同道の筈にて來る村田、柴、向、品川氏等及余の五人計なり已に到れば社長は留守にて副社長案内を爲せり水雷を放つ筒を製造する所を見次きに水雷の機管を作る所より出來上りてつり合ひを直す所より魚形の運動する迄を一見するを得たり二千筒を買ふ時は誰にても製作の法を傳受する由我邦にても二千筒を買ふたるを以て向某氏傳習を得ると云尤新規の分は未だ祕密にして誰にも示さずと云へり此社は私立にして各國より注文を受け製造を業とするなり支那の注文も亦多しと云ふ其れより製氷器を見る是は此社の專賣にして簡便なる器機なりと云ふ試に氷を製するに暫時にして凝結せり十二時頃歸る午後六時より品川氏の案内にて日本食の饗に赴く調理甚だ宜し九時頃歸る品川氏妻君の談を聞くに今度御注文に成りたる 皇后の宮の御召物は仕立屋の店に酒し衆人の觀覽に供し衆人群集して之を見、すそ杯は衆の手に觸れ汚付きたる由 皇后の御服を伯林に頼むか如きは大きな間違の上店酒にして後ち召さるゝとは實に慨歎の至りなり且つ聞く所に依れば御召十四萬圓の代價の所即金なれば一割五分即一萬五千圓計は引く筈の所右を世話せる領事中にて掠めたりと云ふ領事は猶太人にして西洋の穢多なり如此も亦怪に不足なり日本にてダイヤモンドの賣れると聞き已に女の飾り類を持ち行きたるものもありと云ふ嗚呼日本現今の急進は殆ど亡國の徵候と思はるゝなり各國軍備に汲々として變に備ふ事日に嚴なり而して我が邦未だ東海より西海に至る迄一つの門戸なく纔に海軍公債千七百萬を起すと雖も沿海の要港一も備へなく陸兵纔に五萬に足らず何を以て一國の防禦を爲すを得んや而して内を願れば大土木を起し市區の改正なり官衙の建築なり芝居の改良な

り踏り女服の改正なりダイヤモンドなり皆太平無事の仕事にして人民の休感も不願勝手自儘の政事を爲し上は恐れ多くも 兩陛下を逆か歴しにし下人民の口を塞き力を極めて壓制し文明開化を装ふて條約改正を誤魔化さんとするも西洋の識者は已に其の開化の眞物に非ずして氣候違ひの狂花にして數年ならずして後退なるを知了すれば決して完全の條約は出来る道理なし若しも此上數歩を譲り無理に改正する時は後害實に云ふべからず日本を誤るの罪我れ亦免かるゝ不能歎息の至りなり噫今の條約改正の急務として施す所のは盡く條約改正を障礙する方法而已

同十四日雨向氏来る午前十一時過より中村、奥二氏猪肉の饗あるを以て行く柴、肥田、奥、道家氏等皆行く飯、猪等甚美なり食後奥氏と園基三番、二番勝を得たり樋田、道家兩氏は今夕より佛國へ赴く夜七時よりクナイスト來談議院開設の事に及ぶ別に記すを以て此に載せず九時過き歸る同氏は日本現時の様を以て是視するものゝ如し然れ共都て議院開設の事に付ても先入主と成る所あるか如し

同十五日陰午前八時の汽車にて發しキイルに赴く奥、關氏等送て停車場に来る向氏を案内と爲す同氏手製の牛肉をブリキに入れ来る味好し汽車はハンブルグに行くを正道とし直にキイル港に行くを支道とす余等支道を取りウーロックに到り晝食を爲す午後三時頃なり此の處は聯邦の一にて至小の都府なり然れ共開港場にして商業盛なりと云ふ人口六万計と云へり一時間餘の休息あるを以て市中を見物す已に停車場に歸れば間違を以て他の車に乗り再び出で、他車に移らんとするも已に後れたるを以て二時間餘又此に止まる依て馬車を雇ひ再び市中を見物す町も可なりの良市なり六時五分の汽車にて發す八時頃キイル港に着す

同十六日陰朝九時向氏水雷試験所に行き余見物する事を通す陸軍ラントウエル中尉某來り案内す馬車兩輛を駕す即ち十時頃より行く試験所は港の左方七八町の所に在り到れば已に始まりたる所なり四發計を放つを見たり標的迄四百メートルなり小舟に乘し標的の所に至れり的はイカダを浮へ其上欄干の如く木柱を立てたり柱間一メートルなり的は丸き板を以て作れり其下に網を下く水雷進行の度を知る爲なり余的前に在り水崖より水雷を放つを見る大魚の泳ぎ来るか如し三十四ヨヨにて到る氣壓九十にして水雷の長四メートル八十センチメートルなり七百メートル計の所に至れば氣力全く盡きて浮上る小舟取て引き来る再び同舟に到り乘り放射所に到る其れより製造所に至り一見して歸る一時頃なり雨と成る寫眞數枚を求め午後三時十五分汽車にてハンボルク港に向ふ六時二十分同港に着す樋田、道家兩氏前に此の所に來れるを以て日本名譽領事と共に來り迎ふ即ちホテル、ムンロンクリンセシと云ふ宿に着す

同十七日晴十時頃より領事來る同氏の案内にて港内所々を見物す有名の港丈けありて帆檣林の如し其れより相場會所に到る一時三十分より始まるなり三十分に至れば鉦を鳴らし開場を告ぐ同時に



逆戸を閉つ若し後れ出てんと欲するものは三十ペニーを拂はざるへからすと云ふ已に鉦を鳴せは數千萬の人各取引を始め誠に盛なりと云ふべし諸株券より穀物を始め万物の取引を爲すなり暫時見物して二時頃歸る寫眞數枚を求む午後六時より芝居見物に行く歐州二十世と云ふ外題なりと云ふ樋田道家二氏今日四時出發す芝居格別の妙所なし領事も同道せし所同人も氣の毒に思ひたりと見へ歸を促し一ト幕見殘して歸宿す

同十八日雨十時頃の汽車にて同所を發しクルップ氏の製造所に赴く領事送て停車場に至り別れを告ぐ午後五時着す停車場に到れば杉山某氏及クルップ氏の使出て迎ふ再び汽車に駕し三十分計走り一の停車場に到る此の所にクルップ氏の馬車來り迎ふるを以て駕して同氏の宅に到る頗る壯宏なる居宅なり提理某専ら接待を爲す晩食に至りクルップ氏も出迎へ丁寧な接待せり食後玉突きを始め余は辭して寢に就く

同十九日陰九時より提理の案内にて工場を見物す先づ鐵道線路を造る所及び鐵を混同する所を見る午後より大砲製造所を一見す誠に壯觀なりイタリヤの百噸砲最も大なりとす其の次は露國の六十噸砲なり支那砲あり瑞西砲ありトルコありトルコは野砲四百門を注文せりと云ふ己に大半成就せりスイス國は十二サンチメートルの要塞砲二十門の成就せるを見る支那砲亦多し且つ鐵路も支那のもの多しと云ふ實に我が邦は太平無事にしてダイヤモンドの流行とは大ひなる相違なり此の日支那公

使も來り會す午食を共に同所に食す午後五時より二十四サンチメートルの砲身鑄造を見物す此の鑄造法獨りクルップ氏の得意とする所なりと云ふ鐵を小キルツポに沸し置き數百箇所より持ち來り鑄型に入るゝなり其の熟練可驚大砲參考所あり各種の砲を陣列せり各種の彈丸亦多し六時頃歸る夜公使許景澄氏と夕食を共にせり九時より同氏の宅を辭し伯林に歸らんとす提理等送り停車場に至る十時發す

同二十日陰朝七時伯林に着す奧、關、早川氏等來る有馬賴之氏及家扶二人來る小松の宮御同行にて來り桑港より御先きに來りたる由なり賴万氏亦宮と御同行なりと云同夜クナリスト氏來る明夜行く事を約して別る

同二十一日陰朝柏村來るミシンの製造に従事する人なればミシンを頼めり午食後より河島氏來る時事を談する事切なり薩人には珍敷人物なり當國の軍艦の圖を贈らる七時よりクナリスト氏に行く議員徵集の事に付質問を爲す別に記すを以て略す十時頃歸る島村の手紙及林の書面着す

同二十二日島村及乙猪に手紙を認む山内御凶左右ありしを以て林へ御見舞書を出す夜クナリスト氏を訪ふ談話は別に記す風邪に侵されたる心持なり

同二十三日今日はクルウンウ製所に行く心組の所風邪の爲電信にて斷る村田氏昨日より同所に參り居れり十時歸り來る

同二十四日今日稍や心持宜し奥、中村、向井氏等来る

同二十五日雨今日樋田氏の手紙来る飛語の我を譏するものありと云ふ可笑なり午後二時よりクナ  
イスト来る農業山林等に關する警察の事を聞く二時間計にて歸る奥、關、河島氏等来る當國黨派の  
圖を持ち來りて示す國會も本日開會と云ふ當國の黨派種々に分れ政府黨は次第に減少せる者の如し  
社會黨年々増加する赴なりと云ふ普國の一變するも蓋し遠きに非ざるか如し

同二十六日午前八時より山林學校に赴く走る事一時間エビスハルデルに到る校長及山林官二人來  
迎即馬車に駕し直に學校に赴く先植物の病害參考室より見る動物有害、無害の鳥虫を始め數百千種  
を集む其れより理化學室、伐木器具、路具、各國の樹木見本、講堂等を始め残らず一見其れより校長  
の宅にて午食す再び車にて植物園より養魚場に到り淡水魚の交接法を一見す松の種を取る所を見る  
當校附屬の山林は一万五千町歩なり大概松樹なり百年位を年長とす漸次に輪伐す即ち伐木の所をも  
一見す至極簡便なり材木運輸の鐵道を架するを見る頗る安價にて出來すと云ふ一メートルニマルク  
なりと云ふ移轉自在にして重量三百噸を運ぶを得ると云ふ見畢り氣象臺を二ヶ所見る一は林中一は  
野外なり栽培疎密孰れか善なるの試験法等能く考へを盡せり日暮校長の宅に歸り馳走あり列坐する  
もの山林官二名教官四名なり夜八時の汽車にて發し九時過伯林に歸る

同廿七日別に記すべきなし

同廿八日陰今日は公使館の連中及河島、中村氏等を招く奥、柴、村田、關の諸氏及余なり午後三  
時より酒亭に行く夜七時頃散す此の日郷信を得たり龍次死去の報あり又志和楠太郎死去すと云志和  
は若年の才子にて望あるものなりしが可憐人物なり龍次は惡漢更に惜むに不足と雖老母を察すれば  
可憐事なり阿芳も入學致したる由報を得たり可喜事なり

同廿九日晴サクソン公使館に行き面會を乞ひしに留守なり農務卿を訪ひ禮を述へ且つ暇乞を告ぐ  
卿懇切に談話あり且つ牧場見物の順序を指示す暫時別を告げ歸る午後より河島、中村、奥、大森、  
井上氏等来る六七時頃より進物を携へクナイスト氏に禮を述へ且つ別れを告ぐ歸りに公使館に行き  
暇乞して歸る地圖一本を購ふ荷物大概片付くなり

同三十日午前八時發の汽車にてドレスデンに向ふ諸子送てステーションに到る別れを告げ發す十  
一時頃ドレスデンに着す早川氏來り迎ふホテル□□□□に到る食後油繪の博物館に行く當所の油繪  
は高名なるものにして名繪多しと云ふ一見してセイフル河畔に到る眺望甚だ好し石橋三箇河に架す  
暑中の景色正に佳なるべし六時頃歸る

十二月一日午前十二時より陸軍卿兼外務卿に面會す農務卿に面會を爲す事を頼む午後二時より外  
務卿の三男騎兵中尉某の導きにて騎兵大隊の營を見る同隊は早川氏の附き居りし隊なり右を一見し  
工兵營を見る日已に暮るゝを以て概畧を見て歸る

同三日内務、大藏兩卿水溜所を見る

三日陰午前九時より騎兵營を見る同隊は嚮導する所の騎兵中尉の屬する所の隊なれば別して懇切に誘導せり同所にて晝食の饗あり其れより病院を見る同所は當所人の誇る所にして美麗なり醫正一人誘導せり三時頃歸る今日は王に謁見あるを以て五時半より離宮に行く外務卿兼陸軍卿及式部官待中武官某并に女官二人なり王并に皇后能く佛語を談せられ種々の御咄あり村田氏通辯なり食後日本品の鑑定あり七時過ぎ御暇乞して歸る

同四日午前八時よりフマイホルクの鑛山學校に行く嚮導は鑛山局長某なり已に同所に到れば校長并に提理出迎ふ校中諸室を一見し午食を喫し夫れより官行の穴を見る深さ凡そ□□なり器械にて下り又梯子にて上る此穴は鉛及銀を多しとす器械の運轉は専ら水を用ゆと云ふ職工は三百人計なり穴に入るにはゴム服を着するなり此の學校には日本の生徒三名あり(阿部、春原、野呂氏)と云ふ再び校に歸りホテルにて饗應あり提理は明治七年の頃日本へ來りたる人なり畧日本の事を解するなり三菱社に雇はれ備中の銅山に従事せりと云ふ食中演舌もあり八時頃歸る

同五日式部頭二人に禮に行く陸軍卿に行き妻君并に卿にも面會す式部頭にも面會せり鑛山校の書生も來る午食を共にして歸る

同六日陰寒し午前九時の汽車にてタラントー山林學校に行く先づ停車場に到れば大藏書記官兼山

林官某來り迎ふ共に汽車に忍し凡そ三十分にしてタラントーに到る學校長及日本生徒松本、志賀、野村の三名來り迎へ先づ新造の化學校に到り諸室を一見す當校は新築にして未だ十分の整頓に到らず其れより舊校に行く鳥獸虫魚の動物を始め木材見本、土質落藏及山林圖書室より虫害樹木伐木運輸の方法養魚所等を一見し十二時の汽車にてドレスデンに歸る午食を喫し一時半頃より近傍にある官有地農業を見る此の所は官より人民に貸與せしものにして専ら牛乳を製造するもの、如し田地は四百町歩にして牛二百四十頭を養ふ雞豚亦兼畜す蒸氣にて牛乳を製し又燕麥を製し大農の仕組なり家屋皆官物なり大藏の役人并に借地主某案内を爲せり午後四時頃歸る寒甚し風亦強し

同七日陰八時二十分の汽車にてマイセンに行く皆の所汽車に乗り後れしを以て十時より發す大藏書記官某同行なりマイセンは陶器製造の名所なり大藏省の所轄に係れり已に到れば所長出迎へ先づ有名のマイセン城を見物す過日國王へ謁見の時同城の談あり今を距る四百五十年前の舊城にしてエルベ河に臨み眺望甚佳なり内部の裝飾は近年に至り修繕せし由佳麗なり城中に寫真を賣るを以て數枚を購ふ夫れより陶器製造所に行く頗る壯大なり陶器亦美麗にして人形及び油繪燒最も妙なり人形二個を購ふ同所にて午食の饗あり午後五時頃歸る

同八日晴府會議員某の案内にて工藝學校を見る同所は府立にして參考品頗る備具せり椅子、机を始め實用品を主とするか如し彫刻種類々あり陶器、漆器、織物、繒物、鐵具、銅鑄等力を極めて集

めたり夫れより感化院に行く此は悪少年にして普通の學校にて教育しがたきものを教育す是亦府立なり生徒男女合せて四十餘名あり校付の田地二町歩あり耕作の事も教ゆるなり工業のとも亦教ゆ道徳は耶蘇新教により導くと云ふ新校建築中なり一日の納金通常七拾錢貧者は四十錢校長以下看守人の給料を合せ一ヶ年に一人の生徒に割付れは七百マルクなりと云ふ納金にて不足する分は府會より出すなり一見終り兵營の前を通過し上流の新橋を渡り消防卒の屯所に行き嚮導の某氏出火を令す防火卒急に飛出し馬に駕せり纒に三分時計にて整頓す夫れより梯子を窓に掛け直に屋上に上り噴水器を以て屋上に漙けり其迅速可賞なり右終り旅寓に歸る

同九日晴今日は暇乞して外務、大藏、内務三卿を始め式部頭以下數氏を訪問す其れより王室の寶藏を見物す金銀、寶王の美術を盡せるもの枚擧に暇なし實に可驚なり當國は聯邦中の舊邦にして那最も富めるが故歟他の大國にて見る不能寶物多し概畧を一見して歸る午後四時頃外務卿來訪あり告別の爲めなり五時より外務卿の子騎兵中尉ハフリウス及大藏の山林局長府會議員某三名を招きたれは來會せり皆今回世話になりし人々なればなり共に晩食を喫し九時頃歸る

同十日晴午前十一時よりドレスデンを發す中尉ハフリウス送り來る關氏にも同所にて別を告ぐ走る事三十分計にしてサクツンスイと稱する景地に到る城あり右の山上にあり名畫多しと云ふ某侯爵の所有に係ると云ふ又行く二十分計にして山上に城あり古代の名城と思はるゝなり此邊石山川を挾

み松樹岩を絡み風景殊に佳なり惜むらくは石材を伐採する爲所々岩石を破壊せるを以て大に景色を失するか如し河中鐵鎖を施し蒸氣の船を以て荷船を牽引せり此鐵鎖はハンブルクより埃國の界に入ると云ふ夏月はドレスデンより蒸氣船にて上下する遊船多しと云ふ走る事一時半計にして埃國の界に入る此所に停車場あり市街亦佳なり大なる釣橋あり埃國の官吏來り荷物を改むるなり此邊より稍や開豁にして景色猶佳なり車中に食卓あり就て食を喫す索遜國は工業盛にして到る所に烟突有り埃境に入りてより遽に工業の不盛を覺ふ蓋し地裕にして多く農を業とすればなり一時半頃ボヘムの都プラークに到る此所は先般カル、スバートに行きし時亦通過せし所にして今回を合せて已に三回の通過なり此所より線を變し東方に向て走るなり夜十時維也納に着すグランドホテルに宿す

同十一日晴公使館に行く品川氏の妻君亦今朝來ると云ふ柵橋氏の午食の饗を受く其れよりトルコの公使館に行き公使に面會し彼の國へ行くに付き紹介を頼む公使快く引受けたり暫時談話して歸る午後五時再ひ柵橋氏の案内にて晩食の饗あり品川氏の妻君同席なり八時頃歸る

同十二月陰朝柵橋氏來る午後スマイン氏を訪ふ同氏喜ひ迎へ茶菓の饗あり談東洋の事に至り頗る熱す條約改正の事を新聞に論せ令めざる事に付き氏頗る不同意なり尤の事と思はるゝなり又日本絹の事に至り談話あり有益の論なり別に某豪商の意見を添へ氏の意見を贈り呉るゝを約す七時頃別を告げ歸るハイドロンカヲ氏の本宅の寫眞を贈らる現今氏は維也納府に寓居せり明日はトルコに向ふ

を以て其の用意を爲す昨日品川氏の手紙を落す同氏も病氣の爲歸國する由來る廿六七日の頃發すと云ふ

同十三日晴午前十一時四十五分維也納ノルドハンホフを發す棚橋、片山、醫生某氏等來り送る天氣春の如し夜八時四十分クラコウに到る此の處より左すればペートルスホルクに至り右は則ちゾグツサなりクラコウより寢臺あり此にて車を更ふるなり

同十四日晴午前十一時塊、露の國境に到る西は塊領にしてポドウヲロチヌカと云ふ是より一時間にして露領ウヲロチヌカに到る此間橋あり露境なり露兵之を守る露領の停車場にて荷物及旅券を改むるなりウインナよりクラコロヒ造四百十三キロメートルなりクラコロヒよりポドゾヲロチヌカへ五百三十四キロメートルなり此邊都て寒村にして人民の貧甚し土地は北部に比すれば肥えたるか如し

同十五日晴天氣好しゾグツサに近づけは土味次第に善なるか如し午前八時四十五分ゾグツサに着すホテル、ヨウロッパに宿すウインナより此地迄日本里程の凡そ三百七十八里計なりゾグツサは前は黒海に臨み風景亦佳なり港は堰堤を以て作る人造港にして露船港、外國船及軍港あり商賣盛なり麥粉、石油の類多く輸出すと云ふ午食後より車を雇ひ所々見物す墓地をも一見せり虚無黨の爲に殺されたる將官ステレニコフの墓ありハラニコツフと云ふ人の銅像あり此の人ポーランドを取りたる

人にして後此地の知事と成りて政績亦多しと云ふ

同十六日晴市街を散歩す家屋は大概穴藏共に三階なり故に西歐洲に比すれば皆卑し市街は廣くして美なり樹木車道を挟み人道左右に分れ規模廣大なり寫眞及婦人の繪數枚を買ふ學校は可なり盛なりと思ふ生徒ランドセルを負ひたるもの多く見受けたり生徒のランドセルヲ負ふはスイス及ドイツを最も多しとす然れ共大概十四五以下の少年なり當地にては十八九とも思はるゝ男子ランドセルを負ふて學校に通ふは西歐に見ざる所なり乞食亦多し土人衣服の汚穢なるはムスコウ及ペテレスブルクに異なる事なし人口凡そ二十二萬計にして猶太人三分の一なりと云ふ活潑に商賣するは多くは猶太人にして英、佛、獨之に次く露人は商法を營むもの甚た少しと云へり當地の産物は麥粉を第一とし石油、砂糖、石炭等なりと云ふ今日博物館を見る規模小にして品物も亦少し紀元前の物としてスグロツのサイ數種を見る現今日本に行はるゝものと異なる事なし中に長方形のものゝあり是等の者は支那を元祖とする歟又は印度なる歟未だ審ならず以國ボンペーより掘り出したる菱の化石の如きものあり又ギリシャ代の陶器も亦多し其の繪を見るに現今の婦人の禮服と稱し肩を出したる不躰裁の服は愈古代の遺風たる事疑ひなし日本服制の改革に此の無禮なる服迄採用するは笑止の至りなり銅矢鏃及支那古代制と思はるゝサンスクリット一卷珍物なり又支那の陰陽文像なるものを藏す是等は他國の博物館にて見當らざるものなり甲冑に能く日本制に似たるものあり其の形は日本の筋冑の

如く甲は楯無洞に似たり蓋し蒙古製のもの歟と思はるゝなり

同十七日陰朝村田氏トルコの總領事の所に行きトルコ行の船に乗る許可を受く凡そトルコに行くものは必ず當所の領事の許可を受くるを例とす故に然り午前より馬車にてアレキサンドリヤ公園に行く此は露の先帝の開基にして帝の手植の樹木もあり未だ十分ならず新しき故なり其れより西に馳せ二十町計にして海水浴場に行く夏日は必ず佳景なるべし當時は寂寥として人無し夜曲馬を見物す男女交もなり技の妙なる事所々にて見る所と異らず又輕業もあり力持最も賞す可し是れは日本の力士にて見る不能ものと思はるゝなり十一時頃歸る

同十八日陰午後四時露船某號にて發す艦長は兩度日本にも來りたる人なり此の船毎年一度ウラジヲストツクに赴く由多くは罪人を積み送ると云ふ夜天晴れ浪穩なり船中暖氣甚し上等客は余等三人而已なり終夜眠る不能

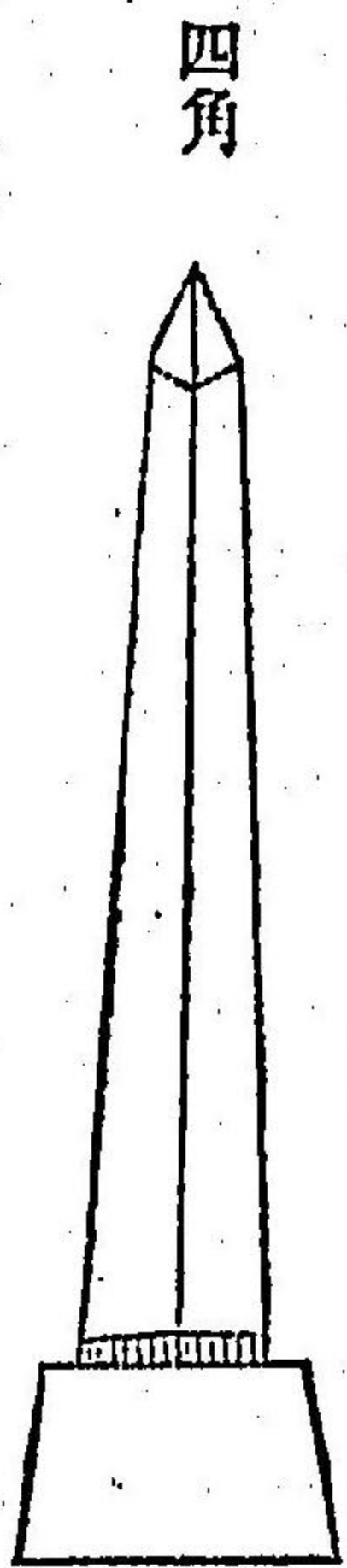
同十九日晴浪穩なり久振の航海故稍や船傷を覺ふ夜十時半イルコの海峡に到り淀泊す峡中は夜通行する事不能れはなり

### 第九章 土耳其入國よりダーダネル通過に至る

十二月廿日晴朝五時頃拔錨海峡に入る歐、亞の兩山海を挟み喚へは答へんと欲する勢にて景色殊

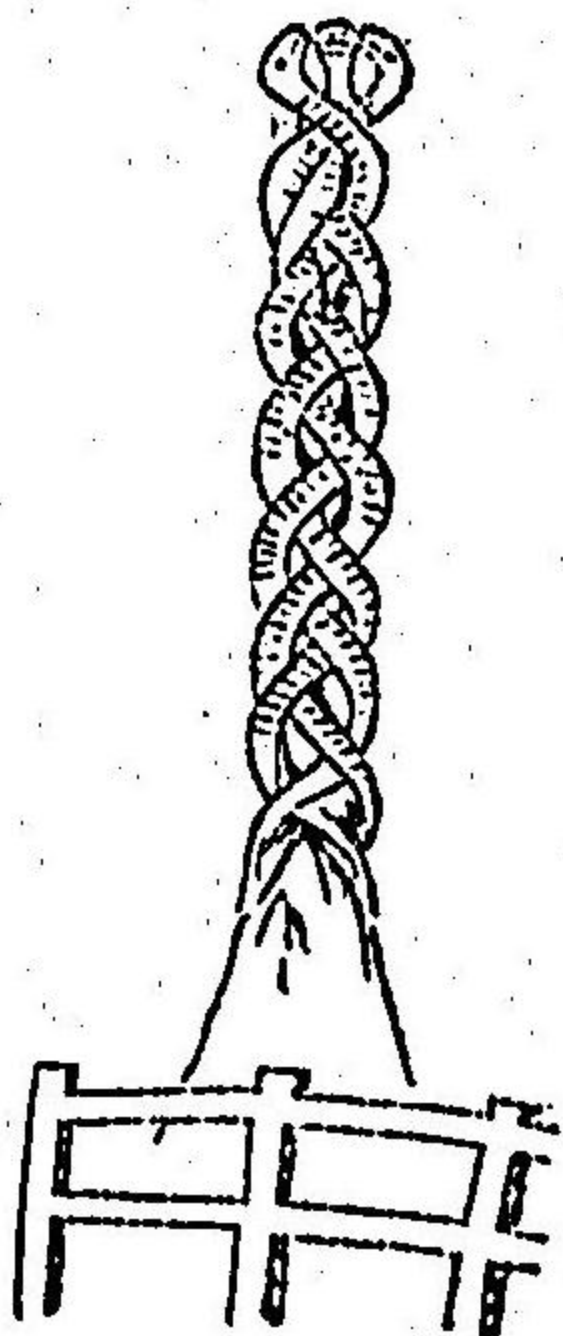
に佳なり兩岸の要所に砲臺を築き嚴重に備を爲せり露艦強と雖も容易に此の海峡を越る不能事可知也午前十時頃コンスタンチノールに着すコンスタンチノールは三叉と成りたる所にして頗る要港なり景色の佳、氣候の善なる事我か瀬戸内海に似たり蓋し世界中二ありて三なき所と知るべし船中より見れば美麗云ふべからずと雖も市中に入れば殆ど支那町の如く其の不潔亦甚し亞細亞の風、依然として存し歐州の西部とは雲泥の差なりホテル□□に宿す午食後案内を雇ひ亞細亞町の方に行き舊王城を見る大橋二あり橋東を歐羅巴町と云ひ橋西を亞細亞町と云ふ蓋し橋東は歐人多く住み橋西はトルコ人多く住するを以て名くと云ふ舊城は三叉の突角にありて景勝の地なり現今寶藏と成り居ると云ふ帝の特許を得されは入るを得故に外部より一見する而已城は支那の城に似たり規模亦大なり羅馬東帝の築く所なりと云ふ城付の寺頗る廣大なり是れ亦羅馬教の寺なりしをトルコ帝の奪掠せしより裝飾を變しマホメットの寺と爲せり千五百年代の舊物也と云ふ天井は石を以て裝飾せしものなれ共往々脱落せる所多し番人傍りの石を取り來觀人に賣ると見へたり柴氏一フランにて豆の如き小石十粒計を買へり是れ天井を飾る所の寶石類なり番人にして如此事を爲す其の不規律可知なり建築の壯大なるは殆ど歐州にても見る事不能なり千五百年前已に如此大建築ありとは可驚なり寺院の不潔と拜神人僧侶の不規則なるは言語同斷なり東門より入り西門に出つ西門の外行く事二町計にして廣き町あり此の處に埃及より持ち來りたる一本石の大石柱を立つ又石を疊み造りたる高塔

あり是れ本は赤金にて包みたりしを後世に至り赤金を盗取りしものなりと云ふ是の塔當國第一の古物なりと云ふ如何にも左様思はるゝなり又銅造の蛇の三足子デレアヒタル立物あり頭は已に破壊せり是れも舊物と知るべし



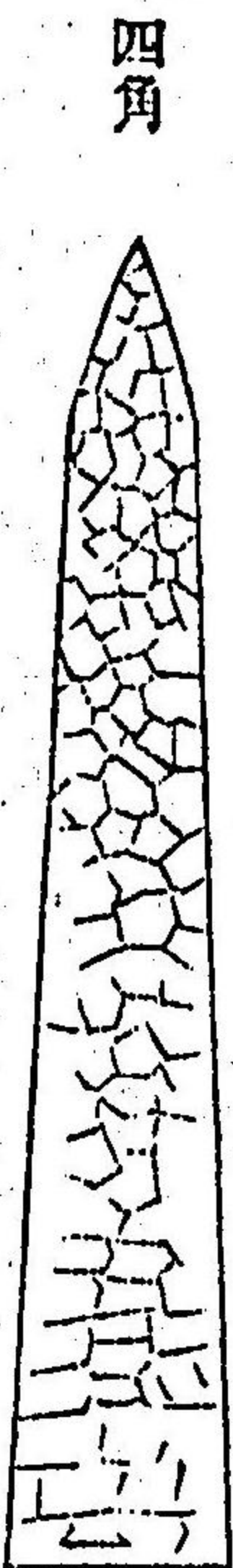
此はエシプトより持ち來りたる石柱なり

此の蛇の形は紀元前四百年ギリシヤの王アキメネウスの兵器を神に献じ神像を造りたるものなりと云ふマホメット戦勝の勢にて自ら斧を振ひ此の蛇の首を斬り捨たりと云ひ傳ふる由なり



是は蛇の三足卷きたる形の柱の如きものなり蓋し古代の神の像なるべし

此塔は羅馬の時に戰馬に勝ちたるもの、名を刻せしものなりと云ふ果して然る歟



城中に大石柱一本あり埃及のボンペーの宮の柱に比すれば小なり其の他泉水堂亦奇なり其れより職工學校にある當國各種の人物人形を見る衣服種々様々にして奇を極めたり其れより再び橋を渡り歐羅巴町に來り海岸通り土帝の夏殿を見て又山上に登り現今土帝の住せらるゝ宮殿の前を通り大迂廻して旅亭に歸るヲスマンパシヤの邸は王宮の直に下にありて眺望好き所なり當時侍從長の如き職にありと聞く土國の軍艦四艘を見る皆舊式の外輪なり貧人多しと見へ乞食體の者を多く見受けたり(舊城内に大木あり古代の遺物なり往古兵卒此の樹下に群し帝食の残りを乞ふて食す若し食十分ならざる時は怒りて食を受けず亂暴狼籍至らざるなし後ち其帝遂に威力を以て之を廢し抗命のものは盡く誅戮して始めて其の害を除きたりと云ふ本城の入り口に罪人の斷頭場あり此の處にて首を切り城門に懸け列へたりと云ふ帝自ら之を閲見するを例とせる由現今は絶へてなし前に述べたる大寺は本城の外にあり別に本城内に寺あり兵卒ありて入るを許さず此寺の外に羅馬帝の棺あり依然として存す此寺も亦頗る舊物と見へたり羅馬東帝の盛なる事是等を見ても可思也)先年暗殺に遇ひたる帝の寺あり小なれ共清潔なり僧侶らしきもの古經を出し示せり自ら云ふ日本に精巧の物澤山ある由なれば是等の物は見るに足らざるべしとて眼を蔽ふたりペンチヨラの坊主と云ふべし此寺には暗殺に遇ひたる帝の父及二親王の棺もあり容易に旅人に見せるは專制政府の處置には意外也寺内に入るには上は靴を着けざれば入るを許さず蓋しマホメット宗は皆坐拜にして日本の神を拜むに異なる事なけ

これは席の上を靴の儘にて踏む事を許さざるなり此宗旨は一日に四度の拜ありと云ふ人民の働く時間なき可なり人口はボスボラス峽よりゲーゲル海峽沿岸を合せて百二十万なりとは書記官某の答なり此都の犬は日本の犬と同種にして其多きこと日本舊幕時代の江戸の如し又庭鳥を家に飼ふものと見へ終夜犬の聲へ絶へず朝は未明より所々に雞聲を聞く雞鳴狗吠相聞へて四境に達すとは孟子の言なりしがトルコの今日猶亞細亞古代の遺風あり市街都て狹きを以て人の雜遝殊に甚し女子の往來するを見る甚た少し偶々見るものは多くは下等の女なり店にて物を賣るものも皆男子にして更に女子を見ず是等は大に支那に似て歐州各國と異なる所なり婦人の働かざる亦可知なり

同廿一日陰柴、村山兩氏外務省に行き添書を出し余の卿に面謁を申し入る、即日面會すべき由申來るに付約の如く午後二時半より行く先づ書記官に面し待つ事二時間計にて始めて卿に面會す今日は急の公用出來大宰相と談話中とて厚く挨拶あり刻を約して二時間も人を待たずは日本杯には往々あることなるがトルコ亦亞細亞風を持続するもの歟如此の事は歐人には絶へてなきなり日本の如きは多くある例なれば慎むべきなり暫時談話して歸る

同廿二日午前十一時書記官某來る余等寶藏見物の事を宮内省に請ふ爲め是れより同省へ行く由なり即ち別を告ぐ余等バサと稱する日本にて勸工場の如き處を見物に行く結構頗る弘大なり西歐各所にて見る所のものに比すれば一層盛大なり小刀及槍の類を買ふ琥珀細工、織物靴の類多しと琥珀

の烟管を買又小女の靴一足を求む其れよりコンスタン帝經營の外壘を一見す規模廣大なる煉化石にて疊みたる城壘にして三角形に回繞し壘凡そ三段にして所々に城櫓の如きものあり半は廢頽に墮すと雖も西方は陸に續き一方は嚴然其の形を存す西南の隅に舊城郭の一部を存す此の所は前に擧る所の近衛兵の如き亂暴兵の本營にして自己の意に満たざる帝は此の處に押込しより又血の池と稱する所あり今猶窪形を爲す其の傍に櫓あり是は獄屋に充てたる所にして戰爭を布告するに至れば各國より來朝する所の使臣を此の獄に入れ後ち引出して此の池の上にて斬首して死體は此の池に投したりと云ふ其殘忍至らざるなしと云ふ其後又支丹某英斷を以て此の暴兵を廢し抗するものは盡く斬殺して漸く其害を除きたりと云へり此櫓に上りて四方を眺望すれば羅馬の盛時を想像するに足るなり其れより城門を出て野外に出つ景色殊に佳なり壘に付て東北に回り行く事一里計にして又郭に入る郭外に堀あり今は僅に形而已存して畑と成れり郭に入りたる所に羅馬時代の古寺ありと云ふ晚じたるを以て行き見ずして歸る歸路は第二橋即最初通過せし上の橋を渡りたり此の橋の上は海軍港と成り軍艦十艘餘碇泊せり海軍省も此の岸上にもあり新築にして美麗に見へたり此橋は浮橋にして大船の通過する時は橋の中央を開き通過すれば又閉つるの仕掛なり港を金角と名く其形牛角の如く左右美麗なるを以て金角と名つくるの説あり或は云ふ此は萬國の金の集る所故に金角と云ふと兩説孰れ歟是非を知らず



同廿三日晴十一時書記官來る外務卿の命により毎日余を來訪するなり暫時談して歸る余は小舟を雇ひ亞細亞トルコに渡る岸に達すれば馬車を雇ひ南方の山上に登る景色殊に佳なり山上より東北を見ればコンスタンチノールの市街を一目に見下し又南方を見ればヘルシヤ路蛇の走るが如く迂曲し直に南東亞細亞を一目するの思ひあり柴、村田氏等と相共に指示して日本の方位を談す此の山をポールゴールローと云ふ近傍の全景を盡く見るべし實に絶勝なり余此山を寫して望郷山と名く余亞細亞極東の人にして亞細亞の極西にありて遂に極東の日本を望めはなり暫時休息し山を下り車に駕し小寺院に行き祭事を見る此は一周間に一度執行する祭にして其の式誠に奇なり高僧と思敷もの神前に坐し神前には經文の如きものを織りたる幕の如きを懸け左右に槍、斧の如き兵器を備へ高僧の前に香爐を据へ左右に坊主兩人坐し又四尺計離れて兩人坐し僧侶又は信徒の如きもの半月形に坐し讀經する體は佛法の縁に能く似たる所あり其れより立て腰をかゝめ拜する事三十分又左右に體を曲げて經文を唱ふ事凡そ一時間餘讀經急なるに従ひ體を動かす事も益々急なり其の有様殆ど狂人の如し日本の日蓮宗、神道の黒住派にてトヲカミエミタメを唱ふと相似て踊りの如し前後二回餘にて終り小兒及び病者を連れ來り高僧自らヲマジナイを爲す也小兒は大人に抱か令め其の手を取りて何か唱へ七つ八つの兒はウツブンに伏せ令め其の腰に上り經文を唱ふ大人は其のヒザに登り同様にす皆病を拂ふの術と見へたり其様態を極むと雖も人民は眞に之を信するもの、如し宗教の民心に入る亦

可恐なり人常に云ふトルコの歐人に悪まるゝは異教の故なりと余思ふ然り雖然トルコの今日迄微々として存國を得るものは亦此の宗教の力なりトルコに若し通常の耶蘇を採用せば早く已に露の食する所と爲るべし此宗教を以て人民を固め政教一致他不顧是れ開明に後るゝ所以亦トルコの存する所以なるべし式全く終り車に駕しクリミヤの役英人の戦死せし埋葬所を一見し再び最初來りし波止場に來り汽船に乘し午後五時頃旅亭に歸る

同廿四日晴本日は當國祭日にて國帝寺院に參拜せらるゝに付見物の爲め外務書記官同行にて午前十時より行く寺二ヶ所あり當國の制として其の日の十時に非れば臨幸の寺定まらず先づ王宮の傍の寺の前なる官舎に行き臨幸の寺の確報を待つ已にして王宮前の寺と定りたる由報あり歩、騎、砲の三兵各々隊を爲して寺の近邊に集合す兵隊は意外に立派なり骨格勇偉にして佛、獨にも劣らず形容を以て云へば露兵に勝るもの、如し歩兵は大概マルチニー銃を携へ砲兵及近衛騎兵は短マルチニー銃を携ひ鎮臺騎兵は米製十三連銃を携ふ一隊の黒兵あり頗る勇壯に見ゆ士官も多くは黒人なり出御近づくに及びゼチラールファミール數十人並に侍從武官と思敷もの寺門の内に左右二列に立つ寺の塔上に一人ありて磔を放つて出御を報す齊しく樂を奏し諸隊磔を放て萬壽を祝するもの、如し帝はホロ馬車にて二人の將官陪乗せり一人は即ち有名成るヲスマンパシヤなりパシヤは當時侍從長の職にあり兵隊は皆奉銃の禮を行ふ寺に入御ありて直ち祭禮始まる禮は坐立互に行ふ平民も間々寺に入

りて拜禮するものあるが如し宮女と思敷もの、車も三四輛見へたり三十分計にして禮式終る是れより觀兵式ある趣きにて帝は一人にて車に御し宮門の左に車を止めらる其れより諸隊順序に分列式あり大に見るべし午後二時頃全く終り宿に歸る今日日本に來りたるアマミラール某に面會す此人の日本に來りたるは今を距る事廿五年前英船にて來り三年日本に在留せりと云ふをばよふ、今日位の日本語は猶記應せり此人は英人にして當時トルコの將官と成りパシヤに成りたりと云ふ明日は耶蘇の誕生日の由にて終夜隣屋にて音樂あり喧噪甚し國教はマホメットなれ共ホテルの在る所は歐人多く住すれば耶蘇教人も亦多しと見へたり

同廿五日晴今日は耶蘇の大祭日なれ共店を休む家は甚た稀なり午前十時より外務官並に侍従少佐某來る共に寶藏見物に行く場所は過日行きたる舊城なり城内は至て美麗なり甚た外見と違へり先つ寶藏に入る古武器、家具の類を始め金剛石其の他の寶石を以て飾りたる寶器、西歐諸國にて未だ曾て見ざる所就中金剛石、眞珠等にて飾りたる椅子及び刀劍類枚舉に暇あらず往時當國の盛なる時各國より分捕しもの多かるべし余前きにサキソンのにて金剛石の多きに驚けり然れ共當國のものに比すれ器物の奇、寶石の多き素よりサキソンの類に非す匈奴のタメルラン等の所持せし器物もありと云ふ古代の小銃亦寶石をチリバメたるもの多し皆火打仕掛なり火繩仕掛は支那、日本にて行はれ西洋及中央亞細亞にては絶て用ひざるものと見へ各國の武器庫を見るに火繩の銃を見ず只サキソンのにて

日本製の火繩仕掛の短銃を見る而已寶物の旗ある由なれ共是れは國帝及大臣年に一度と歎拜する而已にして決して他人の見るを許さずと云ふ右寶庫を見終り宮殿所々を見物す終りに最上景勝の宮に到り此にてヨーロッパの饗あり茶碗を据へる蓋あり日本の酒肴コップの如し純金に寶石をチリバメたり又烟草の饗あり烟管の長さ凡そ五尺計ガンクビを据へる眞鍮の皿あり此の皿にガンクビを据へて吸ふなり此れ國風なりと云ふ市中ゴムの長さ管を付けたるキセルにて吸うを見る同じ意味なるべし其れより支丹の夏殿に行く水に臨み眺望甚佳也對岸は亞細亞にして呼へは答んとす此の宮は三十年前の建築にして殺害に遇ひたる支丹の作りしものにして其壯大美麗なる事佛國ウエルサイユにも譲らすと思はるゝ程なり費用二千萬圓を費せりと云ふ果して然る歟後宮頗る廣大なるが如くなれ共見るを許さず材は多く臘石類也全く歐風にして亞細亞に非す此の支丹頗る驕奢の人にして人望に及び遂に此宮殿にて自殺せりと稱すと雖も實は殺害せられたりと云ふ當國は衰運にして政を治め民を憐み内民心を收め外強露を防ぐを不知徒に西歐十四五世紀奢侈を極めし跡を追慕し遽に大土木を起し西歐諸國と奢侈を競争せんと欲す其殺害に遇ふも亦偶然に非るなり後の西歐に倣ふもの亦鑑むべきものなり浴室の如きは殊に美を盡せり右を見終り船にて對岸に渡り一の離宮に行く此は外面は石造にて内面は寄せ木にて造り頗る精巧なり是れも殺されたる支丹の造りたるものにして曾て三世ナポレオン皇后に與へたりと云ふ皇后此の處に止り宿する五週間計りなりと云へり午後五時頃旅亭に歸る

同廿六日晴午前八時船に乗りブルースに赴くブルースはトルコの舊都にして紀元前より開けたる所なり現今は製糸を以て名を得たる所にして各國より領事を置けり九時出帆船中にて午食午後二時ムダニアと云ふ所に着す是れより馬車を雇ひ午後五時スルーに着す道路平坦にてトルコには珍敷好道也余等昨日案内せる侍従武官少佐某の父某パンヤ前きに此地に知事と成り頗る政績あり外人亦大に賞賛せし人の由道路の良さも蓋し其父の經營なるべし此人大宰相にも登りし人にして本年六十五六の由此地地方地味良好なれ共荒蕪甚多し村落も甚だ稀にしてルーマニア等より移住せしもの多しと云ふ海岸は多くカンランの木を植え又桑も植たり桑は甚だ不手入と見へ出來宜しからず地人の不勉強は可知なりブルースと云ふ所はツレニフ山の北面にあり人口七萬古城あり十年の攻城ありし有名な所也マホタットの起業の地にして現今トルコより言へは猶日本の奈良の如き處也ツレニフ山は山上已に雪を戴けり山下温泉あり暑中は歐客多しと云ふ十年計前大震あり多く家屋損害し一時衰替に赴きしか近年大分回復せりと云ふ商賈は生糸及織物而已也晩に市中を散歩し歸り食に就く同車にアルメニア人あり能く佛語を談ず頗る談客にして歴史に明か也云ふアルメニアの歴史日本□□□アルメニアに來り有名の將官と成り功を立て子孫繁生せし事あり又別に一人あり是れも日本人にして其學榮へたり名前は村田氏記したれは此に略す誠に奇談なりアルメニアは現今は亡國と成り一分は露領に歸し一部はトルコに屬せり此人は露領の人にして伊太利にて學びたりと見ゆ日本人アルメニア

迄手を出せしは我史に見へざる所なれ共頗る史の缺を補ふ談なれは記して参考に備ふ此人云ふアルメニアの歴史はギリシヤ人種の臆説を記し正史を破壊せり然れ共猶他の學者あり實史存するありギリシヤ人史は大概妄説なり昔盛にして今亡國と成るを慨するものゝ如し又近時アミールと云ふ一種の豪傑出て兵力を以て露國に抗すること四十年遂に擒と成りベトラスプールに死すアミール一子あり某の戦に露の擒と成りベトラスプールの宮中に養はれ生長す露の王族某亦アミールの爲に擒に爲り居たりアミール我子と交換を乞ふ露帝其の蕃地に返すを憐むと雖も返さずは王族を渡さざるを得ず不得已返したれは其歸り父子の爲す所を見るに頗る□□□□□□□□□□卒に先て死したりアミール露廷に擒はれたれ共頗る優待を蒙り酒宴の席にも召されたり或時アミール席の隅に黙しありて潜然とし泣出したれは傍人怪み之を問ふアミール曰く吾我か子の言を不聞反て擒と成りたり若し我か子の言を聞かば我國へ露帝を招き今日の如くもてなすべしと云ひたりと嗚呼アミールも亦豪傑なる哉夜風雨あり寒し

同廿七日陰午前八時より温泉場に行く温泉は當驛の手前十四五丁の所にあり二ヶ所に分る男女日を異にする由にて今日は大なる湯場は女子の入浴の日なるを以て見るを得大なる湯は上層にありて結構廣大なり所謂純粹のトルコ湯にして古體なる造りなり外面より見れば傘の如き屋根三つ計に分列して寺の如く多く石造にて成るものなり屋根に丸きがらすの窓數ヶ所を鑿つ此の大湯より道を

隔て下段に新築の湯あり是れは洋風にしてトルコの純粹に非ず湯室は屋根傘の如く石造にして天井も亦丸くがらすの窓を數ヶ所に鑿つ事舊湯に異なる事なし湯室の外に廣き間あり中央に冷水吐出す三面に席あり湯室より出てたる人此の席に就て暫く休息し或は烟草を喫し或はコーヒを飲み隨意に汗を入るゝなり余等上等の客たるを以て二階に登り一室に入る一男來り湯衣を授く下を包むものと上部を包むものと二枚あり皆清潔なるものなり右の浴衣を身に纏ひ下て浴室に入る室は蒸風呂の如く空氣の通ずる所は天井のがらすの窓に各々大指計の穴あり洞穴に入りたるか如くなれ共ガラスの窓あるが爲甚だ明かなり室中凡そ十疊敷計三方及び中央に湯の湧出する處あり尤中央は遺湯にして入湯すべきものに非ず質は鐵湯にして甚だ清潔なり先づ室に入れば蒸氣の全身に感ずるを以て汗を發す入湯暫時にして男子入り來りシャボン其の他汚をを<sup>。</sup>とす道具を持ち來り快く全身の汚を洗ひ去る余國を出てゝより以來背中<sup>。</sup>の汚をを<sup>。</sup>とせし事なし入浴も去る十五日露國のヲデツサにて入りし以來なれば積汚急に去て皮をハグの思ひあり其れより又新浴衣二枚を持ち來る之を纏ひ室を出て二階の室に來るに及び又新衣を持ち來る之を纏ふて暫く横に成り休むなり茶、コーヒ、タバコ隨意なり烟草は長き皮の管あり端に大なるピンを付其の中に水ありピンの口の所に烟草の<sup>。</sup>が<sup>。</sup>ん<sup>。</sup>く<sup>。</sup>び<sup>。</sup>あり長き皮管の端に吸口あり支那人用る所のものと相似たり諸事頗る清潔なるものにして羅馬の盛なる頃の遺風なるべしスマイン氏曾て熱湯浴亡國論あり如此湯に日々浴すれば精心卒に恍惚として氣力を失

ひ壯心も碎け情弱に陥るは必然なれば全國此の風に化する時は國勢の衰るも亦必然なるべし右スマイン氏の説も亦徒言に非ざるなり其れより馬車にて舊城郭の内を一見し當トルコ帝の祖ヲスマン一世の墓及其の子ラルガンの墓をも一見す棺槨依然として存し其の上に石造の寺院を築けり又ヲスマン帝位に登りたる時或王より送たりと云ふ金剛石にて飾りたる寶牌あり一見す番人棺を守れり其の他六代目迄の墓ある由なれ其他は見るに及はず城跡はレンツ山の麓にありて古代の戦争には堅固無比なるべし水、山麓より漏出す頗る清し此水は城中に導き用水に供す古代の構造に水利最も妙を極めたるものと云ふ古代の城壁猶所々に残り羅馬時代の芝居の跡も猶建築残れるあり頗る壯大なる事推して可知なり此城十年の攻城を受たる有名なる所なり古代は頗る盛なる大都府なりしも今は寥々たる寒驛にして家屋も粗造なり且つ十年前大地震の爲破損し未だ回復する不能と云ふ然れ共漸々に引直し現今稍や好景氣に赴きたりと云ふ製糸場五十餘箇所ありて右に従事する女子三千人計もある由なり其の他家々にて糸を製するもの亦多し余政府に關する工場を一見す女子凡そ百名計糸取りに従事せり多くはルーマニア、アルメニア等の人にして純粹のトルコ人は只一人あるのみと聞く果して然るや否を不知此所の水頗る製糸に適せるを以て他所にて製するものに比すれば價も高しと云ふ女子の賃錢一日二十五錢より三十錢なりと聞けり前の知事大に此地の爲めに力を盡し之れか爲め大に生計の度も進みたりと云へり桑の作り方は高サ一間計にして日本の作りに似たる所あれ共

敷等下るもの、如し人家近傍の桑は能く出来たるあり、雖も概して手入方宜しからず地味は適當せりと雖も肥料を用ひざるか如し若し日本の如く培養に力を盡さは蠶糸の盛なる可知なり樹木はクルミの木又白柵の木多し此國を開拓せば無比の土國たるべきに政治宜しきを不得日々に衰替に赴くは可歎の到りなり又一の大寺を見る是は四五百年代の物にして建築亦廣大なり極の舊都は東方の山麓にありと云ふ地東西に長く南北は凡そ三里計と思はるゝなり東西の長さは九里計もありと云ふ賊に良地なり我が國にて云へば奈良と云ふか如き地形なりトルコの舊都にして亦我が奈良に似たり當地にては蠶の小なる時はドングリ葉をも喰はずと云ふ事あり怪しむべし其れよりハザー即勸工場に行く建築亦古代の物を存し弘大なり種々の雜貨を陳列し雜沓極まれり地織の絹物及木綿織も亦多し余薄絹少々を求む絹物の外別に珍敷ものなし市街の大なるはコンスタンチノールに譲らざるか如し此ハザーと稱するは町なれ共家根あり左右の横に明り取りありて暗からず西歐にて見る所に比すれば更に大なるものなり其れより右の方山を廻り車を馳る事半道餘にして眺望亦佳なる所あり此にも温泉あり所々より出づるか如し此の所に寺ありて支丹の墓あり一のホテルに就き茶を喫して歸る雨降る前に温泉二ヶ所と書したるは誤なり此の所を除きて都合四ヶ所あり鐵湯、硫黃湯又銀湯ありと云ふ余の入浴せるは鐵湯の方なり

同廿八日陰午前五時出發の心組にて支度せし所車遅滞せるが爲め六時に出發す九時ムゲンア港に着す直に乗船す十時頃出帆海上穩かにして午後三時コンスタンチノールに着す船中彼のルーメンヤの商人も同船せり今日別に記すべき事なし

同廿九日晴午前十一時外務書記官來訪午後一時小船に乘し金角港を溯り海軍港を一見し溯る事凡そ三マイル計にて船通せざるを以て上陸し支丹の離宮を外見す暑中避けの爲め設けたるものと見ゆ暑中は市中の男女來り散歩し頗る雜沓なりと云ふ川を挟み山あり景色佳なり山皆樹木なし又開墾もせず農業の等閑なる可知人民の遊惰なる其原因なるべしと雖も政府民政に力を用おす租税の法宜しきを失するもの許多なるべし江に傍て彈藥製造所あり番兵周圍を守護する事嚴重なり午後五時頃歸る軍港内に停泊する船凡そ十六七艘と覺ふ其の中堅牢と覺敷軍艦十二艘あり軍港の西傍山に寄て一大部落あり猶太人の住する處なり山上皆猶太の墓は耶蘇及マホメット教の者の墓と異り皆石を横臥せり遠く望めはカルタを散らすか如し縱横亂雜なりトルコ人の墓地は必ず白柵の林を爲すを常とす之れ昔日の習俗なりと云ふ昔日は子生るれば必ず一本の白柵を墓地に植へ死すれば亦如此故に墓地に白柵多き所以なり今は其習慣も止みたりと云ふ

同三十日陰終日出てす夜以太利人某來訪スエスの東方に當り別に一の運河を開くの目的あるを以て英の貴族の依託を受け土政府に許可を得んか爲盡力中の由談話中佛の非職少尉某來訪此の人はテレカラフ及針金製造の器械を作る會社中の一人なり余か歸途佛國に到らは右の會社に立寄一見を乞

ふ旨申置き歸れり

同三十一日微雨今日は當國例祭にて國帝謁見を許されたれば外務官某と同行にて十一時先日行きし王宮傍の寺院の前なる客待所に行く先日の式の如くヲスマンバシヤ及マルシヤデルビーシユバシヤ御陪乘にて同寺に來らる祭禮終て直ちに分列式あり各隊寺の表門より入り左に廻り禮を行ふ帝は南窓を開きて禮を受けらる右終て帝は一人ホロバシヤにて歸宮せられヲスマン及一人の陪乗せしマルシヤは馬乘にて扈從す他諸將官等は初の如く寺門の内に正列し送り奉る其れより中將ヅニリザパシヤ余等を導き王宮に到る休息所に到ればヲスマンバシヤデルビーシユバシヤ來り挨拶あり互に椅子に依り談話すヲスマン曰く日本近日の進歩は殊に速かなる事誠に驚きたり軍艦も日本にて製造せる由なるが諸物全く日本にて出來るかと同ふ且軍人の服裝の事杯質問あり余ヲスマンに向き君かカクレナキ偉勳は東洋にありて傳聞し御シムハシク思ひ居りしか今日親く御目に對り御咄を承るを得るは大慶の至り也と述べたれば御言葉の赴き辱なしと答ふ同バシヤは英、佛共に外國語に通せず余亦同様なれば侍從武官大佐某通辯を爲し余は村田氏をして通辯せ令む應答の自由ならざるは遺憾なり已にして拜謁の命來る即中將某の先導にて進み御坐に入る中將は是れより退く帝シキミのきは迄出迎へられ今般訪問に與り辱なしと述べたまへり其れより奧へ誘はれ御坐の側に行く帝傍の椅子を指し就くへき旨命あり通辯は大佐ラギノブペー氏佛語を以てす村田氏亦佛語にて通辯す即ち命に従

ひ椅子に倚る帝のたまはく日本の進歩は速かなる事驚くべし是れ迄日本人度々當國に來訪あり余常に面會し種々の談話を聞き大に喜べり何卒日本よりも當國と貿易交通の道を開き互に交通致し度し卿國に歸らるれば此の旨意を皇帝陛下に傳へられん事を望むとあり余先づ前きに日本人の來り御優待を蒙りしを謝し奉り次に自分今般御國に來り御寶藏宮殿其の他大祭をも拜し且つ今日は謁見の榮を辱なくし冥賀の段御禮を述べ次て帝の御言葉に答へ奉りて曰く日本の各國と交通を始めしは實に近來の事にして外交に不慣より各國との條約も不充分なる事多し種々力を盡すと雖も未だ十分の運ひに至らず其内國亂等も起り内治外交共に多事にして未だ我れより進て交通を求むるの運ひに至らず故に御國へ御交際を求むる迄の運ひに進み兼ね候今帝の命せられし御言葉は歸國の上直に我小帝に申し上くと御答を爲す帝の曰く歐人は都て利己自主の者多く人の利害には頓着せず定めて貴國も迷惑なる事あるべし然れ共我トルコは決して然る事を好まず只相互に利益を謀り公平なる商業交際を致す心得へなりとのたまへり其の外一二の御談話あり兵隊を見物せるが如何にやと御尋ねあり誠に熟練と拜見致せし旨答申す其れより侍從武官勳章を持し來る帝のたまはく皇帝陛下に親密を表する爲め卿に此の勳章を贈る旨命あり（此の所通辯の間違ありたれ共別に不都合はなし）余難有拜受す村田、柴兩氏亦然り右終り帝のたまはく長の旅路健康に歸國致されよと余命の辱きを謝し奉りし時帝御手を出され握手の禮を賜ひ即ち退く帝四五歩計立て送られたりき即休息所に茶を賜ひマル

シャル以下に禮を述て再び先の客待所に歸り勳章の佩用を傳受して歸途外務卿の宅に禮を述へ旅亭に歸る午後四時頃なり當夜は除夜に付三人シャンパンを傾け眠に就く夜雨降る夜以太利人來る暫時にして歸る

明治廿年一月一日陰午後より晴る市街を散歩見物す市街道路甚たし門綠葉を以て飾るありと雖も大都市平日に異ならず蓋しトルコは固より曆を異にしギリシャ亦別に曆あり猶太亦然り而して當府はトルコ人、ギリシャ人、猶太、耶蘇新舊兩教等混合せるを以ての故に然るものなるべし

同二日晴午前十一時頃より小舟を雇ひ釣を試む便船五日に非れば出帆せず空しく五日迄船待を爲すの徒然を慰むる爲なり葡萄酒及柚實等を携ふ釣る事二時間にしてアヂの如き小魚を三人にて百四五十を得たり即ち或は焼き或はスヅクとなして十分食す大きに慰と成れり午後四時頃歸る一月二日を以て釣を金角港に垂るゝも奇遇と云ふべし天氣我三月初旬の如し

同三日晴今日は終日出です晩に當國の少佐にて外務兼侍從武官たる某來り談す同氏は本農商務省に奉職せる人にして當處農商務の事に明かなる由なれば農商の事に付一二質問を爲せり同人の答に依れば當處は自由貿易の主義にて纔に入歩の税を課せしも各國の輸入に課せられ自國の產物織物の如き及麥の如きも衰微に赴くより近時に至り漸く二割の税を課するに至れり何分にも我が國は境内叛徒多く一つを平定すれば一つ起り其間各國の關涉援護を爲すありて戰爭絶へす内治に迫らざる

實に慨歎に堪へず外務省の如きは始終各國と談判ありて戰備の外殆ど他に迫らし云々彼れ云ふ貴國の如きも成る丈け外國人を雇ふ事を止むべし我が國獨逸人數名來り居ると雖も只金を取る考へ計にて正實なし只一人獨逸人にて某パンヤあり是れ計は忠實なり云々余問ふ近邊荒蕪地多し何故に耕作せざるや樹木等を生育せは甚た適すべしと思ふなりと彼れ云ふ近邊は寺院の地多し且つ土地左迄善らす耕作を爲すも別に益なし山林の如きは少しく邊鄙に入らば自然鬱々たる林多し未だ道路の便を施す能はされは十分の利を見る事不能外事に迫れて内治に迫なきは遺憾の事也柴氏フルースに架す鐵道の荒廢は何故なるやを問ふ某云ふ此等は許多の歴史の有る事にて實に歎息の至りなりとて別に答へず此人英、佛の語に通し才氣識見もあるか如し兎角上流者因循姑息にして事を斷行する能はずして日に困難の域に赴くものと察せらるるゆに思ふに此の國は行政順序を誤り情實に制せられ官制を改むる事能はず官吏多くして事務捗らす政費缺乏の爲官吏の奉給をも時々支給する事不能賄賂公行して官吏正しからず其の本元官を汰する事不能より生ずるの病許多あるか如し有志の徒ありと雖も支丹奮發せらるゝと雖も大部を占めたる官吏社會多く各國の寄合勢なれば忠を國に盡すもの甚た少く利己主義公に行はれ忠者納れられず嗚呼一の般鑑なる哉支丹は内治、外交に深く心を盡され頗る志のある人の由なれ共可悲は良政治家なく政治腐敗せしものと見ゆヲスマンパンヤは有名なる勇將にして露國に對し一大強敵なりと雖も恐くは政治の人に非ざるべしと思はるゝなり晩食を共に

し八時過歸る同氏食後我宅に於て茶を薦め度由懇切なる咄ありたれ共夜更くるを以て辭す昨夜グラ  
ンビジュールの使勳記を持參す當所の習慣として金百五十フランを贈る實に馬鹿けたる咄なり當夜家書  
を認む

同四日晴好天氣今日も出てす今朝家書を出たす午後五時より外務書記官を招き留別の宴を催す柴  
氏賞牌の事に不都合あり談判せり先づ其の儘に預り置くなり明日は出足に付支度を調ふ

同五日晴朝書記官來る昨夜の贈り物を返却に來る可笑午後三時佛國船メサジクマルチニー社の船  
に乗る船號はカンボージュ船長はファールと云會社派出長マルテレダバリエール氏昨日來訪今日  
端船を出すことを懇ろに談あり氏は日本横濱に在勤せし人にして昨年四五月當地へ轉したる人なり  
書記及同氏も船迄來る四時三十分出帆海上平穩なり半月中天に昇り氣候春夜の如し

同六日陰午前三時頃船暫時止る是れダーゲネル海峡なり七時頃甲板に上れば已にダーゲネル海峡  
を過ぎ多島海に入るダーゲネルは土國の最大要害にして地中海より來る敵船を此所に扼する所とす  
堅固の砲臺もある由なり黒海の入りにボスボラス海峡あり而して地中海より來るには此の要所あ  
り土國は天險の良都にして若し強國をして此の都を占め令めは實に世界を支配するに足るべし而し  
てトルコの衰替漸く社稷を維持するも政の組織宜しからず役人に忠實の人少なく萬事姑息に安んじ  
内治振はす今日國土を維持するものは兵隊の力なり役人兵隊杯の俸給も繼に三ヶ月に一度計りの外

は渡すを得ずと云ふ會計の困難可知なり故に小官吏等事に托し外人の金を貪る事甚し考へ置くべき  
事なり午前十一時頃船少し動搖す余室に入り臥床に就く午後五時頃より平穩なり食は三度を缺かず  
夜月明かなり上等客五人余の一行を合て八人なりトルコの婦人二人英の男女二人波蘭の男子一人な  
り夜雨降る

### 第十章 ギリシヤ上陸よりコルフス島着に至る 明治二十年

一月七日陰午前一時三十分頃ギリシヤ、ビレー港に着す夜深きを以て臥床を出てす再び眠る七時  
床を出て荷物を片付け上陸す宿屋より案内の者出張せり蓋しトルコにて雇ひたる案内ジョルジなる  
もの電信にて余等の出發を逆する爲なり當港は格別大ならずと雖も天然の良港なり當國の軍艦五艘  
計あり中一艦は甲鐵の良艦と見へたり佛國の軍艦一艘停泊せり露艦二艘亦停泊す沿海の山は大概禿  
山なり此のビレーと云ふ港は人口凡そ三萬計雅典へ馬車にて一時間なり即ち馬車にて雅典に赴く汽  
車もあれ共馬車の方反て手数を除き便利なり十時半雅典府に着す當府は人口八萬人にて丘陵の間に  
町を爲し多く新造なり蓋しトルコの管轄を離れて獨立せしより四十餘年其の以來市區道路の改造に  
着手せしと思はるゝなり家屋多くは二階にして四階五階は殆どなしと云て可なるか如しトルコより  
此に來れば大に趣を異にし歐洲に入るの思ひあり王宮は町の中央にあり隨分立派なり前には公園あり



り開闢にして景色佳なり余の宿するグラントホテルグンクルテールは即王宮の前にあり午食後案内を連れ名所古跡を見物に行く先づ古代の競技場の古跡を尋ぬ町端にあり三面は高き堤の如きあり形カマドの如く左の行き當りに穴あり他に出づるなり此の所本大理石にて壘み三面は皆見物人の腰掛ありて凡そ六萬人見物者を納るを得ると云ふ此の中にて種々の技藝を角し勝者は右の高所に上り葛の冠を戴くを以て無上の名譽とせり劣者は耻ちて大衆の中を退くを潔とせず彼の穴の中より他に出づるを例とせりと云ふ此の都羅馬の手に落ち歳月の久敷大理石の建築石杯は皆破壊して他に利用し今は僅々數ふる計を剩せる而已なり此の創設は紀元前三百五十年なりと云ふ夫れよりシユロテーの大寺院の跡を見る此の所大概破壊し大理石の大柱十六本を存せり本百二十本ありと云ふ現今土中を鑿り經營の跡を搜索中也全備の時の壯大なる事此の存在の柱にても想像せらる寺の長さ百十六メートル幅五十六メートルありしと云ふ果して然るや否や紀元前五百三十年創立しビジストラットロ人のシリヤの王のアンチヲキウスと云ふ人紀元前百七十四年着手し未だ成らず紀元後八十六年シラト人其の中本の柱を羅馬に持去れり其れより紀元後四百三十五年着手せしと申し一の石壘門を存す楕圓形也是は羅馬の所領せし時作りたるものにして此寺を建立せし頃は圓形の建築は未だ始まらざりしと云ふ果して然るか門は素より大石柱と相似す後世の物たるは論なし其れより三町計距りて石質の小山あり上にミチルフと云女神を安置せし石造の堂宇の破壊せし残りあり總門及堂宇猶多く

存在し名作の彫刻もの亦幾分を存せり此彫刻は四五十年頃猶多くありしかトルコの所有せし時英人某トルコ人に賄してもらひ受け持ち歸り彼の國の博物館に藏すと云ふ石材は盡く白の大理石にして當府より北方に當りたるベントリコンと云ふ山より切り出せりと傳ふ此女神は金と象牙にて作り頭部は屋蓋より露出せりと云ふ其の高さを想像すれば十五メートル以上の者と思はるゝなり石柱所々に彈丸の跡あり是は後來戰の節蒙りたる疵なりと云ふ紀元前は多神の教法なし故に種々の神を安置しありと見へ小堂の存するもの二三ヶ所あり此山要害の地なるを以て羅馬人は是を増築し城郭を作りたれば嚴然たる城塙今存在せり女神の堂下巖石の下に當時の芝居の跡あり形今の芝居の半月形にして觀場の腰掛皆石を以て造り三萬人を坐せ令むるを得ると云ふ其規模實に壯大にして彫刻の精巧なるもの今猶存在せり是芝居の開祖なりと云へり現今の芝居皆半月形にして自然と後方を高くせるは此遺跡に習ひしなるべし芝居の後方種々の建築物の破壊せるあれ共恐くは羅馬人の築きし外郭の殘物と思はるゝなり此山上より望めは府中是一目の中にあり麓に四つの丘ありて相連れり第一を耶蘇の弟子なるセンポールと云ふもの衆人を集め説教をなせりと云ひ傳ふる所あり又次を女神山と云ふ元堂宇ありしも今は全く變して觀象臺を新築せり其の左は昔の議事堂にして歴史に有名なる所と云ふ其れより左に望み山腹に穴あり鐵窓を設けたる所あり是は名高き哲學者ソクラテスと云ふもの牢込られたる石室なり又其の左の山上に残りたる石塔は羅馬のビルハースと云ふ王の墓なり全山をア

クロポールと稱す山上の第一なる堂をハルテノンと云ひ即ミチルフを祭る所其の前なる稍や小なるはエレロテーションと云ふ此れはギリシヤの第二代の王を祭りしものと云へり前に述べたる山下の大寺の神は男神にて神の王とも稱すへきものにしてシヒテと云ひ此も金と象牙の作なりと聞く山上より東北を望めはサロシニス島を見る此島灣は古昔ヘルシヤの海軍艦殺せられし所なり近方皆有名なる古戰場ならざるなし此に新造の家屋あり此の所より掘出したる古物を陳列し衆人の縦覽を許せり石佛類の彫刻物最も古雅なり今に人力を費し古物を掘り出さ令むると云ふ城門の存するもの三つあり第一の門内にトルコ字にて彫り付あり文意はギリシヤ人入るを許さすと云ふ文なりと云ふ第二門の内には三四百年代の鐵製砲の破裂せしもの及び石彈、鐵彈の類を陳列せしは此城を攻めし時の遺物なるべし雨來るを以て午後五時頃歸る地圖並に案内記を求む

同八日晴今日は外務省を訪問する心得にて卿の有無を問は令めたる所内閣會議に付省へ出頭せずと云ふ午前十時頃より博物館を見る館は現今百術學校の中であり(今傍に新築中なり落成の上は此に移すと云ふ)館中に陳列する所のものは皆當國の古墳より掘り出せる刀劍、陶器を始め種々の飾り物、金、銀、銅、寶石を始め古鏡類亦多し中に女神鏡を頭上に戴き圓鏡上雜の雄二羽相對して立つ其下左右に兔二疋相對し其下犬歟鹿歟分明ならず二疋相對す又左右に菊花の如きもの二ツ付着せり其他雜及人形等口器に用ゆるものと思はる兵器は槍及劍にして刀はなし其の中短劍の鞘と思數劍

製のものに金象篋にて五人の兵士楯と槍とを携へ獅子と闘ふ彫もの其精巧なる事實に今人も及ぶべからず是れ皆紀元前三四百年のものなりと云ふ土燒の人形の如きも精巧實に可驚死せる形に似せて作りたるものなりと云ふ説あれ共恐くは然らず死人の供とするの心得にて許多の人形を納めたるものと思はる支那の古代の俑と同様の意なるべし右は大概一ト所の墓より出てたるものなり金、銀、銅、石、陶器類にして嚴然少しも形を變せざるものは金と陶器と石器なり其の他各所より掘り出せる古器は別に陳列所あり又石の彫刻ものも別に室あり午十二時に一旦閉室するに付歸る歸りに寫眞十餘枚を求む一枚一フラン半なり食後再び出て時計及風見堂を見る是れ亦紀元前の古物にしてベニウス神堂の山下にあり古代の町の繁華なりし所と思はる此時計は水量を以て時を知るの仕掛けなりしと見えたり其の跡而已存して器は存せず堂は嚴然舊の如し八角形にして八方に風の神の形を顯す皆衣服に風を受けて天人の空中にあるか如し其彫刻亦頗る精巧なり其れより古代の記念塔を見るテシクラットと云ふ人の建てたるものにしてテモステルの塔と云ふ分明ならず甚狹隘なる所にあり見物に面白からず蓋し昔時は中央の土地なりしなるべし其れより古代の墓を見る是は六年前に見出したるものにして全く地中に埋り居たるものなり現今猶發掘中なり皆紀元前の墓にして文字及彫刻新物の如く思はるもの多し然れ共久敷地中に埋没ありたれば斷折せしもの多くして完全せるは甚た少し皆歴史を考證するに足る婦人の墓には婦人椅子に倚り男子と握手告別の像を彫せり蓋し夫と別

るゝを像りたるものなるべし又三津川にて小塚の老婆が渡し錢を食ふの形を刻せるものもあり四人の像全く存す又某と云有名なる壯士戦死せしものゝ爲に建てたりと云ふ碑あり壯士馬上にて槍を持ちたる像にして文字共に明瞭なり石は皆大理石なりトルコの墓は男子は碑の上に頭の形の如く丸く成せり女子は碑の上を草葉の形に爲し其下に目章の如きものを刻せり其形略ぼ此の女の碑と相似たればトルコの墓碑も亦古代の遺法なるべし此の所追々必ず奇物を出すなるべし現今當府に古物索搜會社ありて嚴重に搜索し且つ古物を他に出すを禁するの法律もある由なり其れよりカベツトと云ふ山に登る高サ二百八十九メートルにして石を以て質とす町の東方にあり全府を眼下に見下し眺望殊に佳なり頂に耶蘇あり古きものに非ず山の九分計の所に井戸あり近年見出したる由にて蓋を以て閉ちたり此山に登れば雅典の近傍盡く見るべく實に絶景なり午後五時頃歸る夜月稍圓なりテゼーと云ふ寺あり稍完備せりマラトンの戦にテゼーと云ふ人大功ありたれば其人の徳を稱して此寺を建てたりと云ふ建てたる人はシモンと云ふ紀元前四百年代なり

同九日陰午前十時頃より馬車にてエレジースに行く此エレジースと云ふは雅典府より西方に當り凡そ四里計の所にあり道田間を経て春郊を行くの思あり山間橄欖の林頗る多し古代の物と云ひ傳ふる大木あり千歳の者たるは疑なし其の中一本最も舊物にして古代農神の自ら植へたりと云ひ傳ふるものあり榮、村田氏等實一二を摘む行一里半計にして小高き坂あり行くこと又十町計にて古き寺あり

り本某神を祭りし靈地なりしか今より五百年前に此寺を建築せるよし上古の石材存するものありトルコの此地を占領せしより寺の天井に附着したる金箔を火にて焼き取りたりとて金の存する所甚た稀なり表門の方は高塚破壊なりに尙存在す寺は希臘教なり近年迄無用の僧徒多く住せしが政府より命して去ら令めたりとて寺番と思しきもの一戸あり此地に人家四五軒あり馬に水を與へ再び馳する事十餘町にして海灣半月の如きを見る是れ古代雅典の海軍ヘルシヤの海軍を破りし有名古戰場なり灣を右に廻り行くこと里許にして古代學者ストラトと云ふものゝ墓あり石材破壊せしも跡猶尋ねべし其れよりエレジースの入口に古井及古橋あり橋は廢物なれ共井は名水にて人民遺路より來り汲むなり此地古代は雅典に次て盛なる所なりしか今は寥々たる一寒村にして村民は多くアルムニアの移住人也一の小山象の鼻の如く西より東に出て海に臨めり其突角の下に大寺の跡あり是れも紀元前四五百年に創立せしものにして雅典府にある所の女神堂の作者と同人にしてピチャースと云ふ名工の作なりと云ふ幾百年來破壊埋没せしを十年前始めて發見し近年に至り雅典人社を結び古物搜索を主とせしより此地に住せし人民を近方に移し發掘せしより今は十分の八を掘り大石柱、大石礎を始め諸佛像等過半は掘り出し寺院の基礎も大概相分りたり只上層と下層と大ひに石材を異にし上層の物は前に記せし如く紀元前五六百年たるは文字及び他の歴史にても分明なりしも下層は某の年代を知らずと云ふ下層は未だ十分の一をも掘るに至らず全くの搜索を終らざれば總ての事明言しが

たしと云へり其規模の大なるは建築の壯大なるは彫刻の精巧なるには實に驚くに堪へたり余等日本人は大坂城の石を以て至大と認めしか二千餘年前已に如此大事業を起すものありとは意想外なり全體の規模の大なるは雅典にあるものより數等大なるか如し神體は農の神なりと云ふ彫刻ものに麥の穂及葡萄又橄欖の實の如きものを彫りたれば農神の説確かなるべし此山より北東に廣野あり農神の始めて耕作せし所なりとの説ありと云へり羅馬の代此山上を以て城郭とせしよしにして土壘、古井猶存せり且つ望樓の如きもの稍全形を存す是れ皆四百年前のものにして□物に非ず羅馬の此に據りし節は此の大寺は己に埋没して跡なかりしなるべし海岸に波止場あり古代の物と思はる番人あり余等を誘ひ發掘せし古物を見せ令む内小なる土器各一ツを余等三人に恵めり金少々與へて去る發掘の所に到れば番人の贈りし如き土器二三を見付けたればひろい得て納む是れ二千年外の舊物なり神に供するものにして日本にて云へばカハラケの如きものなるべし古代の瓦澤山あり持歸り度思へとも重きを如何せん此の所眺望極て佳なり彼のベルシヤの海軍の大敗せし海峽目前にあり當時の有様を相像せらる山上にて食を喫し再び車に駕し歸途に就く今日は日曜日付村中休業にて男女老幼服を改め遊歩せり若き女子の服装大に奇なり胸の邊より下に金錢を並へ掛けて傍りとせり是れはアルマニヤの俗にて未だ嫁せざる娘は自らかせきたる金を胸より頭迄の傍と爲して人に示すと云ふ其の金の多寡にて女の財産の多少を卜し又女の能く働くを知ると云ふ面白き風俗なり午後五時頃歸る夜雨

同日陰午後市中を散歩す外務卿の使來る現今議員改選前に付多忙なれば只今來訪被下度と依て直に行き面會し維也納の公使館より依頼せし禮を述べ明後日の出達を告げ歸る當國は議員の八ヶ間敷所にして獨立以來政府の交替八ヶ月平均なりと聞く來る日曜日は改選日の由なれば政府の多忙は可知なり當邦は二十歳以上のものは盡く選舉權を有する由にて黨派も多く獨立以來内閣の更替平均八ヶ月なりとはクナイスト氏の談なりしか内閣の更替に拘はらず繼の年月に市街の改正道路の修繕能く届きたるは人民自治の精心盛なるの致す所なるべしトルコとの景況に比すれば雲泥の差あるものは專制と自治との差に依るなるへし中央集權の害可恐なり寫眞二帖を求む

同十一日晴午前十時より博物館を見物に行く館は新築にして未だ落成に至らず此中に在るものは盡く土中及古墳より掘り出したる大理石の彫刻物にして皆紀元前の舊物なり精巧可驚もの夥し本館成就の上は盡く當館の陳列に集藏する見込の由なり門内には許多の彫刻物を陳列せり當邦は法律を設け古物は一切他邦に出すを禁せる由古物發掘の所は皆番人を付け見物人の猥りに古物を取去を觀察するもの、如し一旦歸館し午後より再び舊芝居の所より羅馬代に作りたる音樂所なるべしと云ふ所を見る形は芝居場の如く規模は稍小なるか如しと雖も時代新しき故形猶全し此の處は羅馬の某妻君の紀念の爲建てたりと云ふ説ある由なり其れより左方の山上に在る羅馬の某王の墓なりと云ふ所を見る石造の建築破壊の餘猶半と思歎計存せり其の下に在るソクラテスの入牢せし巖穴を一見し舊

議事所を見る古跡宛然尙存す規模の大なる事可驚演説者の演臺は天然の石を切り立てたるものにして聽衆の座する所を斜に下り半月形に構へたり議員は皆演説者の後方なる高所に座を占めしものと云ふ此の所に古器を賣る童子に逢ひ二ヶの古陶器を買ふ皆純然たる古器にして二千年外のものなりそれより耶蘇の弟子某の説教せしと云ふ巖石の丘に登り暫時休息して歸る天氣春日の如く山上遊歩者多し古彫刻の寫真十餘枚を買ふ今日外務卿來訪あり留守にて不遇明日出足に付告別の名刺を贈り出足の交度を爲す

同十二日晴午前七時汽車にて雅典を發すエレシースにて暫時止る此の所は過日見物に來りし古跡の有る所なり海に添てメカラと云ふ所に到る此間景色我か熱海に行くの思ひあり樹木はカンランと小松而已なりカンランは古木多しメカラと云ふ所は人家千軒もあらんと思ふ計の村なり所々古城の跡多し十時半タラマキと云ふ村に到る此地はアデン海の灣の行き止りにしてメコラント灣と相去る纔に六英里にして地峽を爲せり古昔運河に着手せしも成らず現今大工事を起し開鑿中なり今日より三ヶ年を期し成るの見込なりと云ふ十一時頃コレントに着す是れ乗船の所なり古城あり古代の名城なるへし此地寒村なれ共地峽開くる時は必ず盛なるに到るべし此の所に午食し十二時五分乗船して發すハトラスにて暫時止る上陸する人多し

同十三日晴午前十時コルフス島に着す當港は古代より以て戰亂あり數種の人民居住せし所なれば遺物亦種々にしてモザイクの如しと云ふ評ある由港口北に向て開け中間島嶼あり西南に灣を爲し港口突出の所に古城あり今猶存し砲臺亦ありて兵隊之を守るか如し蓋し修繕して器械、彈藥庫と爲すものと思はるゝなり今日は希臘の一月一日なれば市中大概休業して諸人皆遊歩せり余ホテル、イトランセールに入りて朝食を爲し馬車を雇ひ案内を連れ見物に行くポーランド人某亦同行せり行くこと一里計にして景色最佳なる所に到る此の家屋庭園ありギリシヤの紳士の私有なる由東北西の三面を望みコルスの市街を眼下に見る東南に遙にトルコの山を見る東北はアルマニーの大陸と相對し雪山水晶の如くにして氣候は三月の候の如く草花所々に開く番人薔薇と水仙の花を折り我等に贈る花を贈る歐洲の習慣にして不知もの之を贈れば數錢を與へて之れに酬るは通習なり即ち數錢を酬て去る此島全島の樹木は盡く橄欖にして大樹も多し樹木は數々主を替るも斬伐の恐を免るゝものは年々實を得るの利あり木を斬るも材料と爲すに足らず是れ千餘年を経るも安全なる所以なり其れよりカノンと稱する勝地に行くカノンは大砲の一名にして本砲臺ありし所なれば字あなしてカノンと云ふ海灣深く入り入口に島嶼あり島中に寺あり女僧の終生を送る所なりと云へり埃國の皇后病あり醫の勸めにより此寺に來り保養ありしか全快に赴けりと云ふ此より海に沿ふて左に廻れば王家の園池にして景色亦佳なり略一見して去る市中にて寫真數枚を求め船に歸る午後四時なり島は葡萄、橄欖、密柑を主として無花果も亦あり地味亦佳なるか如しギリシヤ獨立戰爭の節は英人此地を占領しギリシヤ

を助けしが平定後ギリシヤに返せし由良港なり五時抜錨す海油の如し夜ハトラスと云ふ所に暫時止る是れより上陸する人多し此の所よりイタリヤ海に出つれば波稍荒く船動揺す

### 第十一章 伊太利上陸より佛國行準備に至る

一月十四日朝五時頃プリンデジーに着す即イタリヤの東北端の港也此の所は歐洲大陸より兵をトルコ、埃及等に出すの要港にして彼の十字軍の節も此地より兵を渡すと聞く歴史多き地也現今人口一萬五六千人なりと云ふ九時十分の汽車にて當地を發す海岸に沿て北方に走る沿道橄欖、葡萄、無花果多し就中橄欖最も多し人口一二萬もあるべき驛三四ヶ所を経て午後四時ホジヤと云ふ所に到り車を替てナールに至る此の所分れ路也通筋の驛中にハリと云ふ所あり人口六萬餘ある大驛なり地は總て石質なれ共民力能く盡し耕作能く届けり牧羊亦盛なるか如しホジヤより少し後返りを爲し方位を轉し南に走る夜十時ナールに着すホテル、ロワアイヤールデエトランシュエーと云ふ所に宿す同十五日陰案内を雇ひ車に駕し町より西方に向ひ大トンネルを抜け羅馬時代の蒸風呂の所に至る今猶蒸氣を發す建築は古代の物也番人あり錢許多を拂ふ少し離れてアンモンニアの氣を吐く穴あり土中温氣あり又炭酸を發する穴あり昔時罪人及王の怒りにふるものは此穴に入れて殺せりと云ふ人は三分時にして絶息し犬は一分時にして絶息すと云ふ番人手筒の犬を引き穴に入る忽ち涎を垂れ

死になんなんとす穴を出す暫時にして舊に復す此氣重方あるを以て地より二尺乃至三尺より登らす故に人立つ時は其の毒氣鼻口に入らざるを以て害なし若し穴の口を蓋ふ時は人も亦三分時にして絶息すと云ふ古來古穴に猥りに入るを恐るゝは此氣往々發するあればなり是れよりポツヨリと云ふ所に到る人口一萬四千あり古き市街あり古き建築物も猶存す羅馬時代の寺、芝居の破壊残りあり此村より向ひ地數十町を隔て橋ありしと云ふ今猶橋臺五六を存す果して説の如くんは建築の壯大なる可思なり行く數町にして新山と稱する山あり本人家ありしが地震の爲全村埋没し此山新に出てたりと云ふ是れは今より三百年前の事とか云ふ又行く十町計にして湖水あり此左岸に深き穴あり人造にして本は頗る美なりし由深さ二百八十歩ありと云ふ穴の九分目計りの所より右に入る穴あり斜に下り入る事凡そ一丁計にして稍廣き座あり舊時豫言者此中に住居したれば諸人來り吉凶を尋ねたりと云ふ今は座席たりし所水盡く浸して導者の肩に負はれて纔に見物する事を得タイ松を燃して入るなり是れも羅馬時代の醬澤物なるべし其れよりチロンの湯と云ふ所に行くチロンは羅馬の惡逆なる王にして奢侈を極め終に害せられたる人なり此湯は沸湯にて多く蒸氣を利用して快を取りしと見ゆ此の邊都てネロンの宮殿ありし所にして山復所々根跡多く存す始皇の阿房も此れに比すれば如何にやと思ふ計の壯觀なり此の宮殿より南方に當り山の突出せる所古城全然として存す是れチロンの母を殺せし所なりと云ひ傳ふ此の宮殿の所開鑿中なり古物を掘出す目的なるべし古城の下に食店あり午

合を喫す牡蠣の鮮なる味最も美なり二人前を食す食中土地の踊を演せん事を乞ふ之を許す女四人來り奏す一人手に太鼓を叩く太鼓の形的の如きものにして四ヶ所に金の鳴ものを付す二人相對して踊る現今の踊に比すれば古雅にして面白し蓋し古代の田舎踊なるべし此の所に珊瑚珠の細工及ボンベ一の焼石、貝に彫物等を賣る價五十五フランの品を買ふ午後五時頃別路を取りて歸る道海岸通りの新道を取るチーブルの入りロイスバニアの女を閉込置たる宮殿の残りあり此婦人奸姪の女にして不品行の女の爲め終に壓死せらると云ふ先きに預りし所の隧道は羅馬時代建築にして長八百メートルあり大工事なり

同十六日雨八時半頃の汽車にてボンベー見物に行く三十分計にてアニウンチャタに着す是れより馬車にて凡そ二キロ計ありボンベーはベスピュスと云ふ火山の東方一里計と思ふ所にあり紀元後七十九年に火山噴出せる爲埋没して久敷土中にありしか千五百九十二年の頃ホンタイと云建築家サルノーと云ふ所よりアニウンチャタと云ふ所へ水道を引かんとして地を鑿ち始めボンベーの町に掘り當りしも格別鑿索もせざりしか其の後千七百四十八年に至り土人石像を掘り出せしより時王シャル、第三世大に力を盡し開鑿せしより始めて大に世に顯はれたりと云今掘る所全町の纒に三分の一計也千七百年前の町巖然として存し當時の人民の生活の有様皆思ひ見るべし實に世界の大奇觀也家屋の建築多くは石と瓦とセメントにて構造し或は大理石の大柱等を用ゆし物も多し裁判所、寺院、芝

居の如きは建築最壯大なり石、瓦、セメントにて造りたる屋は日本の練塀（すぢべり）の如くし其の上をシツクヒにて塗りたるものなり家中の粧飾は大略現今と異ならずカベには種々の繪を畫き飾りとせるか如し遊女家なるべしと豫定せる家には四面盡く笑ひ繪を畫けり又所々に男根を彫刻せる所あり日本にて男根をエンギと唱へ目出度もの、如く云ふ風ありて現に女郎家、藝者屋杯に男根を神棚に祭るの習慣あり蓋し常邦にも古代此風ありしものと思はるゝなり入口の地にモザイクにて男根の形を造りたるあり當時の人驕侈淫亂を極め更に相怪まさるかと思はるゝなり彼の暴王チローの如きは數十人の官女に各男根の首銜りを掛け令め自分も亦大なる男根の首かざりを掛けたりと云ふか如き以て當時の風俗を見るべし銅鑄の男根の小なるもの今猶土中より得るもの多しと云ふ眞物歟偽物歟は知らされ共昨日チローの宮殿の傍の穴に行きたる時案内者古代の物を買ふ事を勧めし時長さ一寸計の男根を持ちたれば柴氏之を求めたり小き鑲ありて掛けるものと思はるチローの是れを作りて女に掛け令めたりとの口碑あるより偽造せるもの歟も知るべからず總て風俗の腐敗せるは推して可知なり湯屋の構造亦極めて精巧にして贅澤を極めたりと思はる此地火山の麓にあり温泉自由にして人世の快樂を極めたる事知るべし入湯あり蒸風呂あり混入と見へたり湯屋の隣家の女郎屋と云ひ傳ふる内あり男女交接の書を塀に繪くを以て想像にて定めたる所あり是れ等は眞に女郎なるべし如此猥褻なる書のある所は密閉して猥りに入るを許さず金を少々番人に與ふれば開きて見する也スタイン氏曾て

入湯滅國の談あり羅馬、トルコの衰替は熱き湯に入るを好むより起るを説けり蓋し入湯は人心を快くすると共に懶惰を催し淫情を起すは温泉の罪許多なるべし識者の熱湯浴を恐るゝも亦故あるなり此古町ハヅレに大なる角技場あり見物人二萬人を容ると云ふ楕圓形にして略芝居場の如しグラチャテールと稱する一種の勇者ありて或は決闘を爲し或は猛獸と力爭し衆人の觀覽に供する事日本の相撲の如きものと見ゆ此觀覽場長百三十五メートル餘幅百零四メートルにて三層を爲せり紀元前七十年の創立なりと云ひ此市街の創立は凡そ紀元前五六百年のものなりと云ふ建築の石材を見るに多くは燒石にして重量なき石を用ゆるを見れば此大變動前已に火山噴出して一旦焦土と爲りたるものと見ゆ決して此町を埋めし時燒けたる石に非ざるなり馬骨二頭全く存す犬の化石と成りたるもの人の化石と成りたるもの等陣列する所あり男女略別つべしくるしみ死せる如き體のものあり又眠るか如きものあり想像に依れば埋没前已に數々震災ありて人民も大概立退き存住するもの凡そ二千人計なるべしと云ふ蓋死體器具の案外少く且つ後より來り掘りて良器をは取り去りたる等の證あるに依るなり(最初發見せしはハグラチャテールの觀覽場なりと云ふ)大略一見して同所の入口にある食店にて午食し石及珊瑚珠細工等許多を買て歸る

同十七日晴午前十時頃より水族館を一見し博物館に至る館中奇物多しボンペーより掘り出せるもの最多し壁畫殊に妙なり又當時の有様を想像するに足る女郎屋に用ひしものか男根の形に作りたる

器物多し彫刻亦多し油繪は以國の名産なれば良き物多し古錢亦極めて多し過日子ロンの宮跡見物の節見たる跡は古代のものに見へボンペーの壁畫の中に右の圖あり夫れより一寺に入り彫刻の名物を見る婦人の像と耶蘇死去の像最精巧なり寫真數枚を求めて歸る

同十八日晴午前八時發の汽車にてチーブルを發す午後二時半頃羅馬に着す田中公使以下三四名來り迎ふ途中見る所葡萄の作り方に二種あり樹木に、○○○○はわせたる方、萩にて立て添を爲したる法なり橄欖亦多し山上所々古城あり人家も多く山腹に構ふ攻戰の便に依るものなるべし牧羊亦あり荒蕪地至て多きは僧徒の地に係ると云ふ郷信多く落手せり

同十九日晴昨日の郷信新聞多く到來に付多事なり午後より公使館を訪ひ田中氏夫婦に面會す其れより市街を散歩して歸る

同廿日晴午後二時半より田中氏同道にて外務卿を訪問す通辯は黒川書記官なり暫時對話して歸り掛け公園を見物す午後五時頃歸る今日判事松岡氏及隨員來る

同廿一日晴午後十時頃より有名なる大寺を見物す法王の宮殿下に相連り壯大實に可驚世界一の寺也と云ふ事經言に非ざるべし各種の臘石を以て建築し美盡し善盡すものと云べし當寺に於ては罪行免除の法を執行する由にて各國人の罪行自訴の堂あり左右に自訴する所あり中央に僧の聽取する所ありありの儘に自訴すれば罪の大小に依り金を納めて罪行消滅の法を行ふと云ふ僧は室の中にあり



て見へず釣竿の如きものを穴の中より出し頭を撫れば其の者の罪は滅すと云ふ妄も亦甚たし以王一統せしより法王の權衰へ領地も盡く沒收せられ現今法王の所有は此寺院而已にして土地は一もこれなしと聞く諸國の門徒より納め金あるを以て注王は金は澤山持てりと聞く其れより盛時の湯場を見る其の壯大實に可驚蓋し湯場中各種の遊所ありて是の中に入れば現世の標樂界の思ありしと察せらる十分の六は破壊せるか如し下は大概モザイクなり其れよりシーザーの宮殿に至る高丘の上にあるて破壊の餘纔に存するも當時の盛なる思ひ見るに足る秦の始皇の阿房も優劣如何と疑ふ計なり舊時の壁畫猶存するものあり女皇某の隱居室最舊看を存せり建築の材料は専ら練化石にして外輪をは大理石にて包みたるものと見へ舊様尙存するものあり中央の一部英人の私有に歸する由にて別に圍ありて入るを許さず其の他は公有のものにして官の保存に係るか如し此の宮殿一時に出來たるもの非ず數代を経て漸次に建築せる由にて新舊混合せりと云ふ古きは紀元前二三十年前なりと云ふ此宮殿の下に舊市街ありて分捕物を陳列し又收納する所ありしと云ふ又凱旋門あり戰勝の圖を彫刻す精巧なり又有名なる演説家の演説せる所あり又シーザーを殺せし人の其の主旨を演説せし所ありシーザーの甥公衆に向ひ冤罪を訴へ演説せしと云ふ墓もあり事々物々皆歴史なれ共余西史に開ければ記應する事不能又角技場あり最壯觀なり形ボンペーにあるものと相似て數等大なり全形畧存す此左に凱旋門あり彫刻亦妙に全形能く存す午後五時頃歸る天野書記生案内を爲せり

同廿二日晴午後よりカマコンフと稱する古代の墓所を見物す又古代火葬の骨を納めし所あり今世紀に至り顯れたる由是れは奴隸の頭分のものが作り賣渡したるもの、由にて皆奴隸の火葬せし灰を納めたるが如しと云ふ地中に穿り込み形翎の巢の如く小區域を爲せり如此所二ヶ所あり形大同小異なり其れよりカマコンフに行く此れは耶穌教の僧之を守る皆耶穌宗にして他教の爲めに殺されたるものにして其の數凡そ五百萬も葬りたるものなるべしとの想像なり地中縱横に穴を穿ち死體を納めたるが如し穴中二層或は三層にして皆練化石を以て疊むなり其の廣き事幾十里なるを不知ローソクをともして入るなり骨の存するものは至て少し大畧を一見して去る古代の外郭猶其の形存す紀元後二百年代の物なりと云ふ又水植頗る盛大にして六十英里の外より引けりと聞く野外荒蕪地の多きは僧侶の所領に係ると云ふ法王の所領は盡く沒收せられたれ共僧、貴族の所領は依然存するを以て彼れ等金に裕なれば開墾に汲々たらず是れ天物を暴殄するものにして以國政府にも議論ある由なれ共未だ功を奏するに至らずと云ふ竊に思ふ周制、宅に桑麻を植へざるものは里布ありの法眞に名法と云ふへし歐洲社會主義の起る偶然に非ざるなり晚に田中公使の案内に赴く

同廿三日晴今日は諸方に手紙を出だす爲終日出でず家書及會我、下田、奥氏等に書を發す

同廿四日晴午前十時より法王の殿中の油繪及彫刻物見物に行く天野書記生案内を爲せり宮殿の壯大、油畫の精妙、彫刻物の巧なる殆ど古名を網羅すと云ひて可也筆紙の能く盡す所に非る也二時過

歸る今日乙猪に手紙を出す

同廿五日晴午前十時散歩寫真數枚を求む午後二時より再び出で、古要塞を見る是木藪なりし由中古要塞に變形し現今當國の砲兵屯集す外郭は新造の菱形築にして要塞砲二門計を備ふ是れ皆演習の爲にするものにして實地のものに非ず中央に圓形塔あり古代のものにして元外面は大理石を以て疊みたりしも後之を取り去りたりと云ふ塔中油繪あり名工の作なり中屈曲數廻、塔上に劍を持ちたる銅像神あり上に登れば三面盡く可見羅馬眼下にあり案内は下士の年老者之を爲す古代貴人の墓地に盡力する獨秦の始皇のみならず埃及、羅馬の如きも亦然り此城本法王の宮殿に連續せる由今は中間斷絶し獨立のものとなれり歸りに名産のモザイク類價二百四五十フランの品を求む夜天野氏來り圍甚あり

同廿六日午前十時頃より骨寺を見る此の寺は人骨を以て室を裝飾す甚た奇なり凡そ四百年來の住僧の骨なる由此中の室に埋葬地あり此土は亞細亞洲中耶蘇の墓地より持ち來りたるもの、由なれば耶蘇と墓地を同じくするの意にて如此せるものなり地狹くして人多ければ先葬のものは掘り出して骨を如此裝飾し其の跡へ亦新葬のものを埋むと云ふ人骨を以て種々の形を作り室中の傍りと爲せるは甚た人情に近からず耶蘇をして之を見せ令は必ず慨歎すべしと思はるゝなり夜田中公使來る余村田氏と圍墓を催し十二時に至る

同廿七日陰天寒し舊落馬傷リヨウマチスの如く傷むを以て終日出ず

同廿八日午後二時より農業博物館に行く館長先つありて誘導す未だ全備に至らずと雖も建築の豪大なる大金を費せる事可知書物及び木細工數種贈らる午後五時頃別を告げ歸りに公使館に立寄る暫時對話して歸る夜圍墓始妻、萩原氏の書狀到着

同廿九日晴午前十一時油繪及彫刻の博物館に行く法王の所有には及ばざるが如しと雖も精巧且つ奇物實に多し筆紙の能く盡す所に非ず歐人の評めれば之に譲る一時半歸る食後下院の議場に行く天野氏案内せり今日は工部省の定額の議事中なり工部卿頻りに演説を爲せり一時間計傍聽して歸る圍甚相手は村田氏なり

同卅日晴サンホール寺に行く新築未だ落成に至らず内傍は大概成就也露帝奉納の青寶石、埃及の先王メヘムツトアレ奉納の臘石柱を始め諸國信徒より獻する所、美盡し又善盡せり其れより午飯を野店に食しサンホールの斷頭せられし處に行く濕地の溪間にして常に間歇熱多く暑中は僧侶も避けて住せざりしか近年香水を植へ病毒を防きしより大に減したりと云ふ寺中三泉ありサンホール首を斬られたる時首三度飛びたりしか其三ヶ處へ泉忽ち涌きたりと云ふ妄説ありサンホールを斬る所の油繪巧也ミカエルアンゼロとやら云ふ名工の筆多し僧は佛國の者計也と云ふ香入りのリキウ酒及十字架の細工の飾物等を賣る十字架二箇リキウ酒一本を賣ふ僧至て愛相好し此邊より出づる土一種の

キント土にして砲臺を築くに最好と云ふ露國ヲテッサ、セバストボール等に輸出すと云へり歸りに舊郭内のガリバルヂーの陣せし小山に登る全山皆煉化石なり頂に十字架を立つガリバルヂーの爲に建てたりと云ふ午後五時頃歸る

同卅一日晴明日は出發の舎に付公使館へ暇乞に行く公使云ふ明晝日本食を饗すべきに付晩の出發に致すべしと勸む遂に晩の出足に決して歸る夜熱出でしこと甚し

二月一日陰熱あり舊落馬傷痛みて公使の招きに行く不能柴、村田氏を遣る且醫師を頼む醫終日來らず

同二日大便秘結痛み昨日の如し午前十時頃醫師來る云ふ別に更る事なし臍少し膨脹せり臍の働きのニヅキ故なり傷所は熱の爲に起りたるものにして臍病に關係なし今は熱もなし即藥法を盡て歸る藥はニガキ水藥なり水半合計に三十滴點して吞む

同三日午前十時頃醫師再來る云ふ所前日の如し最早不日に快方なるべし余の再來を要せざるべしと而して傷所は尙前日と異なる事なしバツプを以て暖むる事兩度稍功あるを覺ふ公使來りし由なれ共余睡眠中にて面會せず

同四日晴昨日の如し松岡判事來る

同五日晴次第に快方なり傷み尙止まず

同六日晴心持大きに好し夜黒川、天野氏等來る

以下日記を缺くものは一は懶惰と病との爲なり六日頃より次第に快方に赴き醫師も至つて輕易に云ふにより十一日を以て出足と定め十日公使并に松岡氏方へ暇乞に行けり此日大ひに雪降る雜馬にて三十年なき大雪なりと地上二三寸積みたり寒氣亦強し歸り旅裝を爲し同十一日十一時頃發す田中氏等送り停車場に來り別を告ぐ天氣寒し晩にフロランスに着す食後火に當り居りし處心持宜しからず遽に服を改め寢臺に就かんとせしに忽ち呼吸切迫胸部に物の横たはるか如く且つ右の胸下より脊中に掛けて曾ての傷所に痛苦を發し起臥共に困難なり直に醫師を招きバツプを以て傷所を暖め種々手を盡し漸く少しくをさまり寢臺に就く事を得たり其れより四五日を経るも別に善徵なし醫師も確乎たる見なきか如く思はるれば終に他醫に診察を受け度き事を醫師に談す醫師も一人にて心配の折柄と見へ快く承引し則當地大學の教授たる老醫某を誘ひ來る此醫流石に老功にて診察も頗る綿密にして言ふ所も確實なり臍病に肺キンシャツの加りたるものにして右の胸下より脊中の痛は肺部にキノンショウを起したるものにして臍病とは別也と云ふ其れより老醫の言に従ひ藥を用ひ病勢次第に上り廿二三日より五六日の頃に至り自ら思ふ死生の界正に此にあるべしと幾度歎首をモタゲ萬一の時の遺言を認めんと思へ共不能醫師も一人は朝夕來り老醫も必ず日に一度は來りバツプにて暖め又は藥を傷所に塗り或は膏藥の如きものをはり手術を盡したりしが其の功なる歟廿七日の朝より熱度は

矢張り三十八九度を昇降すれ共痛み頓に去り殆と大なる荷を卸したるか如し心持甚た宜し醫師も怪む計にて病の變と認め容易に善しと云はず益々戒心して治療を盡せり此れより次第に快方に赴き痛も去り胸のツカへも去り食事も勸み最早生命に恐れなきに至りしは三月三四日の頃なりき何分大病の後の事なれば力付く事甚た遅く又食事を十分にすれば臆病の恐れあるを以て日々朝は玉子にパンと茶或はソッフにパン少々晝晩にソッフに牛肉及雞又は小鳥類と葡萄酒少計にパン少許を用ゆる而已腹は常に不足の心持なり醫師風を引事を恐れ狼りに出づるを許さず十二日に至り醫師の許しを得て始て馬車にて近傍の公園に行き二時間計散歩して歸る天氣なれば日々散歩を許され共日々曇天雨多く風又寒きを以て出づる事不能退屈殊に甚し前山に桃李の類雪の如く開くと雖も行き見て見る事不能枕頭に杏花及草花數種を挿み以て心目を慰む乃木、川上、楠瀬氏等去る廿三日を以て迂路より來り余か病を訪ふ此時病勢猖獗なるを以て日本の様子も十分聞く事不能残念也同人等廿六日を以て發し獨逸の如く赴けり又小松宮殿下も羅馬府より余の病を御尋ね遣されたり追水周一氏亦來り訪ふ早川大尉も宮に隨行せる由にて見舞の手紙を差越せり病中鄉信を認むる事三度初度は未だ病の甚しきに至らざる時也二度目は宜敷方に赴きし時なり三度目は去る十四日にして餘程決方に赴きたれば安心の爲め委敷認めたり又病來手紙を落手する事三度一は一月七日認めめの郵書一は一月九日認めめの楠瀬氏に頼みし書一は一月廿二日認めめの郵書をり此れは去る十三日に到着せり乙猪の病氣且江の口の

不幸を報し來る十三日來手紙を此頃獨逸へ三通乃木、川上兩氏へ連名一通楠瀬氏へ一通與氏へ一通英國へ二通佐々木高美、石田英吉兩氏なり此れより日記認むべし

三月十七日晴風強く寒し十三日より雨及曇にて今日始めて日光を見る風強く寒きか爲め出づる不能夜小松宮の御使として立見、早川二氏來る宮獨逸帝九十の祝宴に御台臨になるべしと日本より電報來りたれば急に獨逸へ御發途に付余の病氣を御見舞の爲なり

同十八日半晴風強く寒昨日の如し醫師本日も外出を許さず朝立見、早川二氏來訪午後七時過ぎ兩人出足す

同十九日天氣始めて平穩なり醫師散歩を許す今日は湯にて全身をヌグヒ少しく汚穢を去り食後二時頃より馬車にて川向ひ南方の山上に登る大道迂曲し自然山上に登るミケアジロウと云有名なる畫家、詩家、建築家の築きたる城堡の遺跡に至る此處現今は寺あり寺の下眺望頗る佳にしてフロランズの市街皆眼下に在り大橋五つ河上に横はり川を挾て左右に市街を爲す東北に方リアン山綿豆し白雪頂上に被り景色殊に佳なり和暖にして春色頓に動き桃李處處開き垂柳亦芽を生ず山上は多くは富人の別荘にして美麗甚し此地油繪の額名物多く又彫刻物モザイク名産なりと云金銀の飾又古來名産と云ふ余此地にて病に臥する事己に四十一日今日始めて市街の全形を窺ひ得たり散歩二時間計にして歸る體力大に益すを覺ゆ今日村田綱太郎氏の手紙來る直に返書を認む

同廿日晴今日も好天氣なり午前十一時より徒歩にて六七町の所を散歩しモザイクの箱一つを購ふ價三十五フランなり食後再び馬車にて市街を一周して歸る心持甚だ宜しスイスの村田氏より手紙來る學資借用の相談なり今日は日曜日に付明日振り出事と致し手紙を認む又羅馬の田中氏より手紙來る直に返書を認む今日は昨日に比すれば風ありて稍や寒し

同廿一日陰醫師來り曾て體に張り付けたる膏藥を洗ひ落すアルコールの劇なるものを用ひヌグへは忽ち落つるなり今日は陰なれ共箱馬車なれば散歩も宜しと云ふ日本の新聞着の爲め終日出でず

同廿二日陰朝兩醫師來る余快方に赴くを以て前途の衛生並出足の期を相談旁招きたるなり醫師云來廿六七日には出足するも可なる由なり午後二時頃より東北の山上にある村落に行く此地古昔の市街なる由にて遊戯場の古跡を存せり凡そ舊昔は弱肉強食の勢にて隣敵不意に襲來し奪掠するの恐あるを以て村落も多くは山上の要害に設け敵來る時は一村要害に籠り以て防禦せしものと思はるゝなり此の山上に在りと雖も大道迂曲し馬車自在なり不老蘭西の町を眼下に見眺望頗る可なり暫時休息して山を下り旅店に歸る

同廿三日陰迫水及馬里の原兩氏より手紙來る中に山田氏の手紙あり注文物の事を申し來る午後市中を散歩す體力強を覺ゆ

同廿四日陰小松宮へ御禮書を三宮氏宛て差出す並に立見、早川二氏へ連名にて禮書を出す又山

田氏へ返答並に愚意の大畧を認め出す近日出足に付荷物の片付を爲す大に疲れたれば一睡を催す今日は身體を清潔にして下衣を改む山田氏行きの手紙讀て露國に出す電信にて返却を依頼す

同廿五日陰雨晴相雜す明日出發に付き稍や多事なり午後三時頃より市街を歩いてモザイクの箱六品、指輪二つエリ留め一つボタン二つ時計一つ凡そ七百フラン計なり大散財なり又寫眞數枚を求む夜心祝にシャンパンを傾け三人會食す

同廿六日晴好天氣なり八時發の汽車にて發す九時卅分ヒサーに着すフロランスより此所に來る迄アルノ河に沿ひて來る左右耕地肥沃なり大概葡萄を植ゆ皆木を植て之に巻き付か令め其間には麥を作れり此法専ら以國に行はるゝ所にして他邦には多く見ざる所なり十一時頃食を喫し有名なる傾塔を見る此塔天變の爲に傾きたりと云ふ説と又態と傾けて作りたりと云ふ説の二説とあり學者未だ没する不能と云ふ此所の寺院及圓塔亦有名なるものなり市街の中央アルノ河貫注し五キロにして海に入ると云ふ馬車にて所々見物し石の彫刻もの及寫眞を求む價合せて十五六フランなり石刻は廉なりと雖も拙なるか如し今日天氣至つて好く體力大に増を覺ゆ此地にも日本の黒竹及根鞭の杖多く來る一本一フランに満たず如此遠方に來り纔に一フラン足らず是れ日本商人の競争より遂に下落如此に至る可歎なり

同廿七日晴今日好天氣なり九時四十分ヒサーを發し十一時半頃スペンヤに着す當所は以國第一の

軍港にして盛大なる造船場あり地形三面皆山にして南一面海に臨み景色亦佳なり港の入口に横堤を海底に築き左右各數町を開き船の入るを許し中間は全く通行を絶す左右殿に砲臺を築き以て港内を守る有名なる百二十噸の大砲も此所に備へたり蓋し以國得意の軍港なり余前に當港を見物せん事を政府に請ひ許諾しありしが病氣の爲め中止したり故に只車に沿岸の形勢と砲臺の位地を遠望する而已なり薄か残念なり然れ共大勢は分りたれば益を得る不少海岸而已ならず陸地も三面處々に砲臺を築き市街並に造船所を防禦せり處々猶築造中なり港内軍艦八艘あり皆良艦と見ゆ有名の大軍艦以太利號は造船場に入り修繕中の由なり宿せし所はクランホテルヨウロツハと云海に臨み眺望極めて佳なり左岸の舊城郭あり城は大概破壊すと雖も市街は猶ほ存せり多くは貧人の住居なり此所を散歩し再び車に乗りて歸る午後五時半頃なり

三月廿八日晴午前十一時過ぎスベシヤを發す是よりゼノアに到る海岸に沿ふて過半トンネルなり山質多く石にして工事の艱難知るべき也海岸險阻の地頗る地力を盡せり險阻の地を削成してフリプ及葡萄を植むゼノアに至る迄の中二ヶ所計大驛ありゼノア港は人口十八萬計以國第一の交易場也と云ふ山に依り市街を爲し景色亦佳なり市中に長きトンネルあり市街の外堅固の外郭あり多くは初代那波禮翁の時分築きしものなりと云ふ此に四十分計休息するを以て午食を喫す其れよりトンネルを通る事長くアレキサンドリヤ驛に至り全く平地に出づ是れより車を替ふ此の邊桑を植ゆる多し牧

場多し桑能く生長せり桑の作り方も亦一種の法ありと見ゆ田間多く柳を植ゆ新と見えたりアレキサンドリヤの市街に堅固の砲臺あり此地人口三萬計と云ふ午後七時チュランに着す追水氏來迎ふ直に旅店に至る始めて覺ふ余烟草入を車中に忘るを遽に人を馳せて詮議せ令む車己に羅馬の如く走るを以て分らず電報にて詮議するよし申し來る食後村田氏再行く烟草入の中に手帳と鍵ある而已なり此の手帳去年十一月よりの日記なれば余にとりては實に千金に替へ難き品なり有無難期甚だ心痛なり誠に近來の大不出來なり手帳遺失に付大に心配せし所何を計らん臥床の上に在りたり蓋し外套を脱する時飛出てたるものと見へたり村田氏ステーションより歸り車に無之を報す其苦なり大に他人を驚かして氣の毒なり直に停車場長にありし事を報し勞を掛けし事を謝し金二十五フランを送り徒勞せしものに與へん事を乞ふ十一時頃寢に就く

同廿九日晴好天氣なり午前十時頃より市街を散歩し地圖及案内記を求む大通り盛なり人道は檐下を通する結構にして雨天と雖ぬれる事なし品物を陳列する事美麗にして殆ど小巴里なり以國第一の清潔なる町と云ふ食後追水氏の嚮導にて再び馬車にて市街周圍を廻り見物す有名なる人物の銅像、石像多し又以國一統の紀念塔建築中なり壯大なり此の地金剛石其他の寶石まがひを造る事世界に有名なり殆ど其偽を辨する不能と云ふ歸り掛け指環及女の鎊物、ゑり止め合せて九個を求む價三百二十フラン計なり六時半より追水氏の案内にて其旅寓に行く日本食の供あり味好し食後同氏の考への

砲の圖を見る氏は山砲、野砲中間の砲を製し本邦の地理に應用せんと欲すと頗る熱心なり其の志可感九時過ぎ歸る

同卅日晴天氣好し午前十一時より武器庫を見る格別多からず又奇物なし那翁の髮毛及劍あり當國フランス某に那翁の自ら送つたるものなりと云ふ日本の武器亦多く藏す歸り掛け寫眞數枚及地圖を求む午後二時より追水氏の案内にて東方山上に通する一種の鐵道により登るスイスの鐵道と其趣きを殊にせり山上寺あり以王先代の墳墓あり山上眺望最も佳なり西北アルプスの諸山を遙に望みチユランの市街を眼下に見る山下を廻り西より東に亘り盡く良田にして人民皆富裕と見ゆ養蠶盛なる地なれば桑能く生長す三四年を隔て枝を切るもの、如し山上の樹木皆落葉なり茶店兩三軒あり茶を喫す遊人亦多し午後四時四十分下り汽車にて歸る夜追水氏を案内し置きたれば共に晩食を喫す十時頃追水氏歸る柴氏は匈牙利人コウシと云ふ人に面會の爲め山には行かず此人四十年匈牙利の獨立を計り兵を擧げた時の巨魁にして有名なる人なり今年八十四猶壯健なりと云ふ著述もあり子息二人皆以國に仕ふと云ふ明日は出尾に就き荷物を片付けたり十一時三十分頃寢に就く

## 第十二章 佛國入國より巴里出發の前日に至る

三月卅一日晴午前九時發す停車場に到れば追水氏送り來る共に車に乘し三十分計行し所の停車場

送送り來り此にて別れを告ぐ此所より次第に山間に入る此の所古城あり此道をモンヌニーと云ふトンネル多し最も長きもの十二時十分穴に入り四十分に出つ凡そ三十分日本里程の三里なりと云ふ其れより十分計にしてマドウヌに着す此の所佛領なり荷物の改めあり四十分計休息し午飯を食す山間景色好し湖水あり側に溫泉あり年々浴客多しと云ふ兩國の國境各砲臺を築き不慮に備ふマドウヌにて小學生徒の歩操を見受けたり佛國近時武を學校に練る獨國に似たり蓋し他日の事可思午前八時過ぎマコンホテルシャンゼルシーに着す

四月一日陰午前八時過ぎ發す雨降り寒し午後より雪少々降る昨夜雪降りしと見え所々小高き所に雪積りたり午後四十分巴里に着す原、樋田、道家氏等停車場に迎ふ直にホテルフライトンに着す郷信其他所々より手紙を受く

同二日陰加藤某氏來る時計屋及ベルサイーの服仕立屋來る午後四時頃散歩小供の手遊物數十種を求む總價八十フラン計なり

同三日晴鶴田、依田二氏來る午後野津、田島氏等來る又閑院宮御來臨松井氏御供す午後五時頃皆散す宮も御歸校に成れり其れより散歩一時計にして歸る馬具屋來る

同四日陰午前十一時スイスより村田氏來る約束の時計二箇を携へ來る一は村田砲兵大尉に贈る、金玉屋來る金剛石の指輪一つを求む代價四百八十フラン計實に愚の至り余考ふる所あり試に一つを

求むるなり金のウヂ輪二つを求む一つは五十フラン一は百三十フラン計なり指輪惡敷所あるを以て直さ令む腕輪も箱を作る爲持ち歸るなり時計屋來る二箇の中一は巴の紋不出來に付直さ令む時計の鎖二つを買ふ一は九十フラン計一は百三十フラン計なり寫眞入を付くるが爲代價未だ確定せず時計は三百五十フランと二百五十フランなりアルミニウムの時計二箇を買ふ二つにて五十フランなり銀時計一つを買ふ八十五フランなり村田氏持ち來るものと同じ公使館の書記生來る散歩し手遊物百フラン餘を求む

同五日晴原氏夫婦來る陸軍士官某來る鋼鐵製造の目的の由なり晩に散歩して油繪まがい數十枚を買ふ

同六日陰眼金屋來る小望遠鏡一つを求む代價二十フランなり村田醇氏と眼金屋に行く皆目的を達する事不能尋常眼金一つを求む五フランなり寫眞眼金を買ふ代價五十二フランなり食後柴氏の爲めに來りたる眼金屋にハルメートルを買ふ代價六十フランなり晩にルーフルに行き儀一、守人、阿芳等の服を求む阿芳の服とシャツポにて二百フラン計なり儀一、守人兩人分三箇にて二百フラン計別に阿芳の服二枚十フラン木綿なり大散財なり銅造那翁、ジャンデルクの像の印材三つを求むジャンは三十五フラン那翁は二十小那翁は十二フランなり合せて六十フランにまけたり

同七日陰仕立屋來る夜散歩頭の掃除道具を求む代價百三十フラン也錢入代十五フランなり今日當

國の馬醫アンゴウ氏來る同氏は日本に來りし人なり

同八日陰玉屋、書物屋來る午後四時頃より公使館に行く齋藤某氏來會議政事に及び六時過ぎ歸る夜馬醫與倉氏來る加藤某氏同行なり九時頃歸る余男女の馬具二た脊を求む作はベルサイー隊附の馬具師なり手ぎは最も宜し價二箇四百九十フランなり

同九日晴西村大尉モンテンフロより來る午後より馬の競進會を見物す馬醫與倉氏亦同行なり夜學燈を求む四時頃歸る閑院宮御來訪松井氏御供溝口生亦來る大尉バルフレ氏ブーランヂェー氏の使に來る十一日午後四時より面會の事を申來る村田大尉及村田綱氏ウエルサイユに行く

同十日晴午後二時頃より學士某を訪ふ道家氏通辯す氏はスタイン氏の友にして著述も夥多あり當國の學士會員なり年七十に近しと思はる農商務の組織の種類及利害、領事の本分と商務と關係の事を問ふ氏の答へ奇にして面白き事多し社會黨の事を問ふ是も亦奇答あり同氏は社會黨の事に付多くの著述ありと云ふ一時半計談して歸る皮箱一つを求む價二百五十フラン高價なれ共極て善なり夜關氏獨逸より歸る丹波氏及某來る丹波氏はストラスフルに在りしが休暇中見物に來りしと云ふ

同十一日晴午前十一時頃閑院宮を御伺ひ致す松井氏の寓居に御同居なり二時よりブグアン氏イト、マダーム某氏來るブグアン氏身前の事に付き陸軍卿に傳言を頼む爲也四時よりブーランヂェー氏を訪ふ種々懇切の談ありマダーム依頼の事を卿に傳へたりウエルサイユの仕立屋來る服大概成就す



夜井上哲次郎氏來る談甚た面白し今日鶴田氏來る砲の事には陸軍卿に傳言あり

同十二日陰十時より農務卿を訪ふ取調に付世話に成りたる禮を述べ且アンゴウ氏依頼の事を談ず卿心能く引受たり其れより商務卿、外務卿の門を訪ひ歸る午後荷物の片付を爲す書物屋來り千百〇八フランを拂ふ時計屋にコロノメートルとニツケルとの時計二箇直しを命ずカバンを求む價二百五十フランなり午後四時頃若山氏來る夜野津氏來る

同十三日陰ウエルサイユの服屋皆出來して持ち來る山田氏注文のものも皆出來たり代價二千〇八十フランなり星松三郎氏來る同氏は仙臺の有志家也各地を巡回して觀察録を著し諸大臣に分てり余にも二冊贈らる夜閑院宮御來訪松井氏御供す余の意見を御尋に付存分を申上る十時過に御歸寓也

同十四日陰十時よりテレホン會社に行き新式の電話を試む頗る便利なるか如し就中軍用電話器最利あるべく思ふ此の社の社員非職少尉某前にコンスタンチノーブルにて會す必ず電話器を見分致し呉れ度しと云ふを以て約諾せり故に行く日本に賣り弘むるを欲すれはなり今日寒く雪降る少々なり歸り掛け圖引器械及高低を測る器械と大きく見る眼金とを求む十二時頃雀田氏來る午後三時頃工學士桑原政氏來る同氏は藤田組の雇にて大阪の鐵橋を求めの爲め來りたる由なり原、齋藤兩氏も亦來る天野氏と樂隊の修業に來りたるものも來る夜井上、丹波及□□某氏等來る

同十五日陰十時より寫眞に行く村田氏同行なり高田組の得能某來る野津氏新製の火藥を持來る陸軍省に送るを約す依田氏亦來る午後三時頃より望遠鏡を求めに行く歸り掛け大公園に行く兩村田、關氏等四人なり鏡代金百四十五フランなり夜原氏の案内にて公使館に行き日本食の供あり

### 第十三章 英國上陸より大西洋航海に至る

四月十六日晴九時四十分巴里を發すアミヤンにて午食す此の地は佛國都府の一にして大統領グレヒー氏及現時の大宰相ゴフレ氏も此の地の人なりと云ふブローキユ港に到り上船す海上穩なり四時頃英國ホルクストンに着す七時頃ロンドンに着す岡部書記官佐々木氏其他數名來り迎ふ同縣の諸子皆來る稻垣氏周旋最勉む

同十七日陰日色月の如し蓋し當地の本色なりと云ふ公使其の他山内、石田、松浦、淺野、佐々木、福富、千頭、岡部、長谷川、杉田氏等來る柴、樋田、道家氏等は公園に行く余と關氏は風氣に付き留守來客夜分に至る

同十八日陰十二時頃より晴る園田氏來る三時より公使館に行く同所にて郷信を落手す二月廿二日の書をり

同十九日晴午後二時頃より獵銃を注文に行く廿番廿四番二挺を注文す小は合せて十八ランド大は二十八ランド位なり新形の短銃一挺を求む代價一ホンド半計なり其れより水晶宮に行く鐵道なり此

宮は有名なるものなれ共近年不盛にて會社も維持に苦み居れりと云當夜はローゴンスピールト氏の祭日にて此の園中にて花火ある由晩に際し見物人頗る多し余は同縣人と約あるを以て夕食を宮中に喫して先きに歸る柴氏と同行なり他は皆残り八時頃より石田、佐々木、千頭、福富氏等來る豊ヶ様の御修業上の談あり十一時頃皆歸る

同二十日晴正金銀行の案内にて英國銀行を見物に行く十時半頃同銀行に行き先つ日々各所より當行へ返り來る金札扱所を見其れより印刷所及金貨計量所等を始め諸受渡所を見金地金格納場等一見す近時ダイナマイト黨を恐れ妄に人に見せずと云ふ誠に壯大なる結構なり其れより倉庫會社に行く大概佛國にて見る所に異らす茶、生糸の類より日本のウチハ、チムチの類の格納せるを見る午食を小店に喫し二時頃歸る郷信を認む二月廿二日の返書なり夜八田氏來る

同二十一日晴午前十時頃高田組白井氏來る十二時頃大石氏來る午後三時より食器類を求めに行く鐵具四十五バンドなり其の他テーブル掛け、口拭イ、鏡、小刀、鋏、エリドメの類を求む大陸に比すれば高價なるを覺ふ

同二十二日陰午前公園を散歩して動物園に入る雨遽に至る見終らずして出て歸る雨止む午後より日本村と稱する觀物場に行く日本人六十餘名諸種の工業を日本風の小屋中に營み衆人の觀覽に供す衣服盡く日本風にして殊に不體裁を極む輕業もあり踊りもあり琴、三味線の類もあり歐人日本風を

摸ねたる品を陳列して賣れり見るに忍びざるもの多し暫時にして歸る

同二十三日晴津田氏來る肥後人山三郎氏の子なり午前十一時よりロンドン古城を見物す城中には古武器を陳列す大陸の諸國に不及遠し此の城只歴史あるを以て高名なりと云ふ大概兵隊の屯所と成り一部分丈け古武器を陳列せり古き牢屋あり有名の人入牢せるを以て著名なりと云ふ

同二十四日陰朝石田氏來る午後鈴木氏來る同四時より豊尹様始め同縣人佐々木、大石、福富、千頭、石田氏等來る共に晩食を喫す夜十一時頃散す

同二十五日晴朝淺野長道氏の碑の字を頼まれ認む頼みしは松浦、淺野兩氏なり諸子續々尋來る晚に公使及岡部、佐々木、園田、荒川氏等を招き晩食を供す

同二十六日雨ロンドンを十時十分に發す公使始諸子送り停車場に至る別を告て發す午後二時頃ピルゼンガハムに着す寒氣強く雪降る

同二十七日陰器械製造所を見る此所に日本に來り居たる英人兩名あり父子なり余等の嚮導を爲す此所小器械の製造を主とす電氣にて運動する器械新奇なるを覺ゆ職工凡二千人を使役すと云ふ午後二時ピルゼンガハムを發し四時半頃マンチエスターに着す晚に雨降る

同二十八日晴壓搾製造所を見る番頭父子案内を爲す此所は大なる鐵器を製する所なり壓搾煉鐵の製此所の發明なり水力を以て之を壓搾し更に大槌を用ひす近時大砲の注文を受け製造中なりと政府

の注文ありイオパニヤの注文あり百二十トンの砲も製造に着手せり煉鐵の法頗る精密なるか如し最初鋸金を鑄型に注ぎ水壓器を以て金湯を壓搾し緻密ならしめ再び鐵を火力にて焼き槌にて打つべきを水力にて又壓搾するなり是れ大陸にて未だ見ざる所なり十二時頃歸る午後二時頃より木綿にカタを付くる所を見物に行く皆蒸氣力を用ひ種々の染色を用ひてカタを付くるなり即ちサラサなり専ら支那、日本に輸出すると云ふ安價を以て主とす一時間計見物して歸る四時より發しレバプールに赴く五時頃着す此の地米國へ渡海の港にして頗る繁華の地なり

同二十九日陰英人某の案内にてドックと倉庫を見物すドック會社より二人案内を爲す結構頗る盛大なり其れより蒸氣船にて河を渡り前岸より河底の鐵道を通り歸る雨少々降る

同三十日陰朝昨日の人の案内にて相場會所を見物す此の家屋は年に十五ドルにて組合の商人借受ると云ふ一人一年に五ハランドを拂へは誰れにても商業を營むを得ると云ふ其れより守舊黨のクラブを見物す装置、建築精巧を極む辭して博物館に行く動物頗る多く藏す書籍館の建築圓形にして妙なり油繪は格別の事なし相對する所に裁判所、音樂堂あり壯大なり民事、刑事共に備る音樂堂頗る廣し十二時旅店に歸る今日は馬の節句にして各荷馬車を粧ひ市中を引廻るなり旅店の前に音樂席を設け樂を奏す府知事亦出張して見物す市中頗る賑々敷事なり午後二時より乗船す稻垣江木氏送りて本船に來り別を告ぐ三時十分發す海上甚平穩なり

五月一日晴午前六時アイルランドの内クンスランド港に着す天氣甚たよし午後三時頃同所を發す海上穩なり

同二日陰風北より來る帆盡く張る横風なるを以て船動搖す朝テーブルに着く而已にて晝は無食少はソップと牛肉を用ゆる而已

同三日陰波穩にして心持稍や宜し然れ共食堂に出つるを欲せず茶と玉子とを室にて食す晝は食堂に出で食す晩に雨降る

同四日陰向ひ風にして波烟り立ち船首に出つる事出來ず朝は室内に食す午晩兩食は快くテーブルに就けり

同五日霧深し頻りに汽笛を鳴し衝突を戒む天寒きは宜し波穩なり朝食亦快くテーブルに就けり晝夕共快く食す

同六日陰波穩なり三食共テーブルに着く午後三時頃水先を乗せたる船來會す一人の水先は此の船に乗り本船は後となれり小船にして僅に百石計と思はるゝスクウ子形なり去る廿八日ニューヨルクを出船せりと云

同七日陰波穩なり時々帆を張るを以て速力極めて速なり一晝夜に四百九十六ノットを走ると云ふ船客酔ふ者を以て船中殊に賑やかなり最幸福なる航海なり烟室バクチ盛なり余等の一行は將裝

をサセリ波の穏なる事可知晚七時には着米の筈の所濃霧咫尺を辨せざるが爲め船を止む

同八日霧依然たるを以て空く停泊す此の所ニューヨークに近き事十二三英里なりと云ふ本日は日曜日なるを以てカルタ將棋の如き遊戯を禁するを以て船客特に徒然なり

同九日霧昨日の如し午前十時頃小蒸汽船一艘來る本船霧の爲め進む不能を知り郵便物を取りに來りたる由にて直に信書を積み返る本船は依然停泊徒然亦甚し此所よりニューヨークに二十八英里計ありと云ふ十二三里と聞しは誤なり

#### 第十四章 米國上陸より房總遠望に至る

五月十日朝霧昨日の如し小汽船來る客の速に上陸を欲するものは手廻りを持って乗船を得るとして上陸するもの半数以上なり余の一行は皆残り午後より次第に霧晴れ諸船皆運動を始む夜に入りニューヨークに入る先づ安心せり

同十一日晴十時頃上陸す領事吉田次郎氏始め諸人來り迎ふホテル□□を旅宿とす午後より馬車にて公園を散歩す水道の工事壯大なり六時頃歸る

同十二日晴朝吉田氏來る共に銀行集會所に行く此設計最妙なり相場會所、株式會所を見午餐を小店に喫し再び領事館に行き馬車にて川向ひの市中を見物し共同墓地より公園を見歸り掛けに日本商

人森村及起立與商會所出店等を見て歸る夜牛の競進會を見る

同十三日晴午前八時發にてハテルソン絹布製造所を見物に行く同心社雇外國人一人同行諸事を周旋す吉田領事も同行なり余か一行は樋田、柴、關、道家氏等なり此の地絹の製造所百四十餘箇所ありと云ふ織場を見る事二箇所染場一箇所を見る里昂とは趣きを異にする所あり部分により勝る所あり日本糸を需用する事頗る多し我生糸の好問屋と云べし製糸の意見を聞く事多し最も感ずる事亦不少此の地水利頗る便なるを以て水力を用いて機械を運轉する多し人凡七萬餘皆製造を以て業と爲すと云ふ同行洋人の案内にて食店に入り喫食す午後六時の汽車に乗て歸る

同十四日晴今日は近傍の農家を一見する約ありて午前十時四十分發の汽車にて行く心組にて出所遅刻せるを以て乗り後れたれば空しく歸る種物屋に入り花鉢、草引等の鐵器を買ふ此の種物屋は頗る大家なり植物一切の種及苗を賣る兼て農器、園藝器を賣る園藝器數種を買ふ夜同心社の支配人某及山形人某來る其の他吉田、澤田、玉置氏等來る山形人は生糸見本を所持して來れりと云ふ午後十一時頃よりヘラルド新聞社に行き景況を一見す職工の習練器械の精妙感心せり舊聞見出の法整備せるは殊に感心なり一分時間に四百枚を印刷すと云ふ其迅速可知なり二時頃歸り寢に就く(十二日ヘラルド記者某來る當夜も同人の案内なり)

同十五日晴午後三時四十分發の汽車にて華聖頓に赴く吉田、大久保、澤田、宗、時任氏等送て停

車場に来り別を告ぐ此車急行なるを以てヒラデルヒヤを貫き直にワシントン府に走る午後九時頃華聖頓府に着す九鬼公使及赤羽、中村、西郷氏等始六七名来り迎ふホテルシヨウラムに宿す新聞記者某来る柴氏面會す(昨日午後五時頃コロネルグラッドを訪ふ同人母は病氣にて平臥の由にて面會を得ず暫時談話して歸る過日來訪に預りし返禮なり)

同十六日晴午前公使同行にて議院並に博物館を見る午後より老兵院を見物す地形景勝にして頗る好景なり歸途公使館に行き夜十時頃歸る

同十七日晴十時四十分より國務大臣を訪ひ同氏同行にて大統領に謁見す暫時對話して歸る其れより農務局養魚場、養蠶、製糸場等を見る午後より大藏省に行き省中及金庫を見る又難船救助法等の本局を見る金庫に金の多きには驚きたり六時より公使の招きにて日本食の饗應あり十時頃歸る

同十八日陰午前十時頃よりワシントンの舊宅を見物せんとて馬車を馳て波止場に到れり是れより一時にして達すと云ふ船は小蒸汽なり乗合頗る多し大概華聖頓の墓を訪ふ人なり蒸汽船にて河を下る事一時にして達す此地河の左岸にありて景色頗る好し岸を上る一町計にしてワシントン夫婦の墓あり左に娘の墓二つあり前の左右に裁判官とかの墓二つあり右に折れて行く事一町計にして即ち氏の舊宅あり眺望佳なり百年前の建築には美なるものなるべし當時の器物も亦存在せり近傍の店に就て喫食す二時に至れば船再び来る即ち乘て歸る夜公使の招きにて行き馳走あり中村氏来る

同十九日晴朝中村氏来る今より二年計滯學の談あり十時四十分の車にて發す公使始め送り停車場に来る別を告げて發す午後七時頃ヒラデルヒヤに着す

同廿日晴朝公園を見物す園は河を挟みて凡二十英里計もありと云ふ園中に博物館あり往年博覽會の時は建物の堅牢なる物を存し當時出品中の良好なるものを買上げて保存せりと云ふ日本の物も多くあれ共支那物の良好に不如は残念なり支那物の良なるは椅子、臥床及象牙の彫刻物最傑出とす近傍に植物館あり盡く熱帯地方の植物を培養せり行くこと數町にして食店あり眺望極めて佳なり鐵橋邊に横たはりヒラデルヒヤの市街の高樓雲際に聳ゆ河水帯の如く樹緑の間に蜿蜒せり此の邊に小憩してアイスクリームを喫し又車に駕して歸る午後二時なり食後金銀製造所を見物す規模小なりと雖も金銀製造の多きには驚くに堪たり午後六時より汽車にて某氏の招きにて行く會するもの六七人皆當地の紳士なり會食後十時頃の汽車にて歸る

同廿一日午前九時より昨日の某氏来る即同行して先づ蒸汽車氣鑪製造所に行く中々壯大なり其れよりキラールト校に行く本校當地の富商某遺言して一切の財産數百萬圓を寄附して建築せるものにして専ら貧民の孤兒を教育するを目的とす此人僧を惡む甚しく本校内に僧侶の入るを嚴禁す蓋し僧侶口に仁慈を唱へて行ひ宜しからず曾て惡病流行して慘狀を極めたる時僧侶一番に逃げて患者を顧みず言行反する等を始め教育に宗教を交るは智識を束縛するものなれば旁以て大に之を惡み如此遺

言を爲せりと云ふ宗教盛なる米國にして如此學校あるは奇と云ふべし此人八十一歳にて死せしか妻を迎へざれば子もなく品行正しく徳行の人也と云ふ其の生徒千三百餘人あり小中學を置き日々授業間には歩調を習ひ金曜日は練兵を爲すと云ふ校舎は盡く石造にして校内の地面凡そ十六町歩もありと云ふ電氣燈七臺を設け夜亦晝の如しと云ふ生徒は皆校費にて養ふと雖私生の兒は入校を許さずと云ふ蓋し私生の子を養ふは不品行を明許する譯なれば弊害不少を以て也と云ふ其れより絨段製造所を見午後後に成りたれば休業するを以て只景況を見る而已にして器械は休みなり頗る盛なる製造所也一周間に渡す所の給金二萬六千ドル也と云ふ其れより品物預り會社に行き倉庫を見る公債證券其他と云ふ午後四時頃より當地のバスを見物に行き表衣一枚と女の手套とを求む岩崎、林、福富氏等來ると云ふ同廿二日晴午前十時より某氏の招により柴、樋田兩氏と三人にて費府より十里計田舎に行く停車場に到れば氏馬車を以て來り迎へ共に山林の間を遊歩し同氏の妻君の田地を見て氏の宅に行き午食の饗あり親族の妻君及び甥亦來る同氏の妻君及二人の娘も出て來り共に食す同氏は頗る富家にて屋敷廣く家屋頗壯大なりガスも亦自自宅にて製造せり午後四時の汽車にて費府に歸る四時四十分の汽車にてニューヨークに赴く心組の所後れたれば六時の汽車にて發す七時過ぎニューヨークに着す吉田領事及雇外人來り迎ふホテルは前日の所なり

同廿三日晴午前荷物預り會社を見物す費府にて見る所と大同小異なり是れ最必要なるものと思はるゝなり其れより税關附屬の倉庫を見る貸庫と大同なり盜難豫防法妙なり夜領事の招きにてクラブに行く日本食の饗應あり

同廿四日午前十一時頃南北戦争の時海軍のパノラマを見る妙なり午後六時二十七分の汽車にて發す在新の諸子送りて停車場に來り別る

同廿五日晴午前八時頃ナイヤカラに着す馬車を雇ひ先づ米領に屬する瀑布を見物す瀑上瀨は瀧を爲し三島を鼎立す大なるものをゴフトアイラントと云ふ小なる二島をシステルアイラントと云ふ瀑を大別して二とす大は専らカナダに屬し小は全く米に屬す實に世界無比の壯觀なり米領の瀑を見終り店に歸り食しイラスト新聞記者ラブレエンに面す氏は借地黨にて有名なる人にて此度カナダ地方を演説し暴撃に逢ふ事數回現今此の地にて傷所を治療中なり近日カナダ府下に益々自己の説を述ぶると云ふ頗る剛膽なる人なりと云ふ余等の訪を喜び床上に引て面會せり其有名の大釣橋を渡り對岸にて瀑を見る最壯觀なり河向ひは英領なり所々を見物して二時の汽車にてカナダを發す

同廿六日晴午前九時頃シカゴに達す鐵道會社の役人二人來り迎ふホテルに入り直に出て屠牛場を見物す會社の役人同行也此屠場は世界中第一と稱せらるゝ所にして一日に數千頭を屠ると云ふ豚、羊も亦同様也一日に場内に引き入ること數方を以て數ふと云ふ場内數十の鐵路ありて鐘詰、氷詰、

ラカン、鹽漬の類を乗せ數十輛を出す眞に世界一の名に耻ぢざるべし其れより公園を遊歩しパノラマを見て市中を見物し十時四十分の汽車にて發す

同廿七日晴此地方専ら牛、豚を飼ふ事を主とするか如し午後八時頃コンマンルクルクスに着す此の方面は樹木甚だ希少なり從來木に乏敷ものと思はるゝなり此にて車を替ゆるなり暫時にして大河あり大ひなる橋あり橋を渡ればマハと云ふ都府あり十萬餘の人口なり車甚だ運行なり

同廿八日朝晴今日の途上一の樹木なし地亦沙にして悪し新移の民甚だ稀疎也専ら牧畜を主とするが如し所々新町の形あり数年の後は必ず都を爲すもの多かるべしシドニーと云ふ所にて午食す此所稍や町の形を爲せり兵隊も近方に屯すと云ふ土人の變に備ふるなり士官兩三人を見受けたり今日は忽ち雨忽ち晴れ亦雷鳴もあり午後四時頃より丘上疎々小松あるを見る又濕地に柳あるを見る丘は火山質の土石なり地は總て短き芝原にして地鼠の如きもの頗る多し洋語にては『一種』と云ふと云ふ如何にも形は犬と似たり向ひ足を上げて立ち四方を伺ふ人來れば忽ち穴に入る盡く土中に穴居するなり甚だ穀物を害すと云ふ此邊都て水に乏しと見ゆ往々風車を見る此れはポンプを仕掛風力にて井水を上げ飲料其他に供するものゝ如し午後七時頃チエネンと云ふ所に着す此所にて夕食を喫す此所も新開驛にして諸方に線路ありと云ふ此地高原にして其の高き所は海水を出つる事六千尺に至る所ありと云ふ日の入り頃より知らず識らず已に山上に達し所々トンネルの如き所を通れり是板を以て作

れる雪除けなりと云ふ折々松の木あるを見る

同廿九日晴今日も高原上を走る地質はチバ土の如し草は河原ヨモギ而已にして他の草を見る稀なり水も亦至つて乏し然れとも偶々牛の居るを見る水も亦濁れるもの少々流るゝを見る線路の左右に低き山あり火山質の石を以て成るもの多し午前九時頃□□□に着す此の所鐵を出す由にて製造所あり又走る一時計にして□□□に至る朝食を喫す午後三時頃□□□に於て午食す此地稍や部落を爲す支那人の移住するもの數戸あるを見る此の邊より始めて人家の多きを覺ふ途中所々に牛の斃死するを見る蓋し寒の爲斃れしものなるべし午後六時頃ヨクデと云ふ所に着す此所にて車を替へ七時頃發す此所にて土人數人を見る寫眞及セロモン宗の經文一部を買ふ今日暑氣甚し寒溫器九十一度に至る行く事凡そ一時計にして鹽湖あり又製鹽所あり今日多く羊を放養するを見る傍に牧師と思敷もの天幕付きの馬車に烟突の付きたるに乗りたるを見たり蓋し羊と共に水草を追ふて移轉するものゝ如し暑中は羊と共に原野にて暮すものと思はるゝなり湖水の近傍牧草よく生せり河原艾を除き他の草を植ゆれば此地も耕地に適する事疑ひなし只水のなき處はシカタなし途上往々兎を見る

同卅日晴昨夜來始終河原艾の中を走る今朝に至ても亦然り只水の乏敷か爲河原艾の傾する所となる通行の人多く沙漠の如く見るは誤なり午前十時頃イルコーにて朝食を喫す暑氣至て強し蓋し八十八度以上なるべし所々にて停車する事甚だ多し新移の人に便を興ふる爲なるべしゴルコンドと云ふ所

にして午後三時頃百三四度なり熱氣可思昨日來樹木絶へてなし山も草なし午後六時頃左の方湖水を見る湖の邊白沙の濱を爲せり走る事三十分計の處盡く沙漠なり窺に思ふ上古此邊都て大なる湖水ありし所地球の變に依り涸れたるか如し沙中突起する石皆水底にありしものと見ゆるなり午後八時頃シノーと云ふ所に食す此所は電氣燈及ガス燈を用ひ人家亦多し是れより次第に山中に入り松樹多し谿谷の間を走る半月を車窓に見て行く

同卅一日陰午前八時サクラメントにて朝食す此の所はカリホルニヤの政府ある所なり河に依り都を爲す昨夜來通行する所は都て山中なり松樹多し又葡萄も見受けたリサクラメントより以南は盡く平地なり桃李類の菓物多し午前十一時半頃桑港に着す領事藤井氏及銀行員某來り迎ふ郷信二池を落手す一は乙猪一は荆妻なり一家無事を祝す

六月一日午前十時頃より公園を散歩し海濱の樓に立寄り小食す海中の岩上に海獸ヲットセイ群居するを見る午後二時頃歸る四時頃より藤井氏の招きにて行く日本食の饗あり妻君の調理の由甚佳なり十時の汽車にて歸る

同二日晴十一時頃より室内射的銃及び短銃等を求めに行く農具屋に行くも良品なし二時頃歸る米國の元大佐某來る此の人は馬を賣買する由にて良馬あるを以て余の一見を乞ふ余素より買ふ力なしと雖も一見を約して別る晚に市街を散歩す

同三日晴午前十時半より馬を見るの約あれば先領事館に行く大佐先づ在り即ち同道にて馬屋に行き一見す其れより大佐の子其の馬を御するを見る別段の駿馬とも思はれず歸途ハートルローのバナラマを見物す午後八時より日本人の爲設立せる常港の耶蘇教會に招かれ行く洋人宣教師某久しく日本にありし人にして能く日本語を談す會員三百名計皆常港在留の日本人なり余か爲め祝詞あり米人教師亦日本語にて演説あり余亦生徒の爲に一言を述べ十時頃歸る

同四日晴午後三時桑港を出帆す船はゲーリック號なり風少しあり寒し福晋會員等送り船に來り別る領事、書記生亦同様なり四時別を告げ發す港の出口に砲臺あり皆舊式と見へたり

『同五日より十一日に至る記事なし』

同十二日余船量にて床を出る事稀なり故に書せず又書する事なし

同十三日地球運轉の差を以て一日縮むる由なり

同十五日今日は二百八十英里を走ると云ふ今日迄の最上なり

同十六日風好し今日を以て十六日と數ふ天寒し

同十七日陰食好し帆皆張る

同十八日陰午後二時頃より逆風と爲る昨日より今日に至り二百九十三英里走る日々圓碁、將棋盛なり



同十九日陰海上平穩なり

同二十日陰晴不定なり海上は穩なり午後六時頃より風好し八時頃より風波荒し

同二十一日午前三時頃より風波甚た悪しく雨甚たし七時頃最悪し船動搖す然れ共船體頗る堅牢なれば動搖甚たしきを覺へず十二時頃に至り風止む餘波は猶強し

同二十二日天晴波穩にして風好し人々喜色あり午後二時三十分頃始めて大陸を髮髯と見る蓋し安房上總なるべし日本船も亦多く見るなり

谷干城遺稿 卷之三終

谷干城遺稿

卷之四 日記之四

第一編 條約改正論沸騰當時の記録

第一章 記録の一

明治二十一年十二月三日土佐を發す

同四日神戸に着す大阪より廣瀬氏來る

同五日朝山縣氏を訪ふ當日山縣氏乗船掛け來訪し共に船迄送る佛國船なり同日午後三時佛人ブダアン氏を訪ふ陸軍在佛生徒及び雇教師辭退歸國の事等談あり此度の事は近時井上氏等の政略より致す所にして實に日本不信義の最大なるものとす此日柴氏も來る池邊吉太郎氏も亦然り吉十郎氏の子なり

同五日二番汽車にて西京に行く隨行者は田村正榮及肥後末岡某なり駄屋町俵屋方に宿す此日粟内

智恩院、清水大佛等を見物す妻子、嫁、孫等同道なり

同六日金閣寺より北野の天満宮を始め御室を経て高尾山の楓を見物に行く已に落葉となり少々残葉を見る午後八時頃歸る柴、池邊氏等同行なり

同七日朝佛國宣教師某來訪土佐にあるヘンシーイ教師知己の由なり昨日も來訪せし由一時半計にて歸る午後二番の汽車にて神戸に歸る時に七時頃なり

同八日晴神戸丸に乗船杉浦、竹内氏等送り來る姫路より渡邊中尉來る十二時出帆天氣好し

同九日十二時横濱に着す澤村氏を始め豊景操、豊政操方御出迎なり和田彦にて暫時休息し午後二時四十分の汽車にて歸京一統無事を祝す同行は久満子、愛子、芳子、松子、春次及余下婢一人なり別に田村、末岡氏等隨行す 同十日

同十二日箱崎に行く佐々木氏來る

同十三日淺野氏に行く佐々木氏に行く不在なり堀江氏の留別に行く三浦、曾我、井田、原田、奥氏等及余なり土方氏の書來る 同十四日

同十五日淺野氏來る此日土方氏來る樞密院の事也

同十三日堀井氏洋行に付見送る其より豊川氏に行く馬場氏を吊するなり福富氏來る新聞の事

同十七日晴丁野氏來る編輯の事なり午後三時頃より箱崎邸の會議に付行縣地郎中の報告を主とす

るなり其の席にて決せし事左の件なり

一 縣地役人改革の事

一 白川戰死者の碑薩人口中綱常氏より相談の件

一 寺田利正氏贈與金の件

一 祖父江屋敷御買上の件

右議了の後食事出る食後佐々木氏より別席に於て相談あり即ち余の樞密院顧問官たるべしと云ふ勸告なり土方氏の來談の末黒田氏より再び佐々木氏を以て猶勸告すべしと云ふによりてなり余土方氏に答ふる所を以て辭す佐々木氏も最中に聞けり 同十八日

同十九日家族同行にて淺草に行く午後三時同所より根津の伊香保温泉に行く藝人辻、野村、鈴木、藤田氏等の案内なり時事の話あり

同廿日今日村田氏同道にて横濱に行く英人某方にて十二番獵銃を求む其の他獵用の具數種を求むハール氏の店に行き散彈等を求む同氏の案内にてホテルに行き晝食を爲す午後二時四十分の汽車にて歸る直に山王茶寮の例會に行く清岡會主なり七時頃より辭して村田氏の案内に付行く

同廿一日夜福富、杉浦、高橋、古莊氏等來談時事に關する事なり

同廿二日馬場辰猪氏吊祭に付増上寺へ午後二時より行く式終り直に上野華族會に行同方會の終會

なればなり 同廿三日

同廿四日古莊氏來る彌生町の事の六ヶ敷を話す午後三時より山王に於て元田先生の講義あり終て酒食出つ先生會主なり吉井氏其他六名なり

同廿五日早朝福富氏來る先日來苦心の事某義侠の力により基礎確立の吉報を得たり辻氏來り彌生町の方も異議なき由の談あり午後彌生町に行き基礎確立の見込あるを述へ猶將來の事を計る無論賛成に付助力するを諾せり

同廿六日おあい今日出發す神戸丸なりおくま、およし等濱へ送る今日元田先生來る 聖上の御内諭に依るものなり余か樞密院出仕の事を御内諭を帶て勸告せらるゝなり若し奉命の意もあれば改めて侍従長を以て御内命を傳へらるゝの筈の由なり余縷々奉命いたしがたき理由を述へ不敬に相成不申様御断りを申す先生も余の言を最もに聞かれ不惡様申上吳る筈にて歸へられたり曾我氏亦來る夜野村氏來る彌生町の手紙を示す舊來の疑念氷解の事と思はる今日細川氏來る家助の刀を贈る

同廿七日英人デニク氏スイツラント人同道に而來る瑞人は今般士佐海南學校へ雇ひ入れたる人なり平戸人松山某外一人來る政事談あり同人北島准后親房卿の圖を持參して贊を乞ふ先づ預り置くなり

同廿八日元田氏に行一昨日の答禮なり其より黒田、三條、佐々木諸氏に行く黒田氏は不在條公に面

し土佐山内の事を談す佐々木氏明治會の談あり六時頃より彌生町に行く來會するもの杉浦、福富、古莊、千頭、陸、高橋諸氏及宮崎某、野村文夫氏等なり十一時頃歸る新聞の名稱單に日本と冠する議あり

同廿九日古莊氏來る十時頃より箱崎に行く熱海行に付暇乞旁なり此日樺山氏來る頗る多用なり

同三十日八時三十五分の汽車にて發す從者は沖本なり土屋氏同道なり六時頃熱海に着す

同三十一日晴暖氣春の如し

明治二十二年二月一日曇寒し朝三浦氏を訪ふ自身出身の事につき行掛りし談あり仲媒は山田氏にして初は監事部長の筋なりしも山縣氏不同意にて大山氏も初は不同意もなきよしなりしが山縣氏不同意云々より大山氏も實は信實異存なきに非ず其に三浦氏を部長にするなれば素より不同意と云ふよふなる事にて右の事は止り轉じて宮中顧問官云々の事に成り其より學習院の事に成り 聖上の思召云々に付不得已に成りしとの事又干城の學習院御用掛の事に付て最初土方氏と談合は全く囑托にて勤むる筈の所土方氏委細を不申上辭令書を認むに至り囑托の事不都合と云ふより余か方に來り是非共御用掛にて折合吳度實は 上へ申上も濟み今更破れては不容易事にて土方氏も當惑の様子に付余も不敬に當るを恐れて先づ御話申上る事に答たるものにて最初也心に許さざる所也其後にて井上氏は出て跋扈する也彌面白からず断然御断申上る事を談せり三浦氏も去る仔細に候へば至極尤の事

なりと申せり

同日土屋氏と獵師を連れ兎獵に行く土屋氏山鳥を得る而已外に狸一疋を得る而已なり夜三浦氏  
來る

同日曇今日寺田利正氏に手紙を出す山内家々扶の事なり

同四日風強し八時頃より土屋、山岡二氏同行にて伊東に赴く獵旁温泉場見物なりあじろと云ふ所  
にて晝飯を喫す午後四時頃伊東に着す突戸と云温泉場の油屋に宿せり宿屋甚不潔なり

同五日朝七時頃出發路々小鳥を逐ひ十二時頃あじろに着す同所にて晝飯船を雇ひ歸る夜志賀重  
宮島信吉兩氏來る

同六日晴土屋、山岡兩氏芳濱にかりに行く午後散歩晚に宇都宮寺三郎氏來る暫時にして歸る又尾  
島三郎氏來る時事談あり又晝頃大高坂氏及騎兵中尉某來る此日荷物着す

同七日山岡氏は小田原にて一泊し今日歸る

同八日午後より小鳥打に行く晚景に歸る十二羽を得たり今日沖本を返す留守へ手紙を托す

同九日八時頃より小鳥打に行く十五羽を得て歸る午後四時より再び行く三羽を得る

同十日晴土屋、山岡氏等は小鳥打に行く余は留守に書見夜尾崎三郎氏來る

同十一日晴頗る暖氣なり土屋氏主從出發して歸る留守へ手紙を出す夜風雨高津葛屋より家鴨を送

り來る

同十二日晴暖氣なり終日出て高島嘉右衛門氏來り易の談あり本年の諸大臣始め重立たる人の身  
の上を笠せし由余も其中にあり余は先づ吉なる由の咄なり果して當るや否やを不知同氏横濱に於て  
せる演説の談頗る余の意と合するもあり偶々豚兒に贈る積りの事認めし書狀高島氏の咄に似たるあ  
るを以て遂に其の狀の一端を示せり氏大に同意を表せり今日乙猪に手紙を出す又弘田久助氏に手紙  
を出し寺田利正、北代揆一兩氏の書簡を添ふ留守へも書狀を出す今日子供來る十六歳なり

同十三日陰朝飯を喫せず握飯持參にて小鳥打に行く十三羽を獲て午後一時頃歸る留守より書狀來  
る中村氏娘を預るに付十六日頃より來る事の出來ざるを報し來る返書を認む明日山岡氏出發して歸  
京の筈なり本日 明宮様當所へ御着被爲成候に付家々國旗を掲げ祝意を表せり

同十四日陰少々雪降る山岡氏出發す曾我氏隣室にあり國防論を贈り呉れる 明宮殿下御旅館を伺  
候す直に拜謁被仰付御學問等拜見被仰付退出す夫れより淺野氏を訪ふ今日殊に寒し弘田久助氏手紙  
到來直に返書を出す土佐役人の進退の事なり昨日認めたる留守への狀は今朝出す

同十五日早朝より小鳥打に行く十一時頃歸る十四羽を獲たり昨日の御約束により小鳥は 明宮殿  
下へ献上す小銃も御約束により御覽に入る也十二時頃曾我氏來る余か身の上の事に付土方氏より内  
話ありし由なり 聖上の厚き御思召不肖の某實に恐れ入りたる事共也曾我氏は驚と考案すべしと答

へ置きたり寺田利正氏より手紙二通来る一は本月七日一は同九日出てなり皆山内家役人の事なり直に返書を認むる又右の手紙に添書して弘田久助氏へ出す留守よりも手紙来る本日は余か家の御召出し日にて祖先祭を爲す例なり余留守なるを以て荆妻余に代り祭事を營む筈なり定めて首尾よく相濟みたること、窃に御祝するなり高島嘉右衛門氏より生魚數尾を惠まる乙猪も熱さめてひいもとまりしよし土佐より左右ありし由申来る先つゝ安心なり

同十六日雨古莊氏の手紙の事に付淺野氏に行く同氏快く引請呉れたれば直に古莊氏へ申通す淺野氏より手紙も来る原田氏を訪ふ曾我氏も来る午後二時頃歸る弘田久助氏より書狀来る返書を出す不二屋より焼鳥を呉れる終日雨降る

同十七日晴頗暖和なり原田氏來訪小澤氏も亦来る高島氏次て來り易談あり淺野氏來る原田氏先つ歸り小澤氏歸り高島氏次て歸る淺野氏余の身前の事に付意見を述べ至極最もなる事なり舊冬三十日歟に三浦氏の辯解の爲山田氏、淺野氏に來りし由の談あり又先年岩倉氏、淺野氏に申せし事あり淺野氏不滿にて有栖川の宮へ申置き岩倉氏に談話せし筈の所岩倉氏より失言取り消し事ありて止みたる舊時の談等あり午後一時頃歸る今朝又弘田久助氏より手紙來る談中武内氏等採用に付俸給の事共也直に返書認め出す中江篤介氏より學校借金の事に付歎願あり開届がたきに付其趣を弘田氏より通すべしと申遣す午後四時頃元田先生來訪せらる今日來着の由なり晩に散歩夜曾我氏より美味を送らる

同十八日晴曾我氏及高島氏を訪ふ皆不在なり海濱を散歩し午前十一時頃歸る再び午後より散歩暫時にして歸る拙詩を得たり

金屋朱門春似海 馬車如織住還來 感時野老喚無答 閑曳孤筇訪早梅

十六日夜認め留守の手紙今朝着く當夜高島權藏義太夫の催に付行く

## 第二章 日録二の一

此の記は本大事を記し他日隈山詒謀録の材料に備へんとの主旨にて去冬十二月三日舊里土佐を發せしより筆を取れり事をき時は必ず書かぬ心得なれとも暇ある時は日日の晴雨も來客の名も又拙詩も書簡も草稿も雜話も細大となく書く事あるべし余往年熊本在勤之頃佐賀、臺灣の役ありし頃は日々の記事を爲せしか十年の役に城中にて悉く灰と成りしより力を落し窃に思ふ是畢竟筆に托せし故數年の事蹟も夢の如く成りぬ若し筆に托せず腹に藏する事なれば命の限りは消る事もあるまじと悔覺し是より日録は廢したりし然るに余も早五十の坂を三年越へたる上に益世の耳目に接する事は多く成り記憶も何となく薄く成りしやに覺へ一身に關しての大事も事こそ記憶すれ日月を忘却し又人と談話せし事も往々忘却せし事不少若し今の様にて只腹に藏せんとする時は新得の爲に舊得を失ふの恐もあり又壽命も限りある事なれば徒に腹藏を頼むべきにも非ずと思ひ直して

此に斯の記を始めぬ故に日々の事は前に述へし如く書く事もあり又は書かぬ時もあり大事にも多忙なる時は書き漏らす事もあると知るべし此の記は第二號なり

明治二十二年一月十九日晴古莊氏より手紙來る日本の事に就き直話を要する事あるに付來る由也高島權藏氏より鮮肉到來せり高島嘉右衛門氏來る易談及余か西洋談等を爲し午前十二時頃歸る四時頃古莊氏來る廣告の文亦持來る日本一件なり二月十一日より發行之由に付公告の文及新陳交代之方法等の談あり岩崎、福富氏等及島地上人へ送る手紙を托す公告文の事は淺野氏とも協議調へり

同廿日晴風今朝古莊氏出發して歸る弘内久助氏手紙來る土佐役員進退の事也高島信茂氏來る仙臺の師團の參謀長なり是は陸軍中の慷慨家なり午前十一時頃歸る 明宮殿下より御獵の鮮魚數尾下賜る難有御事也午後寺内清祐氏來訪氏は十年の役熊本にて余か部下にあり中隊長に而功ある人なり二三年以來はい病にかへり昨年も當地に來り本年も又寒を避て來りし由なり暫時談話して歸る午後五時頃より曾我氏來る又余か身前の事に付頻りに出仕を勸めらる且云ふ徳大寺氏より元田氏へ手紙來る 聖上之思召にて被命たるものにして元田氏も大きに心配し居れり我れ君とは朋友間の事なれば先づ過日の行掛りもあれば我より御話し申すなり談判の口氣まごころし居ると身のおき處なきぞと信はんか如き意味あり論意始終尺を曲けて尋を伸ふるの點あり所謂改進黨等の意見と同一のもの也又其内の咄に貴様の身に付而は種々探偵も上り 聖上にも御心配被遊就ては何分にも就職可然又一

且彼の院に入り然る後待從武官之職を兼るに至らば前途陸軍の幸ひ也杯云ふ説もあり總而直言すれば只居ればつまりしやうがなくなりあげくには西郷氏の二の舞に至るも知るべからすと云ふの意味あり余之に答て今の政府は貴様も知らるゝ通り金力兵力を使用するの全權あれば如何に愚なるものも腕力を以て政府に抗するものはあるべからず況や余か如きは只 皇室の御爲を思ふの餘施政の針道に不同意を唱ふるものなれば如何様の事あるも腕力沙汰の無智なるは致す間敷是は御安心あり度と申述たり曾我氏等か心も余の斯くして居るは幾分世之爲に成る事は不考して在朝の者之目標と成りて政府に害ある者と認むるものゝ如し歎息之至終に談は結局に至らずして別れを告げたり余友人の間に頑陋を以て擯斥さるゝは固より甘んずる所也然るに中間にあるものゝ一言に余か志は埋没して却て不忠の臣たるの名を蒙らん事を恐る心に關する所のもの只此の一つある而已余や元五人扶持の一寒士なれば非職給の滅却は毫も關する所なく又今般の滅却は尤至極なれば少も痛痒關する所なし凡情より見れば二百六十圓より忽ち百七十五圓に滅せし事なれば不平あるべしと思ふも無理ならぬ事なから入を計りて出るを爲す時は滅給何ぞ意とするに足らんや若一切無給となるも猶宮内省より給はりし恩賜金あり若し之なきも山内家より賜はりし百五十石の金祿あり又舊廬依然たり猶生を送り死を喪するに足る兵糧攻は決して恐るゝ所に非ざる也明治の天地吾身を容るゝの地なきも亦不得已次第也且余の現今就職を辭するものは皆其の理由あり又明年政躰の變するの日に至らば上院も

出来るべし左れば上院の議官と成りて應分の義務を盡さんと欲するは余の最も好む所なれば長く閑地に遊ぶと云ふにもあらず今の腐敗せる政府の味方をせよと云はるゝに至りては心の許さぬ所なり余の困却實に今の如きものなし夜に入り妻及女兒老婆下婢合せて四人來る賑々敷成れり十一時頃皆寢に就けり

同廿一日陰寒し高島氏來り又歐洲談を爲す種々の意見を述べ然れ共皆末を話して其の本を忘るゝものゝ如し余其の本を論し内政を整へし後にあらざれば君か論は實施し難しとて地方の情況を舉げて其の本を救ふの必要を論す高島氏余か説之詭激なるに恐れしか早々辭して去れり午後二時頃昨日鮮魚下賜之御禮として 明宮御旅館へ參殿御遊獵として御殿之御留守に付高辻御用掛へ面會して御禮を述へて歸る昨日荆妻携帶之書狀之中に越後國古志郡小向村川上淳一郎氏の書牘あり漢文にて昨年其の村社に奉獻する額なりとて敬神愛國の四字を書せし禮なり右額の寫眞一枚を送り來る

同廿二日晴高島權藏氏來る元田先生亦來訪何か要用ある由之所余獵の支度調ひ出立の所なれば今夜余より相尋可申を約し元田氏歸る直に獵に出る午後二時頃歸る小島十三を得る元田氏の要用は即余の身前の事之由なり待從長より手紙來り居候に付廿日曾我氏來談と同一事たる事疑ひなし同し辯解を幾度も爲すは心ぐるしき事はなし小澤氏の妻君來訪あり晚餐後元田氏に行く當方より出務の難相成事情を述べ心事一切漏るゝなく談し結局の干城か人に對し言ひし事も亦不少然るを今時機後れ

に樞密院へ出仕いたし候而は二舌を遣ふものなり干城の御入用は干城ありての事なるべし若今突然出仕いたし候ては是れ干城なきなり一個の木偶又何の用かあらんや何ぞ國會開設の期迄は御捨世之程偏に奉願段言を盡し申述べ元田氏も大きに道理に聞けり先勘考とて談は結へり其の後の咄に伊藤氏の論の變遷之事に及ぶ元田氏の云ふに伊藤氏は一昨年の春頃事は事々物々歐洲に摸擬するの考にて東洋に全く歐洲的の日本を作るの積りにて條約改正の中止となり時事日々新聞にも記さ令め中止するも一時の事にて十分用意を爲して後ち歐洲的の基礎を定め再び改正を爲す積り也との意に記載せしより伊藤氏に質疑せし處如何にも左様申たるに相違なしと答へしなり然るに近來に至りては頻りに日本流を主張し日本は他に類なき國なれば英によらず獨に依らず一種の日本憲法を作るべし何ぞ外國に摸するを用んやとて以前の論とは凡て反對の論なりと云ふ干城切に案するに是れ伊藤氏が例の猾智にて議論に洩むの人多くは古るめかしき人なれば一は其旗色を見ての論にして一は今度の憲法は歐洲普通の物に非ずして憲法の憲法たる妙用なきものなれば他日英は斯くなり獨は斯くなりと外國の法を擧げて不満を云ふ者あるは必然なれば即ち日本流を以て答ふるの心組なる事と知られたり實に厚顔極ると云ふへし伊藤氏は實に才子也然れ共遠見の明なし故に其の爲す事言ふ事時に隨て變化す是れ惡意に非ず近眼小才にして遠見明識なき故也信義の可尊を不知故也廉恥なき故也然りと云へとも惡人には非ず正直の人と交り正直の人の助けを得て事を爲すならは蓋し如此の過ちなか

るべし可惜哉余か身の上之事も先當夜の談判に而大段落と思はるゝなり是より以往益々政府の指目を受くる覺悟なかるべからず嗚呼我仰て天に恥す伏て地に恥す彼の獨逸流の探偵又何を憂ふるに足んや徳大寺氏より元田氏への手紙之文中に探偵の趣も亦あれは遂に用ふるの期なきに至るも難計等の文字もこれあり此之事は元田氏の辯解もありたれ共あまり感心せぬ辯解と思はれたり頻りに我れを諷する者あるより 聖上にも御心配被遊候より可成就職せしめ度との難有 叙慮たる事推察せられたり只其就職の容易にあらざるは余亦困却を極めたりき當夜の元田氏との談合は随分厳正なりし同廿三日陰朝高島嘉右衛門氏來る例の通り長談なり歐洲談よりトルコ、エジプト等之事に及ぶ十二時過に至りて歸る四時頃芳をつれて散歩寒し弘田久助氏より手紙來る吉田氏より海南校の新豫算書を廻し來りたれば土臺等の下紙を成せし分弘田氏より送り來る直に返書を認め豫算書共返へす夜元田氏へ送る手紙を認む大意左之通

昨夜は罷出外ならぬ先生之御事故意見之在る所を吐露いたし胸中爽然いたし候干城の自信する所は之を孔孟の教に本き之を歐州の新説に參考して毫も不疑所に御座候へば心事御憐察被成下雲上向不敬に當不申候様深く御心配相願申候拜眉之砌徳大寺氏の書中にも探偵云云之事有之誠に歎息之至に御座候抑も干城か身を探偵いたし候者一昨年歸縣の節各縣及警視廳より派遣する合せて十六名昨年歸縣の節追蹤し來る者亦許多なるか如し其他同縣人にして干城の舉動を密告するもの亦

不少干城亦其然るを知る殊に言論を慎み候得共胸間の鬱勃に發し嚙んと欲し不能場合も有之彼の探偵報告する者大概無智無賴之徒に非れば官途に熱望するの徒と官途の端に在て自ら政府に諂ふの最可惡小人にして右等惡漢の言遂に蒸發して 聖聽をも暗ふし奉るに至る誠に歎息に不堪候自古志士仁人の怨を呑て地に入る者本是之れ依るものにして干城先代に谷丹三郎重遠なる者野中兼山に續き才學を以て土佐に顯れ一藩を震動致候所卒に讒者之爲に九年の餘蟄居を被命一室に死去せり後世丹三郎の不幸を憐み其積徳を尊み泰山先生と稱し其の名を呼ぶ者なし干城の安政四五年の頃より勤王の主義を以て國主に盡せしも皆泰山の教へを奉る所以に御座候愚父又常に誠めて曰く汝は自ら新田、楠を學ぶ勿れ主君を新田、楠と爲し自ら船田、恩地を以て任せよと故に教を守るや敢て脱藩狂奔せず激徒と因循政府の間に立ち艱苦を嘗むる實に今日の比に非ず不計も明治に際會し天下擧げて直臣と成るに至り不肖の身も遂に今日の榮符を辱くするに至る皆是祖先積徳の餘慶にして決而干城の力に無御座候其れ然り益々祖先の教を守り上、忠を 皇室に盡し奉り下、人民と共に國土を護衛するの心毫も變する處なし世の政治に暗き者動ともすればは行政府と皇室とを同一視し『執政は王の信任する處の者也執政に害を加ふるは即王に危害を加ふると同じ執政を誹謗するは王を誹謗すると同じ』是古代の律にして方法精理中に見へたり』多少政府に不平あれは直に目して不忠、不義の徒と爲すに至ては歐洲封建時代の法律に見る所にして今日社會にある



へきの事これなり然るに彼の保安條令を以て離に觸るゝの羝羊を追ふに至りても猶 皇城三里外  
云々の文字あり彼輩に 皇室に敵する獨逸の社會黨露國の虛無之類の如きものならんや豈之の令  
を發する爲近衛兵を以て皇居を衛護するの必要あらんや誠に歎息之至に御座候別紙は友人柴四郎  
從事する處之大阪毎日新聞に御座候干城か意を得候文に御座候故費覽に入れ申候政府か金を費し  
干城等か身を探索するの愚なる驚くに堪たり感慨の餘多言に涉るは深く御仁恕を奉願候頓首

一月廿五日夜認

干城

右書狀は同廿四日朝元田氏へ送る

同廿四日晴暖甚たし午後より銃を携へて散步す玖滿、芳同道なり廿四五丁を往來して歸る夜元田  
氏より手紙來る今朝の返書なり海南校に雇ひし教師(スイツル人)廿三日に高知に着せしより本日  
着の時事新報に見ゆ

同廿五日陰午後より鳥打に行く小鳥二十二羽を得て歸る晩に風古莊氏より手紙來る諸事都合よき  
よし申來る土佐より愛子の手紙も來る乙猪又熱度を加へし由の報あり本日着の新聞に官吏の政談演  
説を許すの事載せたり國會之準備漸く始まり此日左の届書を出す

干城儀所要有之豆州地方旅行奉願御開濟之上熱海に罷在候處宿痾再發いたし候間猶四週間御暇被  
下度奉願候也

總理宛

別に添書にて陸軍大臣へ出す

同廿六日陰小鳥打に行く正午十二時頃歸る十五羽を得たり行掛け 明宮殿下に途中に拜謁いたし  
獲物献上之事申上置候故直に献上す淺野氏及島地獸雷氏より手紙來る淺野氏は余の本月中に歸京す  
るや否やの尋ねなり午食後同氏の旅宿露木方へ行き談す島地氏は米人リゼンドル氏の著書の事に付  
余の手紙之返書なり愛子よりも手紙來る乙猪も先格別の事なき由なり熱度も舊に復したる由申越せ  
り今曉大學焼失せし由淺野氏へ電報來ると云ふ(夜十二時十五分出火一時二十五分鎮火)

同廿七日晴午後より公園なる梅莊に至る玖滿、芳等同道なり 明宮殿下にも御來遊にて遠方より  
干城の來るを御覽被爲在干城の居る所に御臨御被爲在そこに居るは谷の家内歟と御尋ねに付干城の  
妻及娘に御座候段御答申上夫より此方へ來るべしとの御意に付御後に從ひ御休息所に參上仕御筒及  
聖上より御贈りに相成候御本杯拜見被仰付暫時御咄の後御暇被下退きたり誠に御伶俐なる感する  
に堪へたり 今上萬歳の臣は三千七百万人の君父と奉仰御一人の斯く御伶俐に被爲涉候御事誠に難  
有事共なり暫時休息して園を出づ 殿下にも間もなく御歸館の御様子なり余は妻子と別れ小鳥を志  
し西山の麓なる楠の本に行き一時間許にて八羽を獲たり五時頃歸る今日東京より手紙來り吉松秀彦  
の幼年校入學に付證人の印行を受けに來る捺印の上直に返書認め澤村氏宛に返へす明日出足の由に  
て高島信茂氏暇乞に來れり

同廿八日陰今日も小鳥打に行く十一羽を獲て正午頃歸る今朝留守へ三浦氏來訪の由なり三浦氏昨日來ると云ふ午後三時頃三浦氏を訪ふ余が身前之事に付談あり是も曾我氏同様の考なり前刻吉井次官來訪余が身前の事に付又々 聖上の思召を徳大寺氏より吉井氏に御傳に相成何分にも就職可致との懇々たる 叙慮の趣き吉井氏より傳へられたり屢の 叙慮に付而は御斷の道も盡き先熟考の上御答可申上段吉井氏へ答置きたり三浦氏か余の身前の事に付尋ねありたれば吉井氏より又々御沙汰を被傳し事を答へ置きたり□□鳥尾、伊藤氏等の咄も有之又山田氏の事も咄あり孰れを是とし孰れを非とする所以を不知三浦氏の旅宿にて 明宮殿下御附の教師湯本某に面會す同氏昨日留守に來訪の由也今夕土佐より吉田、寺田兩氏及宣教師ヘンリー氏の手紙到來皆要用の件なり

同廿九日曇朝高知吉田氏に向け左の電報を發す

ヤトイハトクベシ。ソノタハドライ

宣教師ピリオン氏へ序文を辭す手簡

寒冷の候に御座候得共益御安康恭賀之至に奉存候某御地通行之砌には態々御枉御訪問被成下忝なく仕合に奉存候其砌々御囑托に相成候ブラマ教論一讀いたし智識を開き候事不少然るに兼而も申上置候通り拙者は公に宗教の是非得失を論ずるは甚不好然るに本書中往々ブラマ教と耶蘇と比較いたし候所も有之宗教に不案内なる拙者の如何にも筆を執るに苦心の場も有之貴僧の如き有

徳なる人の囑托を辭するは拙者に於て殊に心苦き事に候得共不得已御斷申上候本邦印度の事を知るべき書籍絶てこれなく本書は印度風俗史として讀候は、非常の利益有之候事信て不疑所に御座候豈拙輩の贊辭を用んや速に御公布に相成衆人をして印度情態を知ら令め賜は、是亦大人御慈善之御事と深く感佩いたし候先右挨拶旁如此に御座候頓首

明治二十二年

中將 谷 干 城

ピリオン大人貴下

十二月廿四日御認之御手紙如何之行進に候歎漸く本月廿八日伊豆熱海温泉場に於て拜見いたし候先以益御安康大賀之至に奉存候然兼而御紹介有之候ピリオン君京都之旅寓御訪問被成下愛然たる其徳一見舊知之如き思ひをいたし申候其節彼のブラマ教論序言の事猶亦御囑托有之其後彼之書一讀いたし候所有益之書は深く信て不疑所に御座候只往々該教と耶蘇と比較いたし候所有之宗教不案内なる拙者の難及了簡不得已別紙之通り御斷申候間何卒貴下より御傳達奉願候猶亦貴下よりも不惡御申添之程希望に不堪候先は乍遲御答如此に御座候頓首

一月廿九日

干 城

ヘンリー貴下

本日吉田、寺田二氏及ピリオン。ヘンリー兩氏へも手紙を出す今日は雪少々降る或は陰或は晴寒し

原田豊太郎氏来る明日歸京候由也本日元田氏より手紙来る余が身前の事に付吉井氏來りし事に付懇々奉命勸告之意味なり文中諸葛三顧之古例を引き奉命の當然を説けり時と場合之大きに異なるありしを氣付かれざるは遺憾なり既に淺野氏に行き右之件に付相談す淺野氏は始終出仕の不可を説く事一日の如し明朝吉井氏淺野氏へ行き情實を談し呉れる筈を致し歸る本日の新聞に彼の日本新聞の廣告始て顯はる快と云ふべし日本新聞社は神田區維子町三十二番地なり

同三十日陰今朝淺野氏は吉井氏に行き歸り掛來訪時に小澤中將來談中に付淺野氏は直に歸る小澤氏も續而歸り候故直に淺野氏に行き吉井氏の様子承る淺野氏曰く僕縷々兄之事情を述へ何分にも情實貫徹いたし候様御盡力有之段申述候得共吉井氏の答には此度は、聖上にも深く、御慮を惱まされ候事に候はば臣子の分として是非共、御慮を安し奉り候事當然と相考候故拙者に於ては最早取次難致との答に而何とも致方なき次第なりとの談に而此上は一應東京の同志者に謀り候上決答之外ある間敷として辭し歸り夜吉井方氏へ行き兩三日の決答を猶豫いたし呉れ候様談す續而委敷行掛り之事を談し明日荆妻を歸し二三之同志に相談可致段も申置たり其砌吉井氏の咄に、聖上の御意に谷は樞密院の事は頗る不同意之由も承りたるが意見あらば朕に申述べざるかとの御意もありし由に付余吉井氏に答へて右は誠に干城に於ては願は敷事に御座候得共軍律百二十條を守らざるを不得身分に御座候は、政治上に關する事を建白等致す事の出來ぬ制度に御座候遺憾ながら申上候道なく不知く

同志の者と談合の語次胸中に在る所發露いたし遂に、御聞に達するに至り候事恐入候次第也若し被召而下御問をも被仰付事なれば難有言上いたし可申一應干城の樞密院を不可とするを述べしとして顧問に非ずして議官なる事欽定の名ありて欽定の實を失する事同院に權力弛くなれば行政官の責任を軽くし行政官の運動を妨げ若し又權力なきものと成れば英國の樞密院の如く無用の長物と成るべし孰れにしても十九世紀の政治界に無用なるものと思ふ由を委敷述べたり吉井氏もなるほどとの答にて余が意見に同意するもの、如し閑談數刻にして歸る夫れより古莊氏等へ送る手紙を認むる十一時頃寢に就く今日陸氏より手紙来る國分高胤氏の詩集の題字を依頼し來る澤村氏よりも書狀來る今橋巖氏死去の由申來る

同三十一日雨少々降る八時頃妻出足す右之趣を淺野氏へ書面に而報す午前十一時頃元田氏を訪ふ不在なり海邊を散歩し歸る午後城多董氏來る直に明日歸ると云ふ復古史編纂の志ありと云ふ付而由井正雪の事を調へたきとの咄ありし既に吉井氏の案内に而猪肉の馳走あり曾我、高辻兩氏及宮御附の教師湯本氏及醫師岡某等參會十時頃歸る本日着の朝野新聞に云ふ(三十日發送)來月十一日神田雉子町日本新聞社より發兌すへき日本新聞は資本金は谷干城、淺野長勳の兩氏にして同社の社務には野村文夫氏之に當り編輯には谷氏に關係ある諸氏か従事する趣なり云云稍探り得て密なりと云へし

第三章 目錄二ノ二

二月一日晴甚暖かなり元田氏に答ふ書狀左の大意なり

日々御勇健目出度奉存候去廿九日御懇書被投奉存候昨日鳥渡罷出候御不在定而御參殿の御事と奉存候御懇書之趣感佩に不堪候諸葛云々之比喻に至りては不敢當且時と場合亦大に異り候様奉存候只不肖干城之爲歎々 聖慮を奉煩候御事深く恐入候次第に御座候今般吉井氏より 聖旨被相傳候上は最早御断之道も有之間敷と判妻諸君相談之上吉井氏へは兩三日之猶豫を申述置昨朝或者へ相談之爲め判妻歸京爲致申候今夕は歸來可致心組に御座候其上にて確たる御答可申心得に御座候右様御含み被成下度一昨年之風波以來は官民間の目標と成り實に不自由なる身體に相成申候畢竟自己の力を不計湮滅せる日本を固定せる日本と致度心願より自然一身も一身の一身に非ずして關係する所不少仍ては男らしく御即答申上候事も難相成若し男らしく御答申上候時は一方に向きては男子たるの言語を食むに至り可申随分困難なる事情は深く御洞察奉祈候先は過日之御手紙に對し御報如此に御座候頓首

午後四時頃判妻福富孝季氏同道に而歸る續て國友氏亦來る古莊氏之手紙頗る意見周到也兩氏の意見も亦就職御断可然との主旨なりき余當夜熟考之上之事に可致とて寢に就く吉井氏都合を尋ね参りた

れ共明日當方より可參段相答へ來訪を断はる

同二日陰寒し夜來勘考之處一先歸京して待從長迄歎願する事に意を決し福富、國友兩氏に談す兩氏善と稱し直に歸途に就く事と成れり時に三浦氏來る兩氏と相會す暫時にして三浦氏歸る淺野氏へ面會の上歸京之上歎願之事を談する積りにて手紙を出せし所不在なり右故福富、國友兩氏も淺野氏を尋ねずして歸る夫れより吉井氏へ行き判妻歸り來る所何分容易に御受け難申に付一先歸京之上待從長迄愚意之次第を申述へ歎願いたし度心得に付此地にて御答へ難申段を述る吉井氏曰く實は大概御決心之事と存じ内々已に東京へも申上候事にて甚當感之趣を云ふ然れ共最初より余之一身は今日己之身にして自己之身に非ず種々錯雜せる事情は前に已に申述し通りなれば同志之者へ相談之上彼等の意見を承り彼等の意見にして道理なれば又無に致す譯にも不參且各地に同志之者も多々有之就中古郷之者は出京之砌出仕云々の事に付應答せし事もあれは相談不致事は信義に關する事なしとせず孰れに致せ一先歸京之上ならでは何分御答難相成初め十一日の紀元節に參内之心組はこれなく候なれとも殊之外宏大なる御禮式の様なれば此御式には列り可申心組之事も申述ふ吉井氏も深く異論はなく候得共兎角御出仕可然との事に而ありしなり先大概に局を結ひて歸る午後三浦氏へ應接の次第を談し置く夜淺野氏歸京の由に付訪問福富氏等來り判妻の歸りし次第を談す淺野氏も喜悅之様子なり九時頃歸る吉井氏より手紙來る

同三日晴吉田氏之手紙の返事電報にて出す又明日出發之事東京へ電報す淺野氏より昨日の朝野新聞之雜報に日本の事の出でし分を借りに來るに付直に渡す今日は元田、兩高島、三島氏等之□□の依頼之書を認む御暇乞として 明宮殿下へ參殿興地のよせ木を献す小き御茶筥筭拜領午後四時頃會我氏へ行く食後元田氏へ行き身前之事に付談合す山内侯より 明宮殿下へ献上の檜柑到來に付手紙を認明朝差上る手首尾を爲す

同四日午前七時半頃出發山内侯より献上の品の事を番頭に命し置く僕二人は荷物を護送せしめ船にて直に國府津に行か令心陸行は余夫婦及娘外に下婢二人都合五人なり十一時小田原片岡に着す同處に午食を爲し十二時半頃より國府津に行き葛屋に休息す午後二時二十五分の汽車に而發す中等車に乗し三人の他に同乗なし横濱に至り是より中等室皆滿員殆ど餘地なきに至れり横濱よりは急行なり新橋に着すれば山内豊正殿を始め澤村、横山、吉松氏等來迎ふ歸邸せし時は五時過なり夜古莊氏來る余か歸來の所以の談話を爲せり

同五日晴寒し食後見込の通り徳大寺待從長の邸を訪ひ暫く就職御猶豫の旨を述ぶ同氏も能く聞込呉れたれば一先歸宅再ひ佐々木氏に行く余か身前の事及明治會の事杯談話あり二時頃歸る山地中將來り居れり余の洋行以來久敷面會せず今日は久振りに閑談余の意中の大概は述盡したり固より舊來の知己の事なれば夫々同意也異なる所の者は職によりて身を處すの別ある而已談已に終る頃福富氏

來る三人互に時事の談あり福富氏は他約あるを以て先に歸る山地氏は夜九時頃歸る近來の快談あり  
同六日陰寒し昨朝賀州人手島毅氏來り同縣人本多政次と云ふ者余に面會いたし度との紹介なれば承諾し置きたるを以て朝七時來る續て竹添進一郎氏來る何か差急く由に付先竹添氏に面會其の事たる余の身の今般就職の意見にして是非共御斷申上るを是とする主旨なり余是迄の御斷手續を談したれば先安心なりとて歸りたり夫より本多氏に面會す同氏は西京の相國寺に住し禪學を修め居る由なり鳥尾氏とは知己の由なれば余も亦其の心して應接せり成る程禪學者と見へ至而寡言にして世務は迂なるの形ち顯れたれば余亦別に談する事なし相對し黙坐する事數分時に亘る中に一語も出さざるもの故余其の量を計り知る不能今日の世に如此容は随分迷惑に不堪一時半計格別の話もなくして歸れり小野道一氏來る高知の近況を聞く板垣氏へ出仕の勸告ありて考慮中なりと云ふ同派の人も種々異論を生し纏り兼ねる様子なり又岡島笑三氏來る小野氏とは別戀の由に付同席に而一時半計談し歸る午後古莊氏來る徳大寺氏へ申出たる末の様子承り度之事なれば共不相成段答ふ歸る萩原三圭氏來る豊景侯兼而少々御障りあり故伺之爲なり

同七日雪昨夜暖氣なりしか夜半より雪となりたり九時頃福富氏來る今夕六七輩來るとの事なり同氏は酒を嗜む事なれば寒防の爲め酒を出す余は晚酌の外は禁し居れば相手を爲す事不能十一時頃歸れり去月廿九日出の寺田利正氏の手紙を本日披見す北代、平田氏等の辭職勸告及招魂社の事に付而

報知なり午後野村文夫氏來る鳥尾氏に參りし談あり又日本の事に付少々異見あり都合よく申置けり五時頃より福富氏來る續て千頭、國友、陸、杉浦、古莊氏等來る杉浦氏余之身前に付意見を出す余も今日迄の行き掛りの事を概畧談す又野村氏の氣を惡敷せぬ事を忠告す十時過皆歸る

同八日晴樋田魯一氏來る辭職して非職となりし由今の農商務大臣の施設兎角意見の合ぬより不得已職を辭し自ら實地に就農業の取調に従事する積りの由就ては農業上の事に付ては日本新聞へ載せ可然事は同新聞社へ報知を頼む事を承諾せり同氏歸り弘山久助氏來る豊積殿華族に御申立の事に付相談す弘田氏歸り華族白川某氏來る自己の身役人に推舉の依頼なり是れは迷惑之至なり當時役人に縁なきを以て見込なき由を答ふ最も注意は致し置くへしと答ふ

同九日少々雨降る午後三時頃古莊氏來る次而柴四郎氏亦來る大阪及九州邊の談あり二時間計談し歸る松平信正氏より手紙來る

同十日陰朝別役大佐來る服裝見繕を頼みたればなり新式の服を着し試みたり道家氏亦來る別役氏歸り道家氏亦歸る廣瀬進一氏來る斯文會の事に付相談なり松平信正氏來る同様なり久留米中島武州氏來る政治談あり午後山田氏來る余の身前の事を尋ぬる爲なり高知より南邸殿、北代、平田兩氏の處分に付不平の由寺田利正氏より報知來る意外之事なれば直に箱崎邸に行く皆不在なり寺田氏の手紙へ添書を爲し差置き歸る明日の準備にて市中旗及提灯、緋門杯賑々敷夜島村勇氏來る福富氏亦來る

各小酌福富氏先歸り島村氏次而歸る天氣よろしからず昨夜光妙寺三郎氏著述の決闘定規を讀む二回なり末に三浦氏及余の談話を載せたり三四ヶ條意の通しがたき所あり質疑せんと思ひ付箋す雨降る

同十一日午前二時頃より雪と成る寒甚し七時より參内賢所參集所へ參集す寒氣益々甚し雪亦頻りなり八時過に至り 神殿の傍に集合す各椅子に着く此時議官某云森大臣刺客に遭たるの風聞ありと窃に思ふ過日大學校の同大臣の演説には生徒大に激昂せし由なれば其中過激なる者の所爲ならんと御親祭御濟に成り各自拜禮して徒歩にて裡道通り正殿へ詣むる各大臣公爵勳一等の者前面に整列す夫より以下順に後へ列す御手づから憲法を總理大臣に御渡しに相成る此前に勅語あり 皇后陛下にも右の方に御侍立なり御式全く終り一統退散雪天なれ共觀兵式ある由通知あり余熱海の暖地より歸り速に此寒に遇ひし故腹部をそこない下痢致したる故觀兵場へは得參集せず夜七時より再び參内御陪食被仰付舞樂拜觀あり御食堂も大臣以下勳一等以上及婦人は 聖上御テーブルと同卓なり御陪食相濟みて舞樂拜見いたし候當夜は久振に各大臣に面會し又勝氏に面會して種々談話あり他日閑話を約せり舞樂は未だ尖に候得共九時半頃と思敷頃退出す宮中は大概電氣燈にて殆ど晝の如し歐州の宮殿にもをさく劣らずと思はれたり扱今朝森大臣遭難の理由は曾て評判ありし森氏か伊勢へ參り神廟へ不敬を致したる事に源由する趣松方大臣の話を直聽せり兇行者は山口縣人にて其主旨を書せるものをも所持せりと云ふ其の云ふ處決して狂氣の沙汰に非ず至誠より出たるものにして一朝夕

に發せしに非すと云ふ中の書に云へるあり曾て大臣が 神廟へ不敬の風聞あるを以て事實探偵の爲態々伊勢へ行き取調へたるに少しも風説と違はず事實相違なし今教育の大任に當る大臣にして如此所行ありては後世の大害なれば誅戮を行ふと云ふ様な意味なりと云ふ隨分深手にて腸は破らざるも血管を切斷し筋の所在を未だ得尋ね當らざれば血を止むる不能との咄なり河村氏側にて生てもしかたかない死ぬがよいとの冷言狂言か正言かを知るに由なし果して伊勢の舉動信なりとせば昔時なれば神罰とも可申恐るべき事なり森氏に取りては不幸なりと雖も 皇室の尊嚴に對しては一増鞏固を加へ生意氣なる洋學者の膽を塞から令むるに足るべし何にせよ明治の史に大特書的事件と云べし今日寺田氏より書狀來る南郎の都合よろしとの報なり

同十二日晴暖氣なり本日は府民の請願を被爲開召市中御巡廻被爲在櫻田門より外務省前御通禁幸橋より大通を上野へ御通行華族會館に御息休夫れより和田倉門通還御の由致滿、芳も拜觀に出る余は昨朝來の不氣持故華族會館より通知あれ共得罷出ず朝弘氏來る南郎の御不平之事に付てなり吉田數馬氏より學校之事に付書面も來る淺野氏來る暫時談話して歸る格別の談話もなし熱海一別後余か身の如何を尋るの主旨に外ならず本日新聞紙に森氏の事を載す大同小異なり兎行者は山口縣人西野文太郎とて或省之雇吏を爲し居る者なりと云へり本日は昨日の餘波に而市中の興業賑々し午後四時頃柴四郎氏來る小酌八時頃歸る

同十三日陰弘田正郎氏より手紙來る板垣、後藤兩氏合體之説に就ての質問なり國友氏來る午食を喫して歸る電報にて弘田氏を喚ふ過日元田氏之事もあれは種々相談すへき事あれはなり夜俱樂部にて佐々木高美氏を招き歸朝を祝す

同十四日晴朝仁尾惟茂氏來る小野道一氏を三菱社に使ひ呉れまじきやの相談あり同社は舊來の使ひ來る者の多ければ六ヶ敷かるべく候得共同社の者へ相談は可致を答て返へす長崎人西田龍太と云ふ者來る漢學書生然たる男也海江田氏の所へも出入するものと見へたり應答の際先つ天下の急務を問ふ杯漢學生の口調なり暫時談して歸る新潟縣の者にて佐藤孝一郎と云ふ者來る曾て書を我に投し何か申立てたる事ありと云ふ蓋し書生に置き呉れよと云ふ事なるべし今日は別に其れ等の談もなし北海道へ行き何か事業を求むるの談ありし而已にて歸る近日佛國より歸りたる伊久原某來る彼れ滿三年計佛國にて修行せし由なれ共學費積かさざるがため歸りたる由なり此男は崎山金八と云ひし人の孫にして母人は余と同年にして同町に住し人なれば昔は心安き人なり暫時にして歸り豊川良平氏來る同氏は近日三菱社の銀行頭取と成りし由來意は岩崎彌太郎氏より斯文會へ寄附金に成りたる分委托金と成りあれは歸し呉れる歟と云ふ掛合なり事の結末を内々余に相談の爲來るなり余此金の性質及彌太郎氏との相談との趣を談し孰れ廿三日斯文會の集會あれは篤と相談の上可相答とて別る種々彌太郎氏生前の談あり午後黒川中將來る歸り伊勢の縣會議員天春文術、平田力之助の兩人來る種々

談話中へ古莊氏來る兩氏歸り古莊氏亦次て歸る田所氏豊景様御學問の成績の事に付相談あり先成績の宜しき方を只身體の弱きには孰れも御氣遣申所なり今日の如く人に應接しては根氣も續き申さず實に閉口なり

同十五日陰朝久留米横枕覺助、中村彦次、土屋新三郎、蒲瀬瀧千氏等來る種々政治談あり筑水會の團體にして同志の人等なり横枕氏は當時山梨縣北巨摩郡長たり此人久留米の舊勤王家にして明治三年の頃古松備次氏等と長州の脱隊に關係して所刑せられし人なり會て其の名を聞く初て其の人を見る凡物に非ざるを知るなり談笑にして高知の書記官山田爲暄氏來る日比書記官の手紙を持參せり暫時對話して歸る夫より横枕氏等と十二時頃迄談し皆歸る午後より勝安房氏を訪ふ去る十一日の夜殿中にて會せし時岡本黄石翁の余と知るの事よりして黄石翁の非伊家の爲盡力せし忍堪力の可感を賞賛し翁の行事探るべき事多きを叫せり余翁と閑話の約ありし故來る十七日を以て催さんと欲し勝翁も暇有らば來會せられんことを乞ふ爲なり翁余を書齋に誘ひ病氣を勉めて維新前よりの經歷談あり水野越前守の人傑たる事幕政改革に容堂公御關係伏見にて幕兵敗軍後江戸景況の事佛國より八百萬圓借入金違約と成りし事江戸城にて評議の事杯縷々談話あり余亦現今の國事及維新前後の艱難に當りし古之物語を爲し談大に熱せり翁使を馳せ岡本黄石翁を呼ぶ翁亦直に來る午後一時頃より五時頃迄話し辭して歸る夫より日本新聞社の案内により中村樓に行く佐々木高行、淺野長助、井田護氏等來る會するもの都て二百六七十名なりと云ふ誠に盛會なり十時頃歸る

同十六日陰寒し松本豊多氏來る薩人某三菱に係る苦情の事なり林鑿臣なる者來る神道を以て一神教と爲し大道會なるものを創立して國基を保護せんとの主旨なり蓋し神道を本としてユニテリアン宗を開く考へなるべし其の考の本も亦ユニテリアンの教義を聞き思付たるものと思はる余に會長と成りくれよとの事なり余拒絶す決して成就すべきの見込なし午後客時三十分頃より森氏の葬式の爲め青山墓所に行く盛なる葬儀なり嗚乎人孰か死せざらん而して 太廟に不敬と云ふを以て刺殺せらるゝ森氏の末路實に人間不幸中の大不幸なり人亦之を冤罪なりと云ふ者なし却つて之を神罰と云ふもの多し古人云ふ民の好む處は之を好むと是れ人は勉強せねはならぬものなり己れ好まずとて人の好み大切にする所の物を輕蔑するは其人に對して不敬なり寺に行けば寺に敬禮し社に行けば社に敬禮するは猶ほ人の家に行き其の主人に敬禮すると同理なり況や我が君と仰き奉る 皇室の御先祖様に對し奉り帽をも取らず土足にて社階に登り杖にて御簾をはね揚ぐるか如き舉動あらば誰か其の不敬疎暴を尤めざらん況や教育の大任を受くる人に於てをや余思ふ森氏決して惡人に非ず又故意に爲せしものに非ず畢竟卒直にして敬愛の念に乏敷より偶然此に至りしなるべし是れ身を誤るの根源と成れり午後四時より武官會を俱樂部に催す豊景様御同道にて行く山地氏以下四十人計來る山地氏の求めにより二十三年後武官の本分を一言せり山地氏亦諸士へ忠告の言あり八時頃歸る



同十七日晴風強し今井延彦氏來る同氏は伊勢の人にして敬神家なり結城神社創立の事に付川口常文氏等と與て力ありあはび濱の贈物あり木場常久、緒方小太郎氏等皆伊勢にあり 神廟に奉仕す余の意向に従ひ國事に從事せん事を申し來る木場、緒方兩氏熊本にして九年の暴動の砌生残りたる頭株をり木場氏は曾て而會せし事あり緒方氏は未だ而會をなし木場氏の父七十歳の賀の爲め余に一筆を乞ひ來る余近來書を謝絶せり然るに本日近衛陸軍下士輩の求めに依り某小學校の額を書するの用意せる所なれば承知したり今井氏歸り山川浩氏來る余か身前の事に就てなり余を文部に推んと欲するの意あるか如し余の政府と相容れざる冰炭の如し決して行はるゝ事に非ず笑つて寺島氏を推すべしと答たり吉永正徳氏來る氏は和歌山縣の裁判長なり徳實舊の如し直に歸る山川氏亦續て歸る額字を認む龍駒風雛の四字なり又木場氏か爲めに豊壽の二字を書す午後山梨日々新聞の某來る今日は勝岡本兩老人來會の約ありは暫時面會して歸る丁野、勝氏來る時に三浦橋樓氏來る暫時對話昨夜熱海より歸りたりと云ふ氏は森氏の刺客西野と和識の事と見へたれば尋ね見るに頗る其の沈着にして志の厚きを賞せり山口縣の勤王を以て起り不勤王を以て終るを歎息し三浦氏を勸め國に歸り士氣を振興せん事を忠告せし事ありと云ふ今日は老人を會せし事なれば不得已三浦氏を斷りたり二時頃より黃石翁來る又長屋重名氏來る勝翁和宮及び天章院の爲人及び維新の際の有様等を談し耳新しき事多し廣井燦之助氏復讐の事に就き勝翁の頗る助力ありし事岡田伊藏か爲に危難を免かれし談等は耳新

しき事なり曾て京都にて勝氏を暗殺せんと斬て掛りし者ありしを伊藏、勝氏に隨從して側より彼の者を斃し他の二人は遁走せりと云ふ伊藏數人殺し後藩卒にて斷頭せらる舉て言へき事なし只勝氏を救ひたる蓋し一生の美事なるべし勝氏幕士にして勤王浪士及徳川浪士等の間に立能く危難を免かれ朝廷と幕府の間を調和せしは抑も才智の士と云べきなり土佐の海援隊の徒は多く勝氏を信せしなり夜八時頃に至り諸老皆歸る

同十八日午前六時頃餘程強き地震あり天氣は頗る快晴なり樋田魯一氏の紹介を以て佐竹義生氏の家扶大細久雄氏來る義生氏教育の事等忠告に預り度との事なり諒鏡院様と申すは同家の後家様にして山内家より御入興の御方にて故豊範公の御姉様にして當豐景様の御叔母なれば此御方へ余より申上呉れ候様との頼なり同家は多年家政困難の事多し舊臣の心配するも亦宜なり古莊氏來り彼の金請取りの事の談あれは福富氏に手紙を認め古莊氏に渡す柴四郎氏の紹介にて長崎鎮西日報社員久住呂藤太郎なるもの來る日本同感の人なり九州の大會に出張の含にて明後日出發すと云ふ井上寅之助と云ふ者來り細君へ面會せしよし申來る來客多きか爲斷る高知縣高橋簡吉、徳弘馬城郎と云ふ者來る是亦同断なり山川氏來る余の身前の事に付ての事なりとてもならぬ相談なれば勞する事勿れとて別れたり午後五時より壽美屋に於て而出京之地方官、裁判官及在京之幹立たる者の集會あり出席す九時頃歸る

同十九日晴早朝西村亮吉氏來る廿日出帆の由に付暇乞旁なりと云ふ余の身前の就職勸告なり山川  
 浩氏の談と同じ趣もならぬ相談なり仁尾惟茂氏來る西村氏談話中に付面會を斷る黒田太久馬なる者  
 來る言語取調所首唱者なりと云ふ此人ボワソナード氏に就き佛學を修め日本古典の必要なる事を感じ  
 し近來日本語の本たる古典を調へ古道の眞理に適ひ勤王の本源も古道により發達せざれば眞正に非  
 すと云ふの大意なり其の人多辨にして未だ眞意のある所を測知し難しと雖大體に至りて頗る聞くべ  
 きものあり平戸人井上寅之介氏來る過日兩三人と來訪せし事あり其の節北畠親房卿の正統記を筆す  
 るの圖を持參して贊を乞へり余諾して未だ書せず又詩數首及和歌を示す平戸に而は文學あるの人な  
 り同地方にて一つの團體を作るの目的にて略其の形を爲せりと云ふ長崎鶴鳴會と通し紫溟會と連絡  
 する心算なりと云べし其の主旨日本を基礎とし他を吸入するものにして即勤王論の進化せるもの  
 して余等か論旨に賛成するもの、如し絹地二枚を置き歸る福井鐵次郎と云ふ者來る富山縣の者にし  
 て爆發藥を製し暗殺を謀りたる罪にて入牢せし所今般の大赦に出獄せりと云ふ甚だ迂參なる男にし  
 て信し難し遂に金子の惠興を乞に至る余親友知己の外一切施與せざるを以て斷る甚だしつこくねだ  
 れ共與へず遂に其の不成を知り歸る昨年夏來り余に面會せし事ありと云ふ余人に接する多し未だ彼  
 れに面會せしを覺へず言語動作頗る可疑人物なり午後沖本忠三郎氏來る甥沖本病氣に付入院の筈な  
 れは見舞旁來れるなり川田剛氏來る廿三日の斯文會に缺席の由申來る島村千雄の支那記行を一讀を

乞て渡す四時頃より箱崎邸の集會に付行く神山、細川兩氏而已なり幡多郡土地の事大眼目なり八時  
 頃歸る

同廿日晴朝高知縣坂本直寬氏及某來る是は保安條例に觸れ入牢せし者にして片岡、西山兩氏之手  
 紙を持ち來る片岡、西山二氏の手紙は訪問すべき筈なれ共刑餘の身なれば遠慮して罷出不申との挨拶  
 の文なり暫時談して歸る辻維岳氏來る同縣某等余に面會を乞ふ紹介之爲なり午後四時頃より山王  
 茶寮之會に付行く細川、清岡、岡山、南部諸氏及名古屋裁判長等來る七時頃歸る福富、古莊氏等來  
 る日本の事なり古莊氏は先づ歸り福富氏十二時頃歸る

同廿一日晴朝辻維岳氏より手紙來る同縣人今朝九時より三名來るに付面會を乞ふの文なり午前七  
 時半頃廣島人石井樸堂氏來る氏は淺野家の家老にして老人なれ共元氣あり過日日本宴會の席に面會  
 會せし人なり時政談熟して歸る辻氏紹介之三人戸谷正寬、多田寬、渡邊又三郎氏等來る余の意見を  
 十分申聞せり皆異論なきが如し渡邊又三郎氏は縣會副議長常置委員代人なり此の三人は見込ある  
 人物と思はる十二時頃迄談し歸る午後井田讓氏來る時事談あり山地氏亦來る暇乞なり井田氏歸り柴  
 氏來る山地氏亦歸る柴氏は自身國會資格の談あり余成る丈今から爲すべきを談して別る小笠原清秀  
 氏來る此の人は古術の家の小笠原氏なるべし來客中に付斷る少將渡邊央氏來る青森の旅團長なり島  
 村千雄の身に付懇談あり暫時して歸る福富氏金を持ち來る余は來客中なれば斐應接して金を請取る

古莊氏來る即ち金を渡す柴氏の咄に鳥尾氏に面會せしに淺野氏及余との間不熟なるに付仲裁せよとの意也と云ふ鳥尾氏余等と絶ち藤田氏等と保守中正黨なるもの設立す然れ共人之に同せず黨の名あり實なし後悔の意ある殊勝の事也鳥尾氏方に任せ自ら縦に信義を欠く事多し余不才只信の一事は墨守して失はず之れ人の多少信を置く所以也今日高知縣吾川郡長大脇之治氏來る來客中に付斷る彼れ近來の舉動疑ふべき事あり蓋し要路の鼻息を仰くもの、如し今日吉永良吉氏歸任に付暇乞に來る同廿二日晴三浦中將を訪ふ談鳥尾氏の舉動に及ふ昨日柴氏來り談せし事もあれは鳥尾氏も輕忽に友人を阻礙せしを悔るもの、如くなれば足下鳥尾氏と淺野氏等之中を圓滑なら合むるも亦可なるべしと言ひしに三浦氏云ふ余も春來面會もせず彼の男は舊來の友人なれ共兎角獨智に任せ熱談の出來ぬ性來なれば前途の事も頼み難し然れ共其の心を以て交れば別に害なき事なれば明日より熱海に行けは折を以て談合も可致との答也夫より談西野文太郎の事に及ふ三浦氏能く其の爲人を知る間に從て感涙に不堪事多し彼れ心に決する事已に久し而して事を果すに至る迄少しも言行に顯はさず古より刺客多しと雖も其剛膽にして智略に富み其の斷行の猛烈なる蓋し比類なかるべし實に鬼神をして其の壯烈に泣か合む彼れ尊王至誠に出づるの跡明かにして用意周到なる事の詳を審かにする事を得は一層人をして感激せ合むるに至るべし十時過歸る成瀬大城氏來る斯文會の不平及大道會とて神、儒、佛混交の宗教の如きものを作らんと欲する主旨を示し余か同意を得んと欲するもの、如し余の

其論旨の錯雜して貫かず往々近來西洋に説ある世界共和の主意に似たるあり不同意なるを申聞けたり過日來りたる日本の神道を獨一教と爲さんとする主旨書にも成瀬の名あり其の心軌にある歎推知しがたし成瀬書家而已學問もなく德行もなし如此事に關係するは大ひなる間違と言へし豊川良平氏來るを以て成瀬氏は斷りて歸へす豊川氏は斯文會へ三菱社より出せる金の事に付ての談なり孰れ明日の會にて相談の上可申とて歸へす午後三時頃山梨縣西山梨郡長八代駒雄なる者來る正義の者と思はるなり暫時談して歸る北海道廳成田忠平と云ふもの來る斷つて面會せず明後朝來る由なり五時より築地近源亭へ行く籠城會の例日なればなり行き掛九段坂の招魂社に詣つ本日の事を死者の靈魂に告るの意なり是迄はなかりし事なれ共當年を始めとして詣て幣物を供ふる事に一決せり尤も本年は幣物の事は氣つかざれば來年よりする事に今日の會樺山の氣付に付決せしなり七十人余の來會者なり頗る盛會なり余近年酒を節すれば杯酌に不堪八時過ぎ歸る今日弘田正郎氏來着に付訪ひ來る由也過日電報にて呼たればなり明朝來訪する由申殘せり乙猪も格別の事もなき由なれ共兎角掛々しからず困り入りたるものなり

同廿三日午前九時頃弘田正郎氏來る高知の情況を聞き又余か昨年以來就職の事に付ての行掛り及東京同志者の現況をも論示す高知の有様兎角事情通せず紛紜を生ずるは遺憾の至なり十二時後に至り弘田も歸る大脇、小野氏等の談もあり兩氏皆財政頗る困難の地にありと云ふ小野氏は固より聞知

する所なれ共大脇氏は富豪なる興之進の養子となり居れば少しも不自由なき事なるべしと思ひの外興之進の養子は離別に相成殆ど無財産之由蓋し養家之富を目常として他借散財せしより父子之間に信を失ひたるも、如し謹身養父に仕へは數萬の財産自然其掌中にあるものを一時の欲情を制する不能して今日之地に至る亦笑止の至なり窮すれば溢るとは聖人の言なれば二子の窮よりして溢し非義に陥らざるを希望に不堪なり午後四時頃より斯文會の評議會に行く岩崎氏贈附の金子の事及月に二回の講說會を開く筈に決す岩崎氏の金子は最初彌太郎氏の厚意に依り其儘据へ置委託金の帳簿を改め全く義捐之事は余より請求する事に約せり講談云云の事に付根本氏異論あり頑固事情に不通漢學者の無用視せらるゝ亦宜なり六時頃散し歸る廿七日支那公使の案内なれとも不參斷り出す廿五日楡垣直枝氏の案内承諾狀を出す

同廿四日晴北海道廳の成田忠平なる者來る青森の産なり當時神田專修學校に入學せりと云ふ露國シベリヤ鐵道及歐洲形勢等の質問あり未だ未熟の書生と思はる士官學校生徒原禎來る長野縣の者に於て曾て余に就て孫子を學ひし事あり本年の卒業なりと云ふ山岡氏來る小鳥を贈らるゝ也成田、原氏等皆歸る山岡氏午食を喫して歸る午後三時頃小野道一氏來る暫時にして歸る蒲生重章氏より手紙來る偉人傳の題詠を依頼する爲なり本日の時事新報に西野文太郎氏の兩親及弟妹并に友人に送る狀を載せたり余彼の事に付落涙する事已に廿二日三浦氏の宅に於てせり今亦其の手紙を讀て涙の潸然

を覺へす其の母に送るの書最も人をして感泣せ令めぬ彼の決死の是非は今日決して問ふ所に非す只一身を君の爲國の爲に犠牲とするとの精心に至りては實に賞賛すべきものあり歐洲の如き風俗習慣の異なる人より之を見れば必ず狂と呼び賊と呼べし如此狂賊は日本の名物にして歷史上實に避くべからざる事なりとす政治の局に當るもの死して遺憾なきの覺悟要用なり是か爲護衛巡查を増すが如きは笑止千萬と云ふべし今日中平重虎なる者來る山内家にかゝる幡多郡の地所の訴人なり余來客中に付不遇

同廿五日陰朝山地氏を芝札の辻の邸に訪ふ明日出發歸任に付暇乞なり品川少將及南亮助氏來る暫時談して歸り掛け寺島氏を訪ふ談西野の事に及ぶ寺島氏西野の斬殺主旨書を出し余に示す余先に已に三浦氏の宅にて原書を一讀す只原書には八日の日付にして別に辭世の作なし此の主旨書は紀元節前一日とありて辭世の絶句一首あり死せし時西野の首に掛け居りしものなりと云へは十日の日に認め候時詩一絶を賦したるものなる歟寺島氏の談森氏の親族婦人等の咄に森の死は實に神罰なり父の死せし時諸方より贈物ありしに贈物と返禮物との計算を爲せしに贈物より超過するとして返禮を止めたりと又父の墓へ參拜せし事なし位牌はあれ共拜せし事なく又祭りを爲せし事なし是れ眞に神罰なりと申し居る由物語あり終を慎ます遠を追はず其の跡に付考ふる時は 大廟に不敬を爲すも亦怪心に不足なり又宇佐八幡宮へ參詣の時も下乗の處より車を下りす不敬の事ありと云ふ敬神の意は毫も

なき事可知なり議現時の有様に及ぶ寺島氏云ふ伊藤、黒田氏等此の儘にては不可然を知る然るに自ら云ふ力不能不得已今日暮しに行ものなりと松方氏杯は國會にて攻撃して貫へは却つて改革も出来よふと云ふ意なるか如し蓋し案するに今改革を爲さば敵を内外に引受け自己の位地を保つ不能故に因循姑息正常の改革を爲す不能廿三年後に於て輿論の勢力に任ずの積りなるが如し他人は猶ほ可なり大隈氏の如きは野に在り頗る弊政を痛論しながら内閣に入ると均く他の諸員と雷同す實に驚き入りたる男なり強硬主義の外交政略余未だ容易に信する不能なり十二時頃歸る午後四時より檜垣直枝氏の案内にて行く來客は内務次官芳川、田中謙介、神山、岡内、岩崎彌之助、西村捨藏、川田小一郎、岩崎の支配人吉永、肥田某氏等なり食堂の設けは西洋風にして馳走は日本料理なり酌は赤坂の妓八九名なり諸人頗る興に入れり八時頃歸る

同廿六日雪霰雨交も降る古莊氏五千圓の請取を持ち來る野村氏入院あり歸りて後丁野遠影氏來る山内家々紀編纂の事に就ての談なり午食を共にし歸る三時柴氏より手紙來る金子の事なり徳弘氏に返書を認め令心余は華族會館に行く今日は伊藤伯憲法に就ての演説あればなり行けは已に初まり居れり大意封土奉還は憲法政治の道開にして奉還の事なければ憲法政治は行れず議院は二局を可とす一局なる時は黨派の爲に左右せられ危険の地に陥るの恐れあり二局なれば上院の性質下院と異なるものなれば一偏に傾くの憂ひなし下院の方は農、工、商の代理人なれば各一方に偏して國家全體の

事に注目する事少し上院は幹に貴族を以て組織するものなれば農、工、商の如き專業なければ一片に偏せず國家全體に注目すれば大に下院の偏を矯正するの力あり是本邦二局議院に決したる所以なり今後の華族は名譽の位地を保つものなり 皇室に密着するものなれば殊に邦家に盡すの義務ありと云ふの意の如し論旨頗る淺薄にして伊藤氏の演説とは思はれず折角の大會に適するの價値あるものとは思はれず一時間足らずの演説にて終り酒宴と成る立食の西洋風なり七時頃歸る道路頗る悪し同廿七日陰寒し午前九時頃波多野傳三郎氏來る佐渡の者にて舊幕府の頃國事に死したるもの殉難碑の篆額を依頼の爲なり余猥に書の依頼を受けず只公衆の事に關するものは敢て不辭即諾す同氏は改進黨中屈指の者なり現時勢の談あり又伊藤氏の縣會議長に對する演説及政府は政黨外に立つの説等余の意見を問ふ余は答ふ此事は暫時の間は或は行はるべし然れ共年月を経るに従ひ必ず變化を來すは火を見るよりも明かなり現に即今とも已に其の萌芽あるに非ずや大隈氏の改進黨に於る井上氏の自治黨に於る假令自分改進黨、自治の黨員に録し居ざるも然政府外に黨援のあるありて自己の位地を衛護するものは名は政黨外の大隈、井上氏等と雖も實は改進黨の大隈氏自治黨の井上氏たらざるを得ずなりと又官吏を衆議院に採用の可否に及ぶ余は思ふ五六年の星霜を経るの後に至らば左程の害はあらざる可きも當今の所は甚だ不可なるを覺ふ如何となれば現今は政府と人民との間大に利害を異にするの點あれば官吏の多數衆議院を占むに至らば政事改良の論は必ず敗を取り舊政墨守説

勝を制すべければなりと波多野氏曰く如何にも貴説の如し余も過日御同様の意見にて演説を爲せし事ありと云へり同氏歸り福本誠氏來る日本新聞記者なり昨日伊藤氏演説の様子を尋ぬ余其の大略を囁す小田小太郎氏來る神苑會の事大に好都合なれば余に評議員たるを乞ふ且つ云ふ有栖川宮殿下にも大ひに御賛成に付評議員を同宮殿下へ御招に相成會議ある筈に付余にも是非能出吳候様の断に付承諾の旨を答へたり二氏皆歸る午後より柴四郎氏を其寓居芝櫻田本郷町十四番地久保田と云ふ質屋の隱居家に訪ふ過日狂犬に噛まれ平臥の由に聞けはなり到る即ち左したる事にも無之兩三日経ては全快すべき様子なり熊本の高島義恭氏も參會せり暫時談じて歸る夫れより箱崎邸へ行き弘田氏に面會し小御邸へも鳥渡伺候す六時頃歸る有栖川宮別當山尾庸三氏より七日同殿下二時より參るべき様通知あり彼の神苑會の事なるべし今日留守へ楠瀬幸彦氏來れる由なり

同廿八日晴朝與並繼氏來る斯文會の事に付意見を述べ最もの事なり余篤と勘考すべきを述べ置き歸す高島義恭、紫藤猛、高橋長秋、國友重章氏等來る談去廿二日之熊本に於て各黨會議の事に及ぶ改進黨と稱するものも二つに分れ和愛社も二つに分れ鹿兒島の郷友會も二つに分れたる由なれば紫濱會には好結果を興ふるものなりと云ふ鹿兒島は一種の所なれば二つに成りたりとて當にならず然れ共改進黨と合ふ事は勢に於てなかるべしと思はるゝ也十一時頃皆歸る新潟縣平民佐藤孝一郎なるもの來る曾て面會せし書生なれば断りて歸す午後より明日鳥打に行くの用意致す丸の仕付面倒也

同行の山岡重助氏來る丸の手傳を爲す五時頃濟む山岡氏と小酌す

#### 第四章 記録二の二

三月一日晴朝六時半頃出發房州を指す午前七時より靈岸島より船に乗り保山、加地山等を経て午後一時頃北條に着す木村屋と云ふ旅店に投し午食して三時頃より近島へ小鳥打に行く同行は山岡重助氏なり此行は養生の爲山野を跋涉する含なれば獵の有無には關係せず木村を距る事十丁計の所に八幡村あり社あり八幡宮なり此邊に而十七發放ち十六羽を得たり五時頃歸る夜小酌縣會議員某千葉縣訓導某謁を乞ひ來る保養之爲來りたれば断りて面會せず

同二日晴八時頃より發し館山を経て南西の海岸に沿ひ潮見の松とて能く榮へわだかまる松ある近邊所々を奔走し午食迄に二十二羽を得午後より十一羽を得午後五時頃歸る今日の獲物合て三十三大出來なり

同三日雨なり九時頃迄眠る午後より天晴る八幡村邊へ行く三十一羽を得たり午後六時頃歸る同四日晴六時より八幡村へ出掛け九時頃歸る九つを得たり十時より乗船歸路に就く小蒸氣船乗組頗る多く雜沓甚し淀舟に乗るの思あり午後五時半頃靈岸島に着す直に車に而歸る山岡氏も來り共に小酌一日以來の獲物八十九羽を得大出來と云へし

同五日晴朝井野邊殿水氏來る自己身前之事新潟縣佐藤孝一郎なる者來る同人數々手紙を差越し詩及和歌を贈る今日は書を認むるを乞ふ余敢て辭す頗る懇望之由に見へ些と氣の毒なりし兩人同時に歸る弘田正郎氏來る議員撰舉に付金子入用之意見を述ふ余其方法之不策なるを論ず土佐は自由黨との競争より多年の入費あり今日に至り孰も困窮に付黨勢を張るに困難なる事情あり云ふ所一理なきに非ずと雖も要するに姑息之策に不過十二時食後に歸る後藤象二郎氏來る時事談あり續而余か身前之事に及ぶ伊藤、黒田兩氏に面會之談あり同氏例に依り咄甚面白し只其の事眞歎偽歎受取り難き事を攻撃するものすら入閣を勸むる事なれば足下か入閣は最も容易なるべしと云ふにあり三時頃歸る小野道一氏來る暫時にして歸る弘田氏同一之考なり夜村田氏來る鳥打の談あり十時頃歸る

同六日晴朝淺野氏へ行く三浦氏も來り合す學習院學資金を命令にて嚴達せし事に付華族中異論ある由就ては命令を取消すの相談の趣きなり暫く四方山の談話して歸る路に豊川良平氏を訪ふ不在なり午後より刀の手入を爲す

同七日福富孝季氏の紹介にて坂田傳藏氏來る同氏は久留米の人にて現時文部省圖たりと云ふ好物と見へたり暫時談じて歸る今井延彦氏來る近日伊勢へ歸ると云ふ木塚保久氏の父の七十賀の爲書を認むるの約ありたれば右受取り勞なり豊壽の二字を書て與ふ林聖臣なるもの來る是は先日神道大

道會なるものを設立の事に付來りたる男にて耶蘇教の主義に倣ひ一派の神道を創立せんとするの主旨なるか如し不同意の事なれば即席に斷りたり今日は來客を以て面會を斷る書付を差置て歸る言文一致速記會と歎を諷るに付會員に成り呉れよとの事なり當時流行の會社山師なるか如し寺島宗則氏の紹介書を以て薩人東郷重持、寺師宗徳、市來四郎、追水久中の四氏來る東郷氏は島津家の家令追水氏は家扶なり市來氏は島津家の近世史を編纂に従事せる人なりと云ふ今日は二時より有栖川殿下へ參殿の筈に付暫時談して斷る四人皆寺島氏の説を聞く者の如し仍つて轉して余の説を聞んと欲すものと知れたり皆正實なる人にして共に談すべき人と思はるゝなり二時より殿下へ伺候神苑會の事に付御相談なり土方、佐々木、副島、佐野、吉井氏等を首め十四五名なり一同會員たるを囑托なり就中四五名を委員に命せられ會長は吉井氏總裁は殿下の御受持と申事なり種々評議の上食事を賜はる皆立派なる議論にして間然する所なし蓋し西野文太郎の力與るありと知るべし六時頃歸る村田氏より雉子打同行の誘あり十一日の會あるを以て不得已斷る

八日晴朝寺島氏來る不相變壯論なり昨日島津家令扶來りしを談す寺島氏云ふ彼等も幾分時事に志あれば能く談しもらひたし彼等も少く志あり一の團結を爲んと欲するの志あれば多少の益あるべしと思はるゝなり例の通日本經濟論ありて歸る古橋源六郎氏來る氏は三河の國の老農にして頗る有志の徒なり意見奮の如く誠に快男子なり會而勢州に而認めたる拙書に印を捺せん事を乞ふ爲拙書を携

へ来る暫時談して歸る濃州岩村産の小島の糖漬を贈らる午後柴四郎氏來る豊川良平氏來る次而山梨縣西山梨郡長八代駒雄氏及同縣八卷九萬兩氏來る豊川、柴二氏先つ歸る次而八代、八卷氏等も亦歸る八代氏書の依頼あり絹地二枚を置き歸る諏訪重中氏來る谷村計介之像を彫刻する事に付相談之爲なり薄暮歸る

同九日陰廣瀬進一氏來る斯文會之事に付十一日の會に巡查を雇ひては如何との事なれとも余それには不及と答ふ成瀬氏來り暴言を吐きたるに付心配の趣なり黒田太久馬氏來る言語取調之事に付て也古橋源六郎氏來る樋田氏を三河の地方より國會に選舉しては如何との相談なり先同人の意見を聞くべしとして歸す元田永孚氏來る又々先般來の談の再燃なり篤と勘考御返答可申として歸る子爵日野西光善氏來る一昨日來り豊國公墓地改築の事に付而の相談なり元田氏來談中に付斷る京都の陶器を贈らる陸軍歩兵少佐相良長發氏來る右は薩州の漁民吉田某の兄十年頃三菱社の船に損害を受けたる苦情の依頼を受け余より岩崎氏に談しもらひ度と云ふの意なり先つ證據と成るべき確證を得て後に非ざれば不能とて篤と元を調ふる筈にて歸る淺野長勳氏來る學習院の事に付相談あり又廣島へ近日行に付同地の者に政治方向を示すの主旨書を示さる大概同意なり二三ヶ所意見を述べ淺野氏も改むる意なるか如し學習院之事は三浦氏と猶は談すべしとして別る三時より華族會館に行く佐野氏の演説ある筈なればなり行く已に終りたる所なれば暫時談して歸る歸り掛けに東京共進會場を見物す未だ整頓せず頗る半途なり本郷眞砂町奥並繼氏を訪ひ暫時談して歸る朝野新聞去る七日を以て發行停止せらる『日本』亦同日發行を停せらる嗚乎亦階なり政府の舊態依然として改まらざる知るべし

同日陰朝三浦氏へ行く昨夕淺野氏より手紙を越し學習院の事に付申越したる事あればなり暫時談し箱崎邸に行く弘田氏に面會明日の會に遅刻する事を申述へ多少之意見を述べ置き歸る勝安房老人よりの手紙來る病氣に付不得已手紙に申述るとて余の出身を勸むるの文意なり余復書して筆紙に而は答へがたきに付不日參りて委細之答可致旨を答へ置なり

同十一日陰寒氣強し朝林麴臣と云ふ者來る過日大道會創立の賛成を乞ひ來り再び言文一致速記法創立會を賛成し呉れ度き由申來る余皆謝絶す黒田太久馬氏等か言語取調會杯は不同意之由に付余は黒田氏等の立義を賛成するに付足下等の方を賛成する不能と答ふ不平の様子なり樋田魯一氏來る明日より大阪地方へ行く由なり又福岡縣豊前國田川郡長熊谷直候氏余に面會いたしたとして紹介を爲せり余何時でも面會すべきを通ず古橋源六郎氏、樋田氏に三河の國會議員たるを勸めし事の話あり樋田氏は舊里よりの撰擧なれば兎も角も他縣にて遽に地所を求め議員を争ふは心に安んせざる事なれば斷るとして辭したりとして歸り道家齋氏來る海軍省の改革にて非職になりたれ共西郷氏より別に使ふ處ある故其の心得にて居るべしとの話ありと云ふ余も勉強従事すべきを勸む古莊、柴、弘田氏等來る余の身前に付旅行の事を忠告す余未だ容易に答ふる事不能兩氏先去る弘田氏居残り土佐の事



杯話す又佐々木氏高陽會の事に付不平の語ありとの話あり午食を共にし牧牛會社へ拂込の金六十圓を同氏に托す又別に三十圓を今度來りし旅費として渡す辭す強て渡すなり明後日船にて歸るに付おまつの衣服を托す午後一時頃歸る二時半頃より斯文會の年會に付出席す成瀬溫氏不平の論を持ち出す余議論の衝に當り應接す三時半頃より廣瀬氏諸報告を爲す松平氏會計の報告を爲す成瀬氏突然として不平の意見書を讀む終りて余一々不平者に自己の不行届を謝す是より勉強して力を盡すべきを述べ次で詩經の小戒の篇の人情の正を得たる事を論し論語の小子何莫學夫詩矣の意は全く人情を知らべきを示されたるものなるを論じ孔子の其れ恕乎と被申たるも人と我との間に情と云ふ事の必要なるは恕乎と云はれた言葉に而も分る事を述たり恕の字はをしかると讀て我のいやな物は人にもすゝめす我的好む物は人にもふるまふと云ふの意にて是れ自然の情なる事を論し社會に情と云ふ事の最も肝要なるを論じたり又中村敬宇氏は論語の禹我莫問然の篇を題として節儉の必要を説き昔の經濟も今の經濟も同様の事なるを説いて英の經濟學者アダムスミスの説を引き證據とせり結局儉徳の美を賞せり高島氏は易談に托して印幡沼の開墾の事を説けり重野氏は史編の注意の事を論じ史記孔子弟子傳の誤を説けり六時半皆散會せり百人餘の集會と思はれたり成瀬氏の狂論も格別の効用なきを覺へたり今日福島縣警城國菊多郡大林村百六十二番地住龜田章氏よりの添書を持ちし小林巖次なる者來る今日は斯文會年會出席に付取紛居り候故明朝來るべしとて斷る留守へ福島氏來りし山

なり龜田章と申は鋤と云ひし人にして安井翁同門の人なり

同十二日陰國友氏古橋氏の親戚なる三河人二名を同道し來る「愛知縣三河國南北設樂東加茂三郡公設種畜場長古橋義周、同係後藤治郎八」右の二名は牧馬改良の事に熱心なる由現今實業に従事し居る由なり余同種改良の利を説き歐州見聞の概略及學者の説を略論せり又福富氏來る高知より出す議員の事に付談合あり余も同氏等の意見を賛成せり十一時頃皆歸る午後三時頃より佐々木高行氏へ行く余か身前の事に付元田氏より話の答を佐々木氏に依頼する事高知より出す國會議員を高陽會立志社兩方より協議にて二名宛出すの議を賛成を得る爲めなり佐々木氏は同意なり今朝福富氏の來りし事即是なり五時半頃歸る雨降る今日留守へ海軍大軍醫高安知明と云ふ人城山之碑と云ふ四字を書せんことを乞ひ來る由なり

同十三日雨朝高安氏來昨日の碑の額字請求の爲なり他に詩作の求め共斷り四字丈は是を諾す日野西光善氏來る豊公墳墓修繕の事なり金十圓を義捐す山内家の出銀の事も依頼ありたれば先日會議に出せし所百圓出す事になりたれば右の趣を答へ記名を乞はれたれば余豊景公に代りて御名を記す印章は家扶より受けらるべしとて歸す小野道一氏來る弘田氏も今日歸ると云ふ土佐より撰出の議員の事も彌よ協議する事に決せし由なり當方よりは弘田、大石兩氏を出す事の由也午食を喫し歸る水戸行の勸めあり余も其の志あれば十六日都合次第に行くべしと談す午後二時頃より勝氏を訪ふ過

日の手紙の答旁なり同氏病床にあり差したる事には非ず余の出身勸告の談に及ぶ流石に勝氏は余に樞密院へ出でよとは云はず是非文部へ出づべしとの事なり過日後藤氏來り談せし事と峯同様の事なり其の言に依れば政府も愈今の儘にて維持の出来ぬを知り余を入るゝの決心ありと思はるゝなり余を愈内閣に入るゝの決心ありとせば勸考すべしと答へ置きて歸る山岡鐵太郎氏子息の來り合せたるあり余に先て歸る又西正度氏來る勅任判事なり歸宅すれば元田氏留守宅へ來訪の由なり夜同氏の手紙來る愈余の出任を催促の主旨なり明日來る由なり文意によれば後藤、板垣氏等をも追々引出す内閣と思はる先づ余を出さんとこの事兼而より 聖上の思召もあり愈急に成りたるものと思はるゝなり

同十四日晴陰不定古莊氏及國友氏來る後藤氏出仕の事に決意なる由に付余の様子を問ふ爲なり余亦昨日勝氏へ行き及元田氏來りたる由を述ぶ亦昨夜元田氏より來りたる手紙を示す已に御斷は出來ぬ事に成り居れば都合好く又延期より外策なしと思ふ旨を話す國友、後藤兩氏より聞きたる話と後藤氏來り話せし所と左したる相違なきが如し古莊、國友氏等歸り元田氏來る直に面會す元田氏是非出仕の事を勸告なり又云ふ出仕するにも自身の孰れの所なれば就職すべしと云ふ意見も可有に付其等も内々承り申度しとの御事なりと云ふ今日に至りては樞密院は平に御免を蒙りたし余も一旦内閣に入りたる者なれば樞密院創立の時被爲召候はゞ格別已に内閣員外の諸人座を占めたる後に至り突然其の末座に座するも榮譽に非ずして恥辱なれば御斷申度若し内閣へ入るの御評議なれば又別の問

題なり然るに是迄の様子を以て見る時はとても余が入閣したるとして長持ちする筈なし入閣否同僚と風波を起す時は却つて御心配を益すものなれば寧ろ御採用なき方可然又出仕する時は先黒田氏に面會して前途方向の大意を打合せ凡そ同意なるに非れば御受するもための事に候へは兎も角黒田氏の意見を聞きて後に非れば容易に御受難申と述べ元田氏も尤なりとて歸る午後二時比より柴氏來る元田氏來りたる結果を聞かん爲なり柴氏は出仕を勸むる方の意なるが如し後藤氏も已に出仕に決するものゝ如しと此の間策略多ければ容易に動くべきに非ず先元田氏に答へたる事を以て答ふ直に歸る三時比より芳子を連れ神田神保小路邊へ買物に行く四時半頃歸る林務官南部義壽氏來る廣島に在勤の由なり夜福留氏來る土佐行の事先見合の事なり

同十五日晴古橋氏及湯本の福住正兄氏來る又古橋氏同姓其他二人來る余が乗馬を贈る筈に付請取の爲なり「此日余が乗馬を種馬に古橋義國氏に贈る」古橋氏婦人申合の積金簿の題字を乞ふ直に書して興ふ無近憂の三字を認む其の意遠き慮りある故決して近き憂なしと云ふ意也古橋氏本年一月建議せる文を示す大神宮及熱田神社を宮内省の直轄と被成度との主旨頗る正論なり又一の草案を示す宮内省の定額多きに過くるは御爲ならず御儉約被爲在慈善を下民に御施被遊度との主旨にして余輩の兼而考ふる所と異ならず小野道一氏五味卯三郎と云ふ者を同道して來る西南頃福岡縣の警部を勤め居りし者なりと云ふ宇都宮産と云ふ古橋、福住氏等先づ歸る次て小野、五味氏歸る斯文會員永江

斐氏来る老人なり越中に斯文會を起せし人にして漢學者なりと思はるゝなり別に意見あるに非ず暫  
時話して歸る午後二時頃より長屋重名氏を訪ひ明日水戸行の同行を促す明朝上野に會するを約し直  
に箱崎邸へ行き弘田氏に面會し日野西氏來り山内家へ依頼する事を話す四時過歸る柴氏來る次で高  
橋、古橋、國友、福富、千頭、小野、陸氏等來る孰れも後藤氏の此度の舉動に不満甚し余は固より  
後藤氏の信するに不足を以て最初より政治上の事を議せず彼れ先日來り余に出仕を勸むる時政治論  
を聞く事初めてなり其言も敢て深く信せざれば意にも止めず故に今日後藤氏の最先に出仕を約する  
が如きも又怪ます畢竟國の爲めに盡すの心なく政黨を器械にして己れが位地を争ふの心而已と思へ  
ばなり是亦一の井上氏なり大隈氏なり其の旗下亦利己主義の徒多し固より吾徒に非ず淡泊に交りて  
可なり余は只出仕して益ある見込あれば出づべし出づる上は諸友に對し面目なき事は致すまじ然れ  
共後藤氏杯の出で伊藤、井上等と聯合する上は内閣の纏り付くべくも思はざれば傍觀の位地にある  
を最も是なりと信するなり來會の者の意も亦同意なり十時比散會す吳文聰と云ふ人來る來客中を以  
て面會を斷る留守中に副島種臣氏來る由又東京新報社員五十嵐光彰と云ふ者來る由なり

同十六日晴早起水戸に赴かんとて上野の停車場に行く同行を約せし長屋重名氏及沖本忠三郎、小  
野道一氏等已に來會す六時三十分の汽車にて發す小山停車場にて車を替へ結城、笠間等を経て午後  
一時比水戸に着す先づ鈴木屋の支店に休息し其より案内者の指示する車に乗じたれば余等は鈴木屋

へ行くの心得の所何んぞ圖らん本日祭禮委員の誘引により借樂園の麓なる三層樓に伴はる此所にて  
食事を終り祭場に臨めり知事安岡宗則氏懇に接待す徳川昭武氏も來臨なり氏は舊水戸藩主なり本  
の主席の客たるなり祭事終り各禮拜を爲す余も幣金五圓を玉串と共に捧げたり祭場は借樂園中の家  
屋にて舊時の茶屋なり場内には先生の筆跡を陳列する事數十幅なり園中老松多く又梅花頗る多し都  
下にて見得る所に非ざるなり鑿劍及中學生徒の放火演習あり隨分の賑ひなり夫れより弘道館及城中  
を見物し下町を経て歸り知事の案内にて其の別邸に行く徳川氏も來る當地の謠家來り烈公御作に係  
る要石と云ふ謠一節を聞く益々昔時士氣の振ひし偶然に非るを知るなり十時比歸る食後寢に就く

同十七日晴食後市中見物す縣會議員飯村彝氏同行案内す市端八幡宮の境内眺望佳なり夫れより安  
田知事を訪ふ直に酒を出し及刀劍を出し余に示す格別の物とも思はれず暫時談して歸る今般祭事の  
幹事矢田登及委員の堀三三郎の兩人最も周施す矢田氏書を余に乞ふ數枚を書す午後二時十分の汽車  
にて歸途に就く知事及書記官藤田健氏を始め始審裁判所長尾崎房豊氏等送り停車場に來る此行面會  
せし人十五六名なり車中往來共に城多董氏に會す歸宅は午後八時比なり古莊氏手紙來る愈後藤遞信  
槓本文部に轉する由余身前或は宮内に入るゝに非ざる歎の疑ありとて意見を問ふ爲の書なり余は孰  
れにても目的の定まらざる時は猥りに動かすと答へ置きたり小酌後寢に就く

同十八日晴奥州泉の人龜田錫氏の甥小林某來る龜田氏は安井翁同門人なり今日を病むと云ふ暫時

談して歸る古莊氏來る高橋氏の事に付淺野氏に談合を依頼し來る午後より淺野氏を訪ふ道に行合ふ淺野氏も余を訪ふ積りの由なれば淺野氏は車を返し歸宅過日元田氏來り談合の始終及余の元田氏に答へたる逐一を談す且談後藤氏出身の事に及ぶ後藤氏今度の出仕進退共に據を失するものゝ如し就職後の困難可思とは淺野氏も同感なり古莊氏より話しの高橋氏の事に付き淺野氏への談合は熟せず淺野氏を辭し三浦氏に行く三浦氏も亦余が宅を訪ひしより只今歸りたる所なり話亦後藤氏の事に及ぶ且後藤氏の集めたる大同團の事に及び余に其の後を治するの可なるを言ふ井田氏最も此の事を主張すと云ふ若し余にして之を爲すならば三浦氏も共に盡力すべしとの話あり然れ共余は休職武官の事にして法律の許さぬ事なれば敢てせず只國家の爲同志の士と力を國事に盡し彼の不正不道の徒を暗々裡に匡正するは死に至る迄變せぬ志なりと答ふ三浦氏も道理なりとの事なり暫く話して歸る柴四朗氏今朝來る明後日歸坂する由なり今後の余の見込を問ふ余之に答ふ余は目的の定まらぬ以上は出仕せず若し今後余にして出仕したりとせば必ず目的の定りて出でたるものと知るべし余は國の爲にして身の爲にせねば決して後藤氏が如き輕卒の舉動は不致と知るべし同く午食をして別を告ぐ三浦氏より歸り掛け富士俱樂部に寄る幹事改撰の總會なればなり會するもの僅に二十名計なり佐々木、神山氏等も來會なり例に依り立食ありて歸る

同十九日陰朝井田讓氏來る昨日三浦氏の云ひし事と同じく大同の後へ余を推さんと意なり余法律の許さざるを以て辭す且成る丈け後藤氏を助くるは策の得たるを論ず井田氏亦之を然りとす藤田一郎氏手紙を越して余に入閣の事を勸告せり彼れ鳥尾氏の參謀として盡力し保守新報の主筆たり今余に就職を手紙を以て勸告す何ぞ其の疎暴なるや余淡泊なる返事を爲せり消防夫の紀念碑を建つるとして有賀嘉兵衛なるもの來る一圓を投じて返へす午後柴四朗氏來る明日出發歸坂の由なり後藤氏にも面會の由同氏の談に谷を入閣せ令むべき事を黒田氏に勸めしに黒田氏の言に其の事は昨年來幾度となく御内意を傳ふれ共御断申出たり已に熱海滯在中には御受不申様の手紙も來り候所東京より兩人來り終に止りたり同氏就職の事は希望する所なりと後藤氏の答に谷を樞密院へ今更出よとは甚た無理なり是大臣の位地に置べしと忠告したれば黒田氏必ず來談可有と柴氏に咄しありし由後藤氏の言眞欺偽未だ知るべからざるなり余が就職の六ヶ敷は黒田氏も飽迄知る所なれば決して容易に來らざるべしと信するなり四時頃より箱崎邸の會に付行く佐々木、細川、神山氏等及余の四人なり北御邸改革の事鐵道新株賣却の事指扇にある寺修繕金拾圓を出す事の決議あり北御邸の事は英國へ御相談に相成る筈なり後藤氏入閣の談紛々たり午後八時頃歸る弘田貫二郎氏來る醉臥に托し斷る

同廿日雨此の口藤田一郎氏社員瀨川光行なる者に手紙を添へ余が入閣の事を問ひ來る不遇して歸す出て村田氏に行く暫時談し福富孝季氏に行き後藤氏と大石氏との關係の事に及ぶ大石氏は全く潔白にして疑ひなし女學生三人來會皆土佐人なり孰れも出來よろしき人の由午食出る食後國友氏來る